

527
57

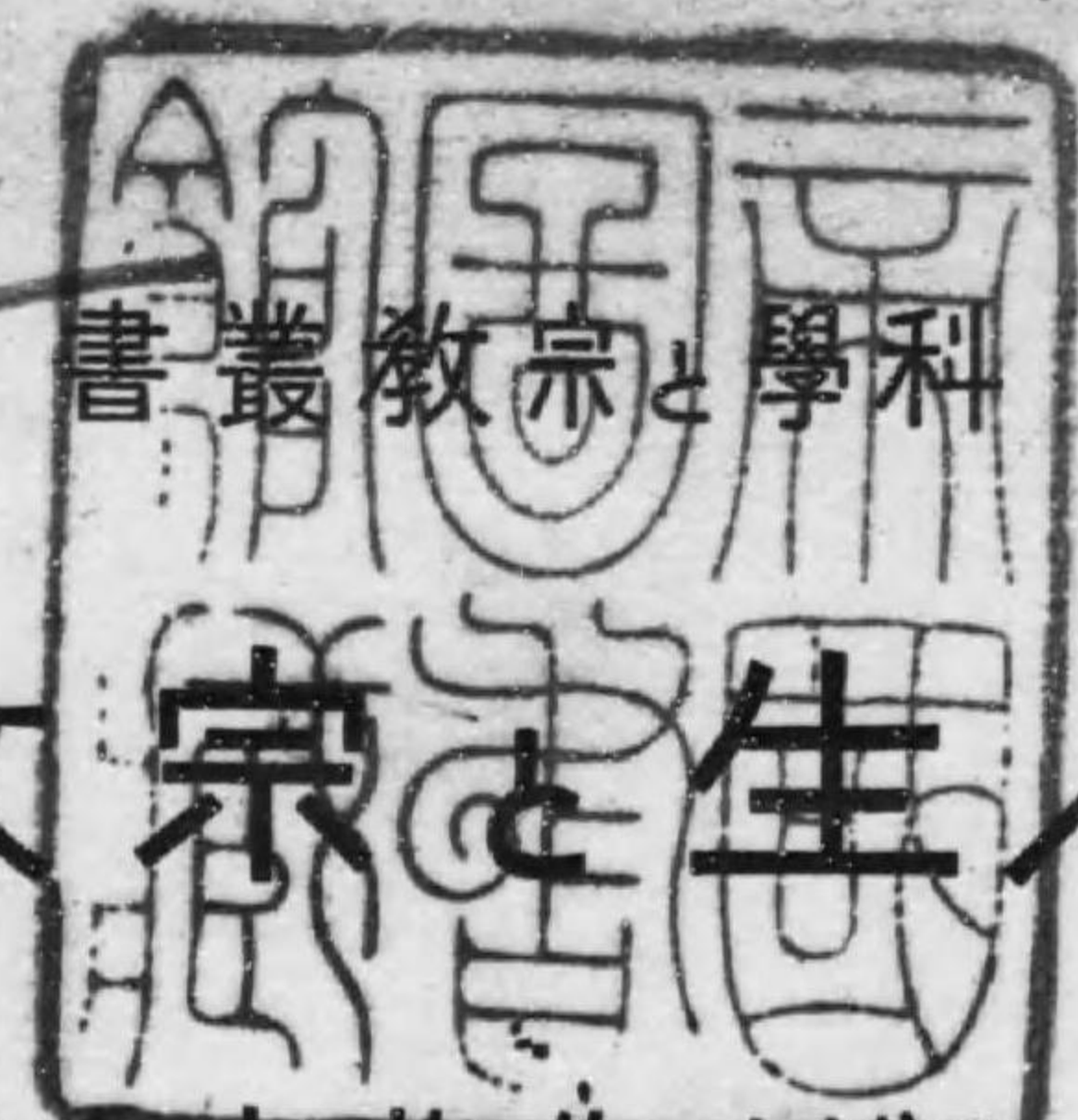


始



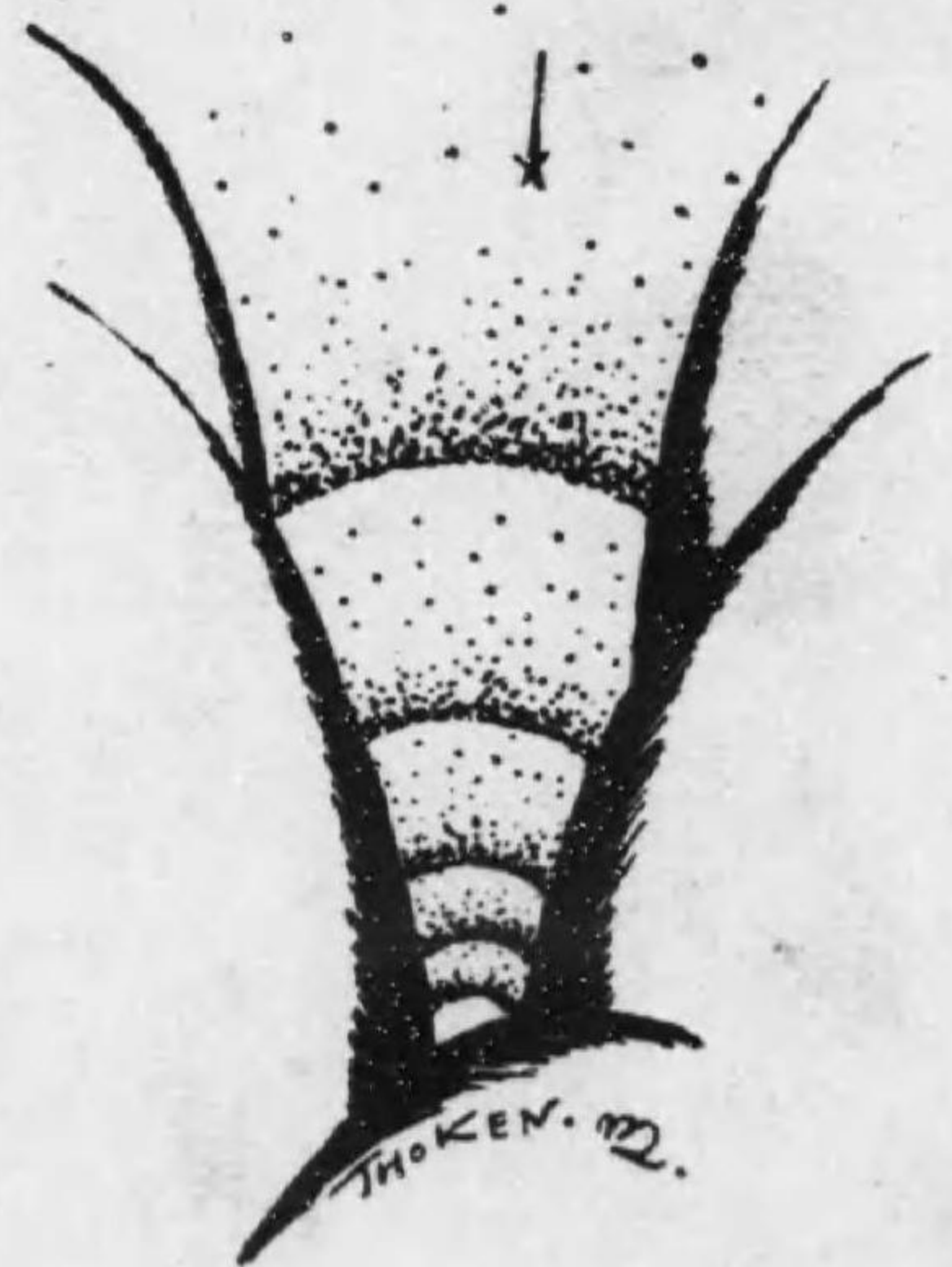
12432

ぬ



宗と生

著吉定藤佐士博學工



閣 生 厚



127-57

序

大震災に姿を化へて日本全國民の前に亂打された天來の警鐘を動機に、一人ても多くの國民が、一時間でも多く、活ける神の啓示に耳を傾け、實行の一步を進める事が出来るならば、それが何よりも國家に對する奉仕である事を教へられて、大正十二年十一月から、私の宅で、毎週土曜日の夜、宗教家庭座談會を開き、各自胸襟を披ひて、御互の宗教的體驗を語り合ふ事に致しました。

本書はその座談會の席上での、兄弟達の證言と、私の極めて貧弱な體驗の證言との記録であります。

私共が、肉眼が開けて居る以上、日毎の空模様、飛び交ふ雲の姿が目に見え来る如く、心の眼を見開いて、天の神に祈り得る以上は、私共の心眼に何物か寫り來らねばならぬ筈であります。

shy.

よし、その寫り來る消息が、黒雲の暗影であるか、水上に浮ぶ果敢なき月影であるか、乃至は冲天に輝やく眞如の月であるかは、別の問題としても、求むるものには何物かゞ、必らず與へらるゝ筈であります。

土曜の夜毎の集會では、命集各自が、その一週間に、與へられた信仰上の體驗を語り合ひ、その中から、眞の生命を見出そうと致して居ります。

丁度、科學者が、ある一つの未知の研究問題に對して、虎の巻狩法を實施すると同様に、私共は今、御互の信仰の經驗中に潜んで、而も凡ての中を一貫し流れて居る普遍的生命の流れを見出さん爲めの一つの準備であります。戰術で言はば、斥候戰の報告の様なもの、この小さな集會の眼目であり、またこの小著の目的であります。故に、この話の中には、とんでもない見當違ひの觀方もあるかも知れぬが、また、瓦石中に珠玉のかけらが、一寸、頭だけ出して光つて居るかも知れません。

私共は、今後少なくとも數年間、斯ふした斥候戰を續けつゝ、一方には靜かに、その

本體の所在地を思索洞察して、除々に、本陣を進めて行き度いと存じて居ります。

願くば讀者御自身が、玉石混淆せる、この座談會の記録の中から、能く瓦石を捨て、若しも潜んで居るならば、何物か、生命の光を見出して下さらば、私共の念願の凡てが達せられた譯であります。

本書が、斯かる印刷の形になる迄には、工學士森本彙逸氏、及び青野即本氏、その他同勞の兄弟達の奉仕的努力に負ふ所頗る甚大であります。心から、同勞の使徒行社同人の兄弟達に感謝の意を捧げ度い。

第一篇を上梓するに際して、座談會の主意を御斷り申し上げ、併せて活ける神の聖手が愛する同胞の一人一人の上であり、行き詰れる現代に、何物か新天地に入るべき光が投ぜられん事を祈つて止みせま。

大正十三年六月二十六日

佐藤定吉

目次

活ける宗教に來れ……………一

- 一、日本思想界の現状
- 二、佛教基督教及び科學思想三大潮流
- 三、三大思想の統一と信仰との關係
- 四、隣人愛と信仰生活の體驗

人生と宗教……………一二

- 一、新しい世界に入る二つの門
- 二、安心立命の根本義
- 三、信仰と法悦
- 四、人生に踏み出す第一歩
- 五、信仰の第一義
- 六、信仰は絶對に神に信任するにあり

人生と信仰……………二五

- 一、人生問題解決の鍵
- 二、死線を越えたる生涯
- 三、人は一個の發靈機なり
- 四、人は一本の靈管なり

人生永遠の目的……………三五

- 一、人間味とは何か
- 二、事實と眞理との關係
- 三、人の心は三道栓に似たり
- 四、人は靈と肉との二つの世界の境界線上に、立つ一生物なり
- 五、人生の苦樂と相對性原理

人生窮極の目的

- 一、人は神の姿を寫す一枚の鏡面なり
- 二、鏡の作用と人生との對照
- 三、人生窮極の目的は神の光を反射するにあり

私の未來觀

- 一、私の靈的體驗
- 二、人生究極の目的は何處にあるか
- 三、宇宙は神の經綸し給ふ大建築工場
- 四、人生はかくれた寶探し
- 五、人生より天國への流程
- 六、祈りは天國と現世との間に架せられたる橋なり
- 七、信仰生活と未來觀

信仰の極致

未來觀と見神論との關係

- 第一、一般的經驗に依る見神法
- 第二、物理的見神法
- 第三、化學的見神法論
- 第四、論的見神法
- 第五、直觀的見神法
- 第六、内省的見神法……良心は神の力の「メイトル」なり

國民よ！神と基督に來れ

- 一、信仰の價値
- 二、宗教は心の問題を取り扱ふ
- 三、學力權力の根本は何か
- 四、人間の價値は神の力の表現の度に依る
- 五、宇宙は神の建築工場
- 六、人生の眞義は神に歸るにあり

自然界の法則と靈界の法則

- 一、我とは何ぞや
- 二、動物界と、天上界よりの觀察
- 三、人は大白然の通譯者、説明者
- 四、『智』の一考察
- 五、人間一個は宇宙の縮圖
- 六、神の愛と引力觀

愛の力學

- 一、未知の『力』の眞相
- 二、靈の實在
- 三、愛の引力
- 四、電子の幾何學的構造と神秘の世界
- 五、相對性原律と幾何學
- 六、極大の宇宙と極小の電子
- 七、愛の力の幾何學的説明
- 八、一點愛、直線愛、平面愛、立体愛
- 九、世界人類救済の中樞軸

日本國民と基督教

- 一、國體と皇室と基督との關係
- 二、三者に於ける誤解は何にか

- 三、國家と宗教との地理的、歴史的關係
- 四、佛教、神道に就て
- 五、宇宙の眞理と基督教の眞理
- 六、日本は東洋の支關先
- 七、各種の宗教思想に對する日本の使命
- 八、皇室と統治の中心
- 九、基督教に對する誤解の二點
- 一〇、神の眞の意義
- 一一、宗教と統治權の神聖
- 一二、眞の兄弟姉妹主義は父なる神を信ずるにあり

大自然は神の無聲の聲なり……………一九四

- 一、使徒行傳の記事と自然科学
- 二、有神無神論の分岐點
- 三、生命の理法と宗教
- 四、人は一個の水車り
- 五、眞空放電の活教訓
- 六、光明の生はかくして開かる
- 七、その實例のかずとく



活ける宗教に來れ

日本思想界には昔より佛教と儒教との二潮流があつて、生れながらに我々の

思想の中に潜み込んでゐる。廣く萬象を見るに大抵の要素は二つから成立して居るものである、易學は太極の一より陰陽の二を設けてある、即ち眞髓は一であるが、その現れは二つであることを教へて居る。科學界に於ても眞理は本來一であるがその現れる形は二つである、電氣の本質は一つだが現はる處は陰陽の兩電子から萬物は成るのである。宇宙の形を見ても、天と地、左と右、暗と明の二つの要素が對立し、御互が調和して私共の現象界が出来て居る事は動すべからざる眞

理である。近頃迄物質を組立て、居るものは八十五、六の元素であると信じられてゐたが、最近には其の根本は一つの電子より成ることが明らかとなつた、即ち萬物を電子の一元に歸して居る。宇宙の諸現象も是を靜に考ふるならば、歸する所は一になる、唯々その見方によつて變るので、アインスタインの原理の根本もこゝにある。

日本の眞夜中を立場をかへて反對の世界の裏で見ると眞晝であるが地球は一つである、その如く外面は明暗相反する様に見へてもその眞相に立ち至れば皆一に歸するのである、世界の思想界から見ても、中央亞細亞の文化が分水嶺となつて、東に印度の釋迦、西にイサヲエルのキリストと二つの大思想に分れたのであるが、根本は一つでなければならぬ。日本は地勢の關係上、古くから印度、支那の思想を承けて來たが、そればかりでは恰も地球の半面しか知らぬ者、楯の一面しか見ぬものである。

處が近頃になつて俄にキリストの思想に觸れ現代の日本には印度及び支那の思

想と西洋思想の二大潮流が流れ込んでゐる。

この寒暖二つの流が合する處は渦巻と、濃霧が起る、そして凡ての者が五里霧中になるのである、東洋と西洋との兩思想が激しく渦を巻いて居るのが日本の現狀である、この渦中に、この雲霧中には七千萬の同胞がさまようて居る、これが現代の混亂と行き詰りを産んだ原因である。

西洋ではこんな苦しみを持たないのである、私があちらへ參つて、西洋人と話して居る時にも、その明確な判断を下す事、物事に思ひ惑ひのない事に驚いて、何故だらうと或人に聞いて見たが理屈はないのである、先祖から流れて來た生一本の思想と信仰を承け繼いでゐるためである。

二 佛敎キリスト敎及び科學の思想の二大潮流

昨年支那を廻つて來ましたが、支那の古い人は儒敎一點張りで頗る安定な生活をして居るが、若いものは種々の思想に混惑されて矢張り、藻掻いてゐるのを見

せられたが、これと同じ事が、日本全體に起つて來てゐるので、政治に、實業に、教育界に、社會事業に、何れも大きな龍巻を起して居る。然しながら此の暗黒面を他の一面から觀れば一大光明に觸れ得る。此處に二つの掌がある、これを氣合を合せて相撃てば、何れの掌よりも發し得なかつた大音響が轟き出づる、その如く若し吾人が東西兩洋の思想を掌を打つ如く一丸となすならば、茲に古き東西兩洋に見出されなかつた新天地が豁然開け來るのではあるまいか。これ我々日本人が有する一大使命であり、責任であらねばならぬ。

現代日本の混亂の要素を調べて見ると三つある、前に述べた二つの思想の外に更らに科學の力が織込まれて居る事實を見逃がしてはならぬ。

日本の維新後に入つて來たもので最も權威のあつたものは學問である。當時お寺は死人と追善のみを事として居た、その時、まだキリスト教を受入れる丈に素養が出來てゐない青年達は何んでも學問せば立身するものと信じ、立身のために大學の門に集つたものである、然し私の經驗を以つてすれば、この門を出ただけ

では人間としてはまだく足らぬ、富士山に上れば更に高い大空に月が懸かつて居ると同様、學問の窮極は無限であるが、當時に於て最も權威あるものと思はれたのが學問、殊に科學であつた、だから今日では科學的研究とさへいへば世人は之に權威を認めるのである。

斯の如く第一に東洋思想、第二に西洋思想、第三に科學思想といふ三つの思潮に見舞はれながら、日本の科學者は重箱の隅を小揚子でほじくる様な部分的の研究に没頭し日も之れ足らぬのである、佛教の僧侶も佛教丈けを墨守して他を顧みぬ、キリスト教の牧師も進んで科學や佛儒に突入して二つの掌を打たしめんとしない、この現状では、三つのものはとても融和混一し一潮流とはなり得ない。

日本にはこの三つの思想が渦を卷いてゐるのであるが、茲に私共はこの三つの思潮を歸一せしめ雲霧を晴らす可き責任を感じるのである、日本が今痛切に期待するものは、この三つの何れにも通ずる眞理の光、活ける神、活ける宗教を見出す一事であらねばならぬ。

三 三日月の夜に信仰の心

私はこゝに近頃學術に熱心な學者が活ける宗教に來つた例を申し上げる、ある帝國大學に化學のオーソリチーとして有名な理學博士が居りますが、可愛い坊ちやんが手術を受けて麻醉薬のため死んだ、試験管中の問題なら、よどみなく解決をつけ得るが、この人生問題に直面して、始めて心眼が開けた。眞剣に考へられた後、坊ちやんがキリスト教の幼稚園へ通つてゐた所から遂にキリストに信仰を求めらるやうになつた、五十幾歳の先生が坊ちやんの死から靈感に打たれて信仰に目覺めたのである、それ以來毎月聖書研究會を續けて居られる。

もう一つの例は矢張り同じ帝國大學の工學部の部長であられた、私の親しい博士が矢張三年前に小供をなくされて信仰に入られた。

先生のお嬢さんが築地の女學校に入つて居られたが風邪がもとで肺炎になり長い間を臥床された後、そのお嬢さんが天國へ召される前夜も天使の様な氣高い面

もちで御両親とお話をしておられたが、次の朝早く電話があつて先生が飛ぶ様にして病院に行かれたが、もうお嬢さんは冷たくなつて横はつてゐた。昨日まで、にこ／＼とした、笑顔を向けてお父さんといつて笑つて迎へて呉れた、今もそれを期待してゐたのに、その愛嬢がもう石膏の如く蒼くなつてしまつて居た、そのとき先生は、どこかで「お父様」と呼ぶお嬢さんの聲を聞かれた。先生は、こゝにゐる愛嬢はもう天國にゐるのである、こゝに横つてゐる娘は骨に肉がついて皮で覆ふた物質に過ぎない、愛する嬢は天國にありと、ハツと感じられたさうである、一種の靈感に打たれたのである。

それから先生は進んで洗禮をお受けになつたのである、五十五歳にして始めて靈の芽を見出したのである。

同博士は同じく道を求められて居られる他の博士達と相談して智識界に信念會を作らうといふ事になりました、私の所へ突然訪ねられましたので御用に立てば何なりとお使ひ下さる様にと申し上げたのですが、全然宗教と縁のない科學者が

こんな問題を考へて來て居るのは、科學者はその科學的研究態度を以て社會の種々の事柄にぶつかつて眞劍に考へるからであらうと思ふ、その研究の究極は是非共信仰に來らざるを得ないのである。

顯微鏡で見れば極小さいものでも明瞭に見ることが出来る、レンズを入れかへて之れを天空に向けると天體の姿がうつる望遠鏡となる。この筆法で科學者は普通人の見られぬ事をその持前の武器でよく天の消息を見るのである、我々の心は一種の受話器である、天來の無線靈話に感ずる受話器である。我々はこの受話器を充分働かせて天來の無聲の聲に靈耳を傾けねばならぬ。

今までの學者は、物質の方面に電車、汽車を走らすなどには大きな力をもつて居たが靈の問題になると不幸にして少しも考へなかつた、それが子供の死といふ如き大きな動機にやつと目醒めたのである。

私は子供を多く與へられて居るが未だ一人も失はず頭も未だ禿げない、それならどうして信仰に入つたかといふと、それは私が大學を卒業する間に「チブス」

に罹つて死にかゝつたことからである。それから、始めて自分の肉體と靈との關係を考へ出し、以來十幾年、道を求めてその問題の解決に勉め、そうしてその解決を完全にキリストの中に發見した者である、そして救靈と事業、即ち宗教と學術と産業界とを一丸とした事業をやらねばならぬと啓示されて、四年前さゝやかなる計畫を以つて研究所を始めたのである。

大學で私の講ずる講義は單に物質學に止まり進んで眞に活ける宗教に觸れる迄には今日の教育界は進んで居ない。私は、自分の使命を果し度いと救世軍の一兵士を志願し幾分でも社會的に御奉公をさせて戴き、爾來五年間を過ごして來た。

四

法入三言の信仰を法

由來眞の宗教に、隣人をおろそかにする宗教は一つもないのである、同じ家族同僚を見逃す様なものなら、眞個の宗教でないのである、それで先づ近所からと思ひ、この宗教家庭座談會を開いたわけである、何卒日本思想界に渦を巻いてゐる科

學界、東洋思想と、西洋思想、この三つをよく観察し、その中に流れる一つの眞理を明確に握つて、飢え渴いて居る、干乾びた我々の心の裡へ何物かを注ぎ込む御奉仕をさせて戴き度いのである。

眞個に復興の根本問題は我々の信仰問題でなければならぬ、最近のロンドンタ イムスに出て居たが、或大政治家の言葉に「大事業をなしたか否かは、いかに世の中に奉仕をなしたか否かによつて決まる、如何に戦勝に力を盡したかにあらず」といつて居るが、あちらの政治家は流石に偉いと思ふ、今日本に斯く言ひ得る政治家、軍人、教育家、實業家が幾人あるであらうか。

今後の事業で大事業と言ひ得るものはこの椽の下の方持の御奉仕、即ちサーピ スが出来るかどうかによつて決まること、思ふのである、願くば永遠から見下して價值ある働きを毎日毎日させて頂き度いものである。

一本の燐寸は小さいがよく大厦高樓を灰燼に歸せしむる、私共御互は小であるがマツチ一本が風に煽らる如く、燃へる靈の火が大風に煽られ、大東京を焼き盡

した如く、日本國民を滅亡に陥らしめつゝある罪惡の根を燃き盡さねばならぬ。最早や今日の時勢は議論の時代でなくなつた、實行に移らねばならぬ、古聖の所謂目讀や心讀にあらずして體讀でなければならぬ、斷行の時代であると信ずる。殊に帝都復興の大事業を先づ精神的に實現せなければならぬ大責任を有する國民御互は善と云ふ善は如何に微少な善でも之を實行しつゝ活ける信仰の證と致したきものである。

人生と宗教

一 新しい世界に入る二つの門

新しい世界に入るのに二つの方法がある、例へば丁度訪問客が奥座敷にすつと入つて御主人に御目にかゝるのと、第三者の紹介で玄關先で書生に取次を頼むのと二つあると同じ事である。

これについて、思ひ出したことがある。私が七八年前留學してニューヨークに着いたとき、高峯博士の案内で自動車に乗せられて、市中を見當もなく連れられホテルに入り、何階かの部屋に案内されたが、全く方角がわからぬ。それから更に、高峯博士の秘書の方に一週間位自動車で市内をあらら、こちら案内され、親切に町名や歴史などを説明して呉れたが、皆目市内の勝手が分らない。それで地圖を求めて自分の位置を先づ見極め、目ざす行先の

見當をつけ、そして一々歩いて見る事にした、それでやつと勝手がわかつたわけである。宗教に入るのにもこれと同じで、人につれられ人をたよりに行くと何處が玄關だか奥座敷だか、はつきりせないで戸惑ひをしてしまふのである。

夫れで人をあてにせず御互自身が何處でも自らの門を開いて、神の道を奥へ奥へと進み行かねばならぬが、初旅は何となく心細い、そこに地圖があり、また道案内があれば極めて心強く覺ゆる。只今の私には基督と云ふ道案内と聖書と云ふ詳細な地圖を與へられて居る故に大船に乗つた氣持であるが、まだその經驗の無い人々には、道を求めて旅立して間も無い幼稚な私自身の經驗談が御参考になるかも分らないと存じ、ありのまゝを申上ぐる。

私は小さい時お坊さんになり度いと思つたものである、一番偉い人といつたら田舎ではお坊さんであつたから、そう思ふのも無理がないのである、それに私の両親も佛教のこり屋でそのため私はよく御經を暗誦させられた、その經文は今でも暗誦が出来る、そして、小さい時はお坊さんと一緒にいつて行つて、お經を讀ん

だりしたので皆んな立派なお坊さんになれると言つて呉るし、自分も其の氣で居
 たのであつたが、どう間違つたのか中學に入り、高等學校、大學を歴て卒業してし
 まつたのである。殊に宗教と何等關係もないと思はれた物質學の工科などに入
 つたのである、然し『三つ子の魂百までも』と云つて居るが私が學界に入つて試験管
 を相手に自然界と角力をとつて居る時も、矢張り宗教氣分があるものと見えて
 種々な現實の醜惡な有様を見せられる時、甚しい苦痛を覚えさせられたのであつ
 た。時々私は良心が痲痺してゐて呉れるとよいにと思つた事が幾度あつたか知れ
 ない、今にしてよくこゝまでやつて來たものと不思議に思ふのである、私は高等
 學校の時、信仰に入つたのであるが、然し大學を卒業後活社會に出て濁流の渦中
 に卷かれた時には學校時代に養ひ來つた信仰は何の役にも立たなかつた、學校時
 代にこれでよいと思つた形式の信仰では到底駄目だと云ふ事を知つた。幾度か躓
 き幾度か倒れ理屈に捕へられた信仰に行き詰つて思ひなやんだ揚句に活ける生命
 の宗教を求めて、五年前に初めて救世軍の一兵士となつたのである。

二

山室大佐とは大學の學生時代私が工科の教友會の幹事をして居た時大佐の講演
 を御願ひに出たりした折から御近づきを願つて居つた、それから私が九州大學の
 助教授に赴任して後も九州へお出でを願つたりして、あちらこちらと大佐を御案
 内して、尙よくお近づきになつたのである、然し私はお恥しい程傲慢であつたので
 五年前までは救世軍に入らうとは思はなかつたのである、一日私は活ける信仰を
 求めて大佐の許を訪ねたのであつた、その時大佐はいつも祈りに加へられる人々
 の名刺挟みを出して、こゝにあなたとあなたの御家族とを書き込ん、で七八年間
 祈つてゐたといふ事を申された、私は既に兩親を失ひ地上に於いて心から私のた
 めに祈つて呉る者もなくなつたと思つてゐた、私をかくまで祈つて呉てる心から
 の大佐の愛と熱とに引きつけられ祈り程強いものはないといふ事を初めて知つた
 のであつた、そして大佐のために働いて見やうといふ決心がついたのである、それ

信仰、カヲシ
 信仰、カヲシ
 信仰、カヲシ

何處か自分信仰ニ引キ入レテ事ヲ
 知ツテ

以來私の信仰は復活して人生の種々の問題にぶつかつても難なく打ち勝てる、人世の困難も矛盾も暗黒も希望と光明に變化し來つた。なほ進んで、幾分でも救靈の御奉仕をさせて頂いて何處にも見出されぬ歡喜と心の富と力とを體驗し、極めて僅かではあるが、『それ天國は隠れたる寶を見出せる農夫の如し』(馬太十三〇四四)との歡喜、法悦を経験したのである、私共の價值は眞珠の如き隠れたる寶の信仰を持つてゐるか否かによつて決まるのである、これさへあらば一身一家の問題、國家社會の大問題も必ず解決し得べきを信じ得る、この行き詰つた日本の現状を思ふ時、ほんとうに希ふことは國民一人一人が信仰の力を握つてくれることである、この奥義を握れば何事も開けるのである、これは私の體驗から確信する處である。

三

或病人が一人の醫者についてその藥を戴いて全治したとしよう、その人は自分と同じ病氣で苦しんで居る病人を見た時は自分の病氣を治した醫者の藥をすゝめ

るであらう、丁度それと同じ様に私から私の苦悶を取り去つて新しい力を與へて呉れたその信仰を諸君におすゝめしたいのである、私のいやされた藥を差上げたのである、全く物好きでどうこうといふのでない、私の得た喜びを其の體驗を隣り合ひの方々に差し上げたいのである。

一體信仰は哲學や宗教學から入られるものではない、勿論物質科學からも入ることは出來難いのである、九死に一生を得た人こそほんとうにこの信仰の藥の味をしつかと握れる人である、社會の現實の醜惡に煩悶させられて食もとれなかつた私がいやされて初めて信仰の力を體驗したのであつた、この藥を差上げることには學術の講義にまさつて日本の社會に貢獻するものであることを信する、『人若し靈魂を失はば、全世界を儲くとも何に代へんや』『一人の靈魂の救はるゝは全世界の富に優れり』とあるのは眞理である。

私が昨夜ある研究會から歸途獨りで感謝しつゝ人が見たらば、おかしかつたらうと思ふ程ニコ／＼して來たのである、それは私の親しい友で十年間も小管の刑

九死に一生を得た人こそほんとうにこの信仰の藥の味をしつかと握れる人である、社會の現實の醜惡に煩悶させられて食もとれなかつた私がいやされて初めて信仰の力を體驗したのであつた、この藥を差上げることには學術の講義にまさつて日本の社會に貢獻するものであることを信する、『人若し靈魂を失はば、全世界を儲くとも何に代へんや』『一人の靈魂の救はるゝは全世界の富に優れり』とあるのは眞理である。

務所にゐた友が明日出るといふ喜びを思ひ浮べてゐたからであつた。然も其の人は全く生れ變つた喜びを體驗しキリストを信じた立派な人格者となつて出で來るのである、それを考へる私には全世界の富に優つての喜びである、世の中から捨てられるべき人が救はれて明日出ると云ふ然も潔められて立派な信仰を持つて出て來ると云ふ事を考へた時の心地はもう何とも云へぬ嬉しさであつたのである、ほんとうに充ち満ちた感謝である、金で買へぬ喜びである。

人の性は善である、元來が惡人でなくとも弱い故に負けるのである。何んな綺麗な心でも油斷すると惡魔に汚されるのである、綺麗なハンカチでもすぐよごれるのである、釋迦が菩提樹の下で涅槃の境に入られた時、弟子の一人が來て私は雪のやうに清い心になれたといつた、釋迦がそこにあつた馬糞をつかんでこれを見よといつたとあるがその修養が我々にも必要である、一寸やり方を過まると惡魔に乗ぜられるのである、きたないものに染まぬ様になることが出來憎いのである。弱い人には特別にそれが出來難くて遂に罪の奴僕になつて了ふ、氣の毒な

事である。プラスの力とマイナスの力との間に置かれた時、正邪の相半する中間に置かれた時、我々は動けぬのである、判断がつかぬものである。その時我々は苦しむのである、惡魔はこの隙に乗じて飛び込んで來る、この際自分で行くべき路をどつちへ開いて行けば好いかハッキリ見つめる丈で人生に處する第一歩を踏み出せるのである。

四

黒門町にお春どんといふ下女があつた、このお春どんは奥さんが持つて來て下さいといつた丈で奥さんが何を持つて來いと云はれたかに、氣がつく程氣のきいた下女であつた、或時奥さんから上野の廣小路へ買物に行つて來て呉れと頼んだ、例の調子ですぐ走て行つたが、廣小路に出てから何を買ふのであつたか見當がつかず、買ふにしてもお金を持たずに來てゐるので當惑したが、お春どんは仕方なくすこ／＼引返してよく命令をきいて出なほしたといふ話がある。私共も人生と云

ふ廣小路に飛び出して何うしたら良いかと迷つてゐるのではあるまいか、爲すべき御用を知らぬ爲めに我儘勝手をして居るのではないか、私達は何の爲めに此の世に生れたか、何を目的に食して寝て起きて働いてゐるのか、この處を、はつきりせなければ人生の意義が分らない、廣小路でうつかりしてゐると淺草へ誘惑され地獄に連れて行かれるかも知れない、然しお春どんは恥しさをこらへておわびして奥さんから使の用向を伺つたからこそ御用を果すことも出来、悪魔にも乗ぜられずにすんだのである。私共人生の廣小路に立つて何のために働いて生きて行くかといふことを先づ明確にしておかねばならない、右せんか、左せんかと判断のつかぬ時悪魔は私共を誘惑するのである、お春どんには御主人があつてその御用の爲め働いたから氣丈夫に買物をなし得て御使が果たせたのである、私共も神からの御用を云ひつかつて、この世に來て居るのではあるまいか。

五

私共の申す信仰といふものは神と人とに對する自分のつとめを言ふのであるが

その内容には御主人たる神様のあることが最も大切で、其の神様を信じて、その使命をはつきり承ることを第一義とせねばならぬ。

我々の周圍には春夏秋冬、千差萬別の變化があるがその内には見えざる原理法則の主人があるのである、これを信じてこそ千差萬別の變化の起ることを説明が出来るのである、この意味で科學者は一種の眞理の信者である、學者の價値はこゝにあるのである、ニュートンは我々の見えぬ引力をはつきり握つたのである、東洋思想で云ふ眼光紙背に徹したといふと同じである、百姓が出来ぬと匙を投げる難問題も、學者は極めて易々として成し遂げると同様に、神様をしつかと握つた信仰生涯にある人は、常人のなせぬ奇蹟をさへ行へるのである。

日本銀行へ御金を預けて安心して居られるのは皆さんは一種の銀行信者である。學問の信者、銀行信者等地上の信者は限りある安心を得るが、絶対に信して變らぬのは神を信する信仰である。外のすべての物をすてゝも信仰、これさへあれば何糞といふ力が得られるのである、幸不幸は心から湧くのである、心の

持ち様によるのである、何處も同じ秋の夕暮と觀じた淋しい月も釋迦は眞如の月と仰いで讚嘆し、科學者は宇宙の眞理をその月に見る。眞如の月よりも眞理よりも、まさつて神様を心の中に宿す人は何んなに偉大か知れない。活ける神様が人を支配なさる。神様を『父よ』と仰ぐその信仰を持つ事が何よりも大切なことである。

六

人間の眞の自由及權利は神に絶對に服従する事によつて得られるものである、地球が宇宙の眞理に絶對に服従してゐるからこそ、自由に自轉し公轉してゐるのである、一秒間に七里半といふ速度で廻轉してゐて何等脱線も停電もない、音なく、振動なく、十幾億萬の人間と無數の生物と山と川と海とを背中に乗せて極めて安定に、極めて自由に飛んでゐる。

若し地球が何か引力の法則を犯さば、即刻、全人類は虚空に挑ね飛ばされて全滅

するのである。恰かも子供が乳母の脊におぶさつてゐる如く人は地球におぶさつてゐるのである、何時はね飛ばされるか知れず、何時全滅するか知れない危険な地球上に住んで今日迄安全であつた理由は唯一つ、地球が法則に服従して來てくれたからである、ほんとうの自由を永遠に得たいとならば宇宙の眞理に絶對に服従することが必要となる。汽車、電車に軌道ある如く人にも人道がある、その道はずせば轉覆するのである。

空には十六億萬位の星があるが近年發見されたもの、内に三萬年光の星があると報せられてゐる、光が太陽より地球に來るのに八分十九秒いくらかゝるのが、この星は光が地球に來るのに三萬年かゝる遠方にあるのである、それほど無限の彼方にある、こんな星でも悉く宇宙の法則に従つて運行してゐるのである、我日本國民も世界のはてにあるのだが、人類共通の道に従はねば破滅より他に道は無いのである。

そこで私共は先づ第一に神を信じて、原子電子を信ずる如く、又両親を信ずる

如く、銀行を信頼するが如く、商賣の信用に於けるが如く、神の力と愛を信ずるとそこに眞の安心立命が得らるゝのである。

(大正十二、十一、十七)

人生と信仰

一

一體吾々はこの人生に何をしに來たかをよく考へなければ自己を取り圍んで居る凡百の問題はとけないのである。人生の見方も御互の異なる思想、異なる生活状態によつて差つて來ることは言ふ迄もないが、從來人々の心に流れ來たつた思潮を大別すれば次の二種となる、第一は唯物思想、第二は唯心思想である。私は先づこれ等の思想に對して科學の立場からその二つの何處にほんとの眞理が潜んでゐるかを靜かに批判し、その裏に流れる根本思潮を掴むで見度い。これを掴むことが人生一切の難問題を解決すべき鍵鑰であると信するのである。

二

此路を想ふべきは

私が子供の時から讀み、また聞いた日蓮の宗教に就いて、今でも頭の底に残つ

てゐるのは日蓮が小湊に生れて佛弟子となり、學に志し比叡山や三井寺に修學した結果釋迦の教へてる教理の眞髓の眞髓は法華經の中にあると觀破した。日蓮はそれを固く信じて立つた。迫害は潮の如く來るともこの眞髓を述べ傳へねばならぬとの強い確信に立ち、死線を越へて生涯を貫いた處に彼の偉大な力があつたと思はれる。

私はその氣分に共鳴する、私共が研究室で眞理を探求すると同様に、自己の心を試験管とし、人生を研究場として人生窮極の眞理を研究して見度いのである。即ち人生の究極點は何か、その光源は何處から來るかを見極めたいのである。日蓮に就て、今一つ偉いと思ふことは、彼が首の座にありし時、側に涕泣せる弟子に向つて『自分のために泣いて呉れるな、むしろ汝等の妻子のために泣け、天の下には己れが罪惡のため又は物慾のため死んだものが數限りなくあるが未だ眞理のためは死んだ者のあるを聞かない、自分は今その眞理のために死するのだから喜んでくれねばならぬ』といつた。更に彼が首の座から不思議に助かつてから彼は常

に『日蓮は既に龍の口にて死んだ、今生けるは菩薩の再來である』と自信して居た、この信念があつてこそ彼をしてあの壯烈な生涯を完うし、大事業をなさしめたのである。

一般に科學者もその研究に没頭し、宇宙に一貫せる眞髓を掴むまで寢食を忘れ、そのため倒れるものさへある。

今私共は人生といふ一大研究室に自己といふ一本の試験管を振りつゝ、その試験管中に起り來たる反應變化をつぶさに凝視して、人生問題の根本原理を握りたいのである。

ニュートンの萬有引力の法則、乃至は近代の電子論、相對性原理が科學的研究によつて生れ來り人類に新天新地を啓示した如く古來不可解と迄唱へられし人生問題は、鋭い科學的研究の刃をさし込み組織的の攻究をなすならば、人生の眞理は赤裸々に發かれ隠れたる根本原理が明かとなり、科學の切り開きし新天新地以上の驚くべき生命の新天新地がそこに開拓せられるのではあるまいか。私は前に申し

上げた唯物主義、唯心主義を靜かに考へて見るに、それ等に通ずる一道の眞理が何れにもあると思はれる。一つの實體を異なつた立場から視つめた結果、互に相違する結論に達したのであらう。博覽會などでよく凸凹の表面を持つた鏡を出品せるのを見るが、その鏡の前に立つと自分の顔が或は細長く、或は横に長く、化物の様に見える。人生も丁度それと同じであるまいか、鏡に長く或は平らに見えても自分の顔は普通の顔である、正しい直ぐな鏡の前に立つ時には、ほんとうの顔が寫るのである、曲つた鏡の前に立つても、それにまどはされずに、自分の顔の眞相をはつきりと知る方法を見出さねばならぬ。

一體唯物論は三百年來特に盛んになつたが、唯心論は昔から相當に手強く主張されて居た。近頃になつて自然主義が自然に歸れ (Back to Nature) と叫び出したのである、この自然主義もルーソーなどの時代はよい考であつたが、日本へは誤り傳へられてゐる、私はこの三つの思想は電氣に於ける三相電流の如くに、異なつた相の様であるが實は根本は一つでないかと思ふのである。

人は元來、靈と肉の兩相の限界面に生きる生物である、故に靈肉二つが完全に協調し合致した所に眞個の人生が生れて來るのである、これを述べる時に當つて必ず自力と他力との問題が起つて來るので先づこの自力と他力との關係を先に述べておき度い、私は結局自力といひ他力と云ふも何れも楯の一面を見たので、この自力他力が相協調しなければ自力も他力も死んでしまふのであると信ずるのである、わかり易い例で一寸申して見たい。

三 人と一回の発電機

水流が一本の鐵管に通り込み發電機を廻轉すると水中にも、又鐵管にも何れにもなかつた不思議な電氣が発生し之れを活用すれば電熱や、光や、動力が現はれて來る、水だけ流れても、又發電機が工場に据えられただけでも熱も光も力も出て來ない、自力と他力とは丁度この水流と發電機とに於ける様なものである。

人間は生れ乍らに一個の不思議な發電機である、信仰の電流が肉體の鐵管を流

れて、心のダイナモが動き手足は針金となつて社會的に働き必要の光と熱とを供するのである、己れといふ自力に神の他力が流れこんで初めて人生を照らす光、一世を動かす動力を發揮するに至るのである、基督といひ、釋迦といひ凡ての聖賢は皆神の御靈を流した一本の靈管であつたのである、基督は實に全人類中、最高の落差を有する空前絶後の一大靈管であつた。

斯く觀じ來る時に從來の自力論者はこのダイナモのみを見た側面觀の人であり、他力論者は山上にたゞへられた潜在狀態の水の力をのみ見た一方の側面觀の人であることが悟り得るであらう。

箱根へ修學旅行した生徒を蘆の湖へ連れて行つてこの神秘の色をたゞへた紺碧の水もこの堰を切ると、大瀧となりその水力があつた電燈を點じ電車を動かすのであるとの説明を聞かば生徒は水の驚くべき力を讚美し他力を高潮するであらう、第二の修學旅行の生徒には發電所の内部を案内して、斯く高速度に發電機が廻轉して電氣が起り、それが針金に通じて電車を動かし電燈を點するのであると教へ

他力とは

イ他力とは

すまふ

又他力とは

後よふ

湖うれふらば

ゆんぎんらん

すまふ

すまふ

ゆかへてらぬ

海解

たならば、發電機の自力を驚嘆讚美するであらう。この發電機さへあれば光も動力も生ずると考へる所に自力論が起る、水流があればこそと思ふ所に他力論が生れる、何れも完全な一組の力の一部を見たものに過ぎない。人生から蹴落されて、罪の暗黒裡に世を咒ふ人さへ、神を信じ靈の力が流通する時僅かな年月の間に全く聖化され、顔も希望にかがやき、前科數犯の大悪人が全々別人の如く再生變化するのも、自力、他力協調の水力電氣の一例に他ならぬのである。

四

人間は生れながらに肉體といふ鐵管と、心なる發電機を與へられて居るが、この二つ丈では力は出ない、どうしても天來の靈力を水流の如くに自分の心の管の中に受け入れなければ吾々は眞個の人間となり得ないのである、此處に人生の堂奥の門を開くべき唯一の扉が存して居る。

『求めよさらば與へられん、叩けよさらば開かれん』

神と人との協調、そこに人生の美花が開くのである、こゝに信仰生活の果實が熟するのである。

人。は。一。本。の。靈。管。で。あ。る。

神の靈を受け入れて、初めて人の心が光るのである、輝いた生活に入り得るのである、終りに一寸タゴールの詩から學んで見たい。

印度の思想家で哲學者なるタゴールの詩の中に次の話がある。

「人生は恰も重い水甕を負へる旅人が荒野原を行くが如し」と譬へられてある、疲れ果て、力なく日暮れて道遠しの感じを思ひ出すであらう、これは人生を渡る誰でもが経験する所である。

「旅人よお前の身體の重みは水甕の水ではないか、こぼすまいとして一生懸命に執着してるから究屈て堪へられないのである、自我といふ水を自分の中につめて一滴も溢すまいとしてゐるのである、汝の足元に大きな流れがあるではないか、大河の中にとび込んでしまへ、そうすれば軽くて自由に泳げるのである」といつて

居る。不快な顔をしたり、神経衰弱などになるのは、この自我の濁水を溢すまいとする不自由から起るのである。己れといふ自尊心が自分を苦しめるのである、赤裸々の己れになつて神の恵の大海にとび込む時、自由になれるのである、この旅人の姿が私達の姿ではあるまいか、神の御靈の流れに自由に身を浮かしてゐる時、何らの無理もなく不自由もなく目的地に運ばれ、そこに新しい天地を見出すのである、自己と云ふ重み、水甕を捨て、神の大海に飛び入るには努力が要るのである、そこに信仰と決心が要るのである。

皆さんも御経験なすつた事と思ふが、九十九里濱に海水浴に出かけて泳ぐ時白浪が立つて居る所は浅いから自由に泳げない、泳げる所へはこの白浪をくぐつて進まなければ行けないのである。大抵の人は白浪におじて進めないのである。かくして人生の五十年、六十年を同じ場所を行きつもどつ過すのが常である、思ひ切つて沖に行けば自由に手足を動かせる深い恵みの海があるのである。自由に泳ぐ所を求めて居ながら岸邊にたゞづんで岸邊と白浪の間を行きつもどつし、

るのが一般の信仰を求めるとは、私もこの時代を通じて来たが數年前思ひ切つて白浪をくぐつて沖に出たのである。それ以來惠の大海に歡喜と自由の航海を續けさせて頂いて居る。

そこで信仰を求めるとは、次の三つに分けられると思ふ。ターゴールのいつた水甕を擔いで自ら苦しんでゐる時代、進退にまごついて行きつもとどりつしてゐる時代、それから沖へ出て大海の惠に浴して居る時代との三階段があるやうに思はれる。

どうか此の際思ひ切つて、信仰の沖に出て天國の彼岸をさして一生懸命に進み行きたいものである。(大正十二、十二、一)

人生永遠の目的

一

『汝らは地の鹽なり、鹽もし効力を失はば何をもてか之に鹽すべき後は用なし、外に捨られて人に踏まる。のみ、汝らは世の光なり、山の上にある町は隠るることなし、また人は燈火をともし、升の下におかず燈臺の上におく、斯く燈火は家にある、凡ての物を照すなり、斯のごとく汝らの光を人の前にかがやかせ、これ人の汝らが善き行爲を見て、天にいます汝の父を崇めん爲なり』(マタイ傳第五) (章十三、十六)

馬太傳の山上の垂訓は他日詳しく申し上げたいと思ふが今はこの地の鹽、世の光について學びたいと思ふのである。

鹽は鹽の辛味、砂糖は砂糖の甘味をもつて居るからこそ、各々鹽として、砂糖と

して用が立つのである、それと同様に人間は人間味をもたねばならぬ。鹽が鹽の價値を失いて辛くなくなると、捨てられてしまふ様に、人間に人間本來の味がなくなると棄てられるのである、然らば其の人としての味を有するとは何であるか、それは山上の垂訓の『汝等は世の光、世の鹽なり』の一句が實に深い哲理と眞理を指示して居る。この一句を恰も鑛夫が多くの鑛石の内より金鑛を採掘する如く探し求むれば、その中に潜む尊い眞理の光が見出し得るのである。

自然界は實に神が自ら書ける一巻の書籍である。科學者はこの意味からして試験管を通して常に神の教を読み、神の言葉を聞いて居る。更に一步を進めて科學者の研究態度を以て神の世界を見たなら何が見えるか、そこに私の研究問題が潜んで居るのである。

一體私共がえらい眞理を含む本を読んでその眞理に觸れるのは、結局私共の心の中に有する眞理をその本を媒介として見ることによるのである、元來自分達の心の中にもてる考なり、思想なりを書物などに發見してこそ始めて、案を打つて

喜ぶのである。若し眞理を眞理として感せぬならば、自分の心にその眞理をもたぬことになる。丁度眞珠の價値を知れる婦人には眞珠は心から尊ばれるが、豚に眞珠を與へても無駄である。盲人に花が見えぬ如く、聾人に音楽がきこえぬと同様で、聖書の中にある深い眞理も亦、心の盲聾者には全く豚に眞珠である。聖書の價値は自分が深い信仰の體驗を與へられ、基督の御心を日々に新たに學ぶ求道の者に始めて、東天の旭日の如く、その眞理は輝き來るのである。我々はただ、考ふるだけでなく、信仰の體驗生活に入り、聖書に對しても目讀心讀の域から、更に進んで、體讀實行の域に入らねばならぬ。こは丁度科學者が、試験管で實驗するのと同じである。要は理論的考案と實驗、即ち思索と體驗との協調が完全でなければ、眞の人間味は味はれないこと、信ずる。

私は近頃體驗したことを申し上げたい。これは諸君が既に體驗されたことを、もう一度新しく呼び起すことになる、さもなければまだ體驗せざる人々の前に思索の一問題を提供する事ともなれば幸ひと思ふのである。

こゝに一言御注意しておき度い事は、事實と眞理との區別である。論より證據といふが、證據たる事實と眞理とを、科學者の立場からキツパリと區別せねばならない。究極の點に來れば事實即ち眞理、眞理即ち事實であるが、眞理ならざる事實が往々にしてあるのである。間違ひないと信じて行つて居る事柄でも、間違ひだらけの事をして居る時がある。科學者は所謂事實と稱せられる事象の中から、眞個の眞理としての事實を撰び出すのがその任務である、然し乍ら多くの科學的考察に慣れぬ人は、自分の間違つた物指に當てはめて判斷し勝ちである。白い花を見るにも、青眼鏡をかけた人は『青』と見、赤眼鏡をかけた人は『赤』と見る。科學者はその正直な研究から、萬人が時と場所とに關せず、不變な眞相の『白い』と見るのである。従つて科學的に事實を觀ない爲めに、往々それが誤解と争鬭の原因となつて居る。自分の心を標準として、間違はぬと云ふが、色眼鏡をかけて見、狂つた物指で判斷した事柄は決して確かな事實でない。

世には自分がこの色眼鏡をかけ、曲つた物指を以て、曲直を判斷してゐながら、

それに氣付かぬ人が多いのである。事實をありのままに見る科學的觀察法を、私共は人生萬般の問題に當てはめて、人生の眞相を握ることが最も大切である。自然界の出來事に間違ひは比較的少ないが、人事界にはよく間違ひが起る。それは御互相對的立場にある人々が、科學的な正しい見方をして居ないからである。

『眞理即事實』の人生を見ることが、極めて大切な事である。斯かる觀察法を私は自分の心の試験管に始終向けて居るが、此の一週間中に次の二つの事實を體驗せしめられた。

一、内省する時の心の眞相

二、人間本來の味は何か

人生は一つの大きな研究室で、人間は一本の試験管である。試験管を振つて變化の眞相を見る如く、心に現はれる變化、反應を見ると生命の根源たる神の眞の御姿が見えなければならぬ。一本の自己といふ試験管を通して、靈の父なる神を拜することが出來なくてはならぬと思ふのである。

天上、天下是れ皆物質なりとの、古い物質観は全く打ち壊かれて現代は、天上天下唯電子あるのみてふ、震天動地の大事實が明示された。この大眞理は、實にクルツクス氏が、真空管内放電の事實を、眞理として確めた結果、未だ夢想だにせなかつた電子の世界が、開けて來たのである。私共は自己といふ心の試験管に起る事實をよく見つめる時、もつとく大きな世界が見えて來るのではあるまいか。私は人の心といふものを、よく觀察して見るに、人の心は丁度化學實驗に用ふる、スリーウエーコック(三道栓 Three way Cook)の様なものであると思ふ。この三道栓は、二つの方面から來る氣體なり、液體なりを交互に一本の管を通して導くのである。一方の方の氣體、液體が通るときには、他方の出口は閉ぢられる。又同時に二方面から流れ込むことの出來ない仕掛けになつてゐるのである。人の心にもこのコックが備へられてゐると思はれる。

人は靈と、肉との二つの世界の境界線上に、呱呱の聲をあげ、その線上を歩み續けてゐるのである。丁度アメンボーが水面即ち氣相と、液相の境界面に生活して

ゐる様なもので、若しアメンボーがこの限界面を究屈なりとして、水中にもぐり込んだとせば、アメンボーは溺死するばかりであり、又反對にトンボの様に空中に飛び上らんとしても、翼のない蟲は又水面に落ち來る。とび上つた反動に水中に深く墜落するのである。アメンボーにとつては、どうしても限界面の表面張力のある水面が、最良の安住の場所である。その如く人は物質丈でもない、靈丈でもない。靈肉二つの調和した世界に於てのみ人間が安全港を見出すのである。然し若し前述のコックが心にないとせば靈肉、清濁の水が一緒に流れ込み、一方に信仰生活をしながら、他方にデカタン生活をする矛盾した生活が起るのである。不調和な世界が生れるのである。この矛盾した生活の起らぬ様、神様は我々の心に、三道栓を與へ給ふて、靈水と肉水とが流れ込まうとしてゐる所に、心の三道栓が置かれてゐるのである、アメンボーが水中にもぐるとき、その生を失ふと同様、人間も肉水に身を沈める時、その生を失ふのである。物慾名譽と只管私慾のために、日も之れ足らず利己的生活に身をやつす人は、人に棄てられるのである。

吾々の心の中にこの肉水が注ぎ込まれんとする時に、三道栓をひねつて靈水を通すとき、肉水はとまつてしまふのである。悪習慣も罪の穢れもないすがくした自分を見出すのである。そこに始めて永遠から見下ろして、生甲斐ある生命を始めて自分の中に見出し得る。そこに物質を持てるにまさる幸福が、心に充ちあふれるのを感じるのである。

一體人間の苦しみとか不幸とか、いふものは皆相對的のものである。小供にとつて二貫の荷は逆も運べない程の重荷だが、大人にとつては輕過ぎる位の荷である。困難の大小も内的の力の大小によるので、心中に強い力があれば困難は少しも感じなくなる。この困難に打ち勝つて不幸を幸福に變ずる、靈的の大きな力は實にコックをひねつて肉水をとめ、靈水を心に導くことによつて達せられるのである。

釋迦がその妻子や金殿玉樓をすて、山に入つたのも、畢竟心の中に靈の水をゆたかに注ぎ込まんがためであつた。吾々はこの三道栓を與へられてゐることを忘れて靈肉一緒に出さうとし勝ちである。兩方一緒に出さうとすれば、コックの作

用でどちらも出なくなるのである。「人は二人の主に兼ね仕ふる能はず」と、基督は教へられて居る。二兎を追ふものは一兎をも得ない。「サタンよ後に退け、唯主たる汝の神をのみ拜すべし」とは三道栓の一方丈を開けよとの教へである。

『神の國とその義とを求めよ、さらばなくてはならぬ一切のものは與へられん』の金言は、先づ心の三道栓を捻つて、天の靈水を心に溢れしむる時、然るときに鹽の辛きが如く、眞人間の本來の味を出すことが出来、それに必要な一切が與へられるとの眞理を教へたものである。その如く靈的の大きな力を握つて進むとき、不斷に神よりの靈能が注がれ、聖旨をなさせ給へと祈り進むとき、聖旨を行ふべき必要な力と、入用なだけの物質は凡て與へられるのである。若し祈つて與へられぬ場合がありとせばその時は、それが與へらるれば三道栓の捻がもどつて濁水の流れ出る憂ひのある時である。人の心の眼は近視眼であるが、神様の眼は大望遠鏡よりも更に永遠を視透して居られる。その立場から私共を指導して居て下さるのだから絶対に神を信じて従ふべきである、その立場に歸つて、天より地上の自己を見下

す時に、神の深慮がよく分かり、丁度我儘な小兒が慈母に無駄ねだりして居る様な姿が、よく見えて來るのである。そんな時の祈は聽かれるものでない。疾く悔ひ改めて、基督の救に歸り、基督の心を心として、神に祈り求めねばならぬ。その時の祈は必ず天に達し聽き届けられるのである。

繰り返して言ふ、先づ神の國と、その義を求めよ。三道栓を捻つて、靈水を心の管に躍り注ぎ込ませよ。はかり知れざる神の力は満ち、心の發電機は高速度の廻轉を開始し、暗黒と見えし人生は永遠の希望の光に輝きそむるであらう。

人生窮極の目的

一

人間は一本の靈管である。神の靈管となる事が、人としての本分であると、私は前に申した。只今例に引いたアメンポーから眞理を暗示されたので、こゝに他の言葉にて同じ眞理を申し上げたいと思ふ。

アメンポーの住む空氣相と液相との境界面は、その面でなければ持たぬ性質を有つて居る。即ち光を全反射する性質が夫れである。水中にあつては、透過、吸収、屈折はあるが、反射はせぬ。空氣中の水蒸氣も只屈折して虹を起すが、鏡の様な反射はない。兩相境界の水面丈が、鏡の如く光を全反射するのである。

宇宙には、多くの星があつて太陽の光を反射するが故に、暗黒も光明となるの

である。月が太陽の光を反射して、暗夜にも太陽が光つて居ることを證據たてゝるのである。光源から發する光を若し反射するものが世の中にないとせば、全世界は暗である。草も木も動物も冷たくなつて枯死してしまふのである。隠れた光を反射し、隠れた力の根源を見ゆる形に現はして來るのが反射である。若し反射面がなければ、私共の世界は光も熱もない冷たい暗黒になつてしまふのである。

海面が太陽の光を全反射するから、光なき地球も他の星の世界から見れば、暗黒の空にかゞやく星となる。人は神の光の反射鏡となるために人生に生れ來たのである。吾々人間が、靈界と物質界との限界面に置かれた自分を、この意味からよく考へて觀なければならぬ。私共人間は、各々神の光を反射する一個の反射鏡面である。吾々はよくこの眞理を悟らねばならない。

限界面の人間が、神の光を全反射せなければ、靈の世界は光を失ふのである。水平面下に住む動植物は光を吸収、透過こそすれ反射はせない。又幽玄界に靈人の存在があるとすると、水蒸氣の夫れの如く特殊の場合に、虹の幻影を生ずるだ

けで地上の凡人には不斷の光とけならぬ。一切の生物界を通觀して人は神の光を全反射して、神を知らぬ暗き心に光を照らし、又水平線下の動植物一切の生物を祝福せんがために生れ來つたのである。

光が見ゆる形狀に現はれて來なければ。草も木も動物も一切の生物は一刻も生存が出来ない。生物が生存せなければ、永遠より永遠に亘る神御自身の手に成る宇宙建設の設計に狂ひが來り、神の御計畫に挫折を生ずる。宇宙の物質界上の神の設計の御事業のプログラムの一節が欠ける事となる、實に人の生存は永遠に亘る神の御業のプログラムになくてならぬ大切な役目を仰せつかつた大事な器である。

誠にまことに人は神の姿を寫す一つの鏡となるために生れ來つたのである。決して我儘、勝手な罪の生活をなすために來たのではない。實に人は神の光を反射する一鏡面として此の世に生れ來たのだ。清く拭ひ潔められた鏡面をさへ見れば、人の姿がハッキリと見える如く、人は神の姿を明かに寫す鏡となる爲に生れ來たのだ、眞の人間は一人々々が神の姿の鏡となるため地上におかれて居るのだ。鏡が

光を反射する如く、人は宇宙の生命たる神の靈光を反射しさへすれば、人としての全ての目的が達せられるのである。聖書に『生命は光なり』とあるが、この意味ではないか。基督が『汝の光を輝かせ』と仰せられるのもこの意でないか。又自分と隔つた隠れた位置にある物體も、鏡を用ひて反射さして見れば、見られぬ位置にあるものも見えて来る如くに、神の光を反射する鏡面を通して見れば、見えなかつた神の御姿がありくと、手にとる様に見えて来るのである。私共は、その如くに、神の御姿を明確に寫す鏡面となるために、呱呱の聲をあげて此の世に生れ來たのである。故に修養といひ、學問教育といひ、道德倫理宗教の一切が、神の姿を寫す鏡面として研き上げるに必要な一手段に過ぎないので、世人の所謂精神修養も、結局は神の反射鏡となるべき必要條件の完備に務めさへすれば良いので、この目的に關係のない、不必要な事には一切、目もかける必要がないのである。重ねて言ふ。人間の地上に生れ來つた窮極目的は神の姿を寫す一反射鏡となるためである事を忘れてはならぬ。

『我を見しものは、父を見しなり』、『天の父の完きが如く、汝等も完かるべし』との基督の御言葉は、實に千載不朽の一大真理で、よくも人生の窮極點を極めて簡明に仰せられたものであるに驚嘆するばかりである。翻つて歴史を見んか、此の世に生を待たりし者は、幾百億萬人なるを知らない。けれども神の前に反射鏡として、光を永遠に照り輝やかして居るものは皆、此人生窮極の目的を悟つて、身を挺して、獻身奉仕の生活をした者のみである。吾が日本、七千萬同胞は同じくこの靈と肉の兩界の境界面上に、一反射鏡として置かれて居るに拘はらず、只この真理を知らざるが故に、自己の鏡面を裏返しに、光に向つて逆に向けて居る。故に光るべき鏡を與へられ乍ら、暗黒の醜惡な姿が寫るのである。七千萬同胞の全てが一日も早く神と基督を信じて、全國民が世界に耀々たる光を放つものとなつてもらい度いものである。

太陽にはその光を反射する鏡面が必要である如く、神様には信仰に燃ゆる地上の人が必要なのだ。地上に反射物體がなければ、光が宇宙に充滿して居ても、人の

前には出現し來らぬ。文化から見ても、人類發達から見ても、これ以上の損失はまたとあるまい。

往いて、吾が同胞の心の鏡の方向を百八十度廻轉せしめよ。さらば忽焉として、日本國民の人心に光は來るであらう。眞の精神復興は、この時實現せられるであらう。吾人は強いても、吾が同胞を神の光の前に、連れ來らねばならぬ。

(大正十二、十二、八)

私の未來觀

近來私自身の胸に、稍々明瞭に未來觀が見えて來たので今回は、私の靈的經驗の一部を申し述べたい。纏つた私の未來觀については、何れ後日改めて申し述ぶる機會があるだらうと思はれる。

本年の大正十二年十二月十二日といふ日は、人間の運命に關係があるといはれて居る「十二」といふ數字を三回重複した日である。それに加へて、私は去る十一月二十日に「十二」を三倍した誕生を地上に迎へた。私は「十二」の二倍の歳に大患に罹り、生死の間を往復し、九死に一生を得、その際私はある深い信仰上の靈的經驗をしみじく味ふことが出來、それ以來私はほんたうの信仰の門に入り穢土の如き自己に死して神に生きんと、確實な信仰の第一歩を踏み出した者である。

鳥兎夕々、早や十二年の月日が夢の如く過ぎ去つて、今年十一月二十日に「十二」を三回重ねた誕生を地上に歡喜と希望に満たされて迎へ得た。そして私は此の記念すべき誕生を一轉機として人生第二の時を目がけて、天國への旅路の第一歩を踏み出したいと祈り求めた。「十二」を三倍した誕生の後に、間もなく再び十二を三回重ねた。大正十二年十二月十二日の日を迎へたので、私は何ともいへぬなつかしさを覺えた。そしてこの日は終日祈りつゞけて過したいと思つた。かくして私の生涯二度と呼び難い十二年十二月十二日を最後の夜の十二時迄祈りつゞ、且つペンを走らせつゞ過ごし、ついに靈感に溢れて、幾十頁かを私の靈感録に深更、一時過ぎまで書き續けたのであつた。この夜、深く更けて、四邊圓として聲なく、獨り書齋に神と物語りつゞ、ペンを走らす内に、私は今迄信仰に入つて以來、解つた如くで未だ解らぬ氣持ちで過ごした「神の本質と死後の生命」といふ大問題が豁然として、明瞭に心眼に寫り來り異様な靈感に打たれたのである。一體この靈感は何時でも得られるかといふに、決してそうでない。精神の統一され

た純粹意識の時にのみ得られるので、丁度小波一つ立てない澄み切つた水面の如き状態になつた時だけに限つて得られるものである。心は一つの極めて鋭敏な、靈波の受話器である。無線電信でも、空間に雜多の電波が混淆し、或は途中に障害物があるならば聞えない。有線電話でも混線すれば能くきゝ取れないと同様である。私共の心の受話器も全くそれと同じく、自己の一切の雜念を捨て、外界から何一つ心の波をたてない、微動も受けない、澄み切つた時に初めて、はつぎりと天來の私語がきゝとれるのである。

キリストが祈り給ふ時、弟子を離れて、夜おそく或は早朝、人なき山に行かれ、祈られたのもそのためであり、又釋迦が喧騒な宮殿をすてゝ、山に入られたのも、この心の状態を求めんがためであつたに違ひない。私自身が十三年前から屢々體驗して、適確さに自ら驚いて居るのは、朝早く熟睡からさめて、意識に返つた瞬間に直ちに引き續き祈りの心に移る時である。一夜の安眠に依つて、心の波は鏡の如くに静まり、小波一つ立てないで澄み切つて居る。外界の雜音も、內的の

雜念も何一ツ入り込まぬ時に、先づ第一に祈りの心に移る。その時に響き来る無聲の聲、その時に寫り来る現象は私の經驗中、最も確實な信ずべきものである事を、私は幾度か繰り返し體驗させられる。斯かる靈的經驗は十三年前、ふとある機會から不思議に與へられるに至つた、それは父の死の時からのことである。

私が大學卒業の間際に、ある朝、將に眠から覺めんとする刹那に私は不思議な夢を見た。(今から考へると、これは普通の夢の状態と違ふ様で、眠から現實に移つた現實意識の時であつたと思はれる) 私は父の死を見たのである。太陽が西山に沈む様な莊嚴な父の死、その部屋の有様、周圍に家族が集つて、泣き悲しんで居る有様、私自身が泣いて居る有様が見ゆる。それから葬式の事や、その後の種々な有様を見せられたのでハットおどろいて、妙なものを見たものだ哩と不思議に考へてゐた、と言ふのは、しばらく父から音信がないが、三週間程前には、健全だとの手紙もあり、又誰も病氣との通信もよこさないもので、急に父が死なれるとはどうしても私には考へられなかつたからである。

處が突然その日の午後、「父危篤。すぐ歸れ」との電報を手にした。其瞬間、私は朝の不思議な幻を思ひ出して、これは大變だと、おどろいて大急ぎで歸國した。父は私が靈感して後、一週後の朝、實に莊嚴な、大往生を遂げられた。最後の間に、自ら手を展べて珠數を掛けさせ、合掌し、法衣を上部につけしめ、經文を頭部に置かしめ、莞爾として大きな光を残して靈界に入られた。その時の、病室の様子、死なれた時の有様、葬式の次第等が一々夢に見たまゝで一切が餘りに符合しすぎて居たので、私はびつくりしたのである。そしてその時、始めてつくづく人間にも不思議な事實を経験し得るものだなと、當時科學にのみ没頭して居た私に大きな問題を投げかけられたのである。それを第一の經驗として、爾來十三年間屢々私は同様な經驗を繰り返しかへし、數年前よりは早朝目覺めて意識の明確な時にも直ちに祈りの心に移つて、精神が極めて正しい統一状態に入る時に、不思議な經驗をもつ様になつた。

私は早朝目ざめると直ちに祈禱の心に移る。瞑目したまゝ、靜かに心の鏡に寫り

来るものを、私は凝視する。周囲は闇として聲なく、極めて静寂である。唯時計の音が僅かにきこえる位である。自分が地上におるのだから、天に居るのだから、自分の心には何一つ地上の雑音の來らない、静かな澄み切つた状態である。その時に何物か映る如くに心の意識に現はれて來るものがある。

私はこの聲に耳を傾け、眼前に現はれる姿を凝視する。そしてそのまゝを深く私の記憶に留める工夫をし、時には家内を呼び起して、忘れぬ内に物語り、或は筆記をして置く。私の経験ではこの時の意識ほど明確なものはなく、私はこの時の啓示を標準として判断して、間違つた事は今迄にない。近頃はその靈的経験が單に眼覺めた時ばかりでなく、周囲が少々騒がしい時にも前ほど妨げられなくなつて祈りの實驗が出来る様になつた。

それで私は何か重大な問題が起つた時は、朝の啓示を唯一の力とし、判断の標準とする。只今の研究所を四年前に創設した時も、この啓示に依つたのである。

日常の問題、研究の問題で、判断がつかなくて困る時にも。この純粹意識に於

ける、祈禱の應驗に依つて、いつも暗夜に光を仰ぐ様な經驗をする。私が種々の發明、工夫をなす場合も、この神と偕なる祈禱の中に、その鍵を與へらるゝ時が多いのである。丁度大平洋を航海する船の機關の運轉のハンドルを握る水夫が私であるとするれば、純粹意識の祈禱の時の啓示の聲は船長の聲であり、その時に見ゆるものは、人生の羅針盤と、海圖だと私には信ぜられてならない。

私は只今、自分がこの祈禱の靈的經驗を具へられて居る事を、學問よりも、地位よりも、健康よりも何にも優つた有難い口物だと感謝して居る。時々は餘り大切でない、おかしき事まで見る事がある、昨年私が東北大學の講義に出掛けた時、仙臺の宿に泊つて居た朝、いつもの純粹意識の時に一つの景色を見た。それは私共借りて居た家に借家の家主が住むので、追ひたてられて、何とか早く適當な借家を探し度いと求めて居た時であつたから、家の事を見たのである。

早朝私が例の鏡の様になつた心に、一つの家が見えた、それが借家であつた。喜んで家の中に入つて見ると、外見に似合なぬ粗雑な、きたない家で床は朽ち、

椽側はかたむいて、あぶない家であつたけれども、致し方がないので轉宅する事にした有様を見たのである。それから日曜の朝東京へ歸つて見ると、家内から「お不在中に一軒やつとの事で見附けたので、そこへ轉宅することに決めました」との事である。私は其の家なら軒の傾いた、きたない古い家であらうと、見たまゝを話すと家内は驚いて了つた。それから日曜の朝、救世軍の講演を終へてその家を見に行つた所が、不思議に私が仙臺の宿で見た家そのまゝであつたので、私自身がおどろいた様な事もある。

近頃、私はこの靈的經驗の呼吸を覺えて、稍容易に、ほんとうの祈禱が出来る様になつた、その時の靈驗を忘れぬ内にと、ペンを走せて靈感録に書き誌して居るのである。今晚はその一部分を申し述べたいと思ふのである。

そこで「私の未來觀」と題して置きましたが、未來の有無を考へて、靈魂のかぎりなき生活を皆様とよく研究いたしたいと思ふのである。

二

私は大正十二年十二月十二日、夜十二時といふ、私の一生涯にはもう二度と遇ひ難い「十二」の数字が四ツ重複した不思議な時間に、一種異様の靈感に滿されつゝ、信仰生活に入つてから十幾年間の大懸案であつた「神の本質と死後の生命」約めて言ひば「私の未來觀」に就て如何なる風に、解決が興へられたか、また、私の未來の世界が、どんな風に心眼に寫つて來たかを申し述べたい。

「私の未來觀」を申し上ぐるには第一、「人生窮極の目的は何處にあるか」第二、我々の死後はどうなるか」第三神がありとすれば、「神と我々との關係は如何なるものであるか」の三個に分けた方が解り易いと思はれる。一體斯うした思索的な難解の事柄を明快に理解するには譬を以つてするに限る。イエスが常に、野の百合、空の鳥、芥種の譬、一粒の麥等の例を以て深甚、玄妙な哲理や信仰を、最も平易に説いて居られるのを見ても解る事である。佛教でも教理の説明には、種々な多くの譬を設けて居るが、其の一例として無邊使禪士の狂歌にこんなものがある。

鐘は鳴ります、撞木はたらぬ　鐘がなければ、音はせぬ。

これは鐘を自己に、撞木を靈に譬へて面白く唯物思想を歌つたのである。

鐘はならない、撞木がなるよ　撞木なければ、音はせぬ

これは唯心思を詠んだものである。

色心共に空、即ち我々の肉體も靈魂も一切空無の思想を歌つて。

鐘もならない、撞木もならぬ　鐘と撞木の、合がなる。

更に色心一如即ち神人合一、靈肉協調の思想を歌つて、

鐘もなりませぬ、撞木もなるよ　鐘と撞木で、音がする。

この歌を知らずに色心一如だの、色心共に空など言はれても、そんな難解な哲理は常人にはなか／＼會得されぬが、譬で示されると直ちに成る程とうなづかれるのである。

そこで私も前の三ツの問題を分り易く説明申上ぐるため、宇宙は神の經綸し給ふ大建築工場であり、地球はその分工場、人生は現場であると見て、私の心の體

験を申し上げたい、この譬からして、第一の「人生究極の目的は何處にあるか」碎けて言ふなら「我々は何をなすために此の世に生れ來たか」を考へて見たい。我々の住む地球は神の大建築の一分工場である。火星も金星も、まだ見えざる宇宙の星界に無数の分工場があるに違ひない。我々の人生はその現場である。我々が母胎を出ると既に現場に置かれてあるのを思はなければならぬ。なせ我々を現場に置いたか、それは神の大設計に基づく大宇宙建築の一作業を成就するためである。神は大宇宙の主宰者、經營者であると同時に亦大設計者で在す。基督は大設計者の獨子であると同時に、また大建築工場の技師長、監督者であらせらる。聖靈は分工場の棟梁、または現場の指揮者、聖書は大設計圖、我々は一大工、一左官、一鍛冶工として、その現場に立ち働く使用人である。神の大設計からなる大宇宙は秩序整然、一系乱れずに統一されて居る。大は天體の運行、四時の循環自然の現象より、小は顯微鏡下の微生物まで大なる系統の下に支配されて居る。この間に立ちて我々の人生を考へる時、そこには神の大設計を完成するため、宇

宙建設の大目的を遂行するために、分工場として地球が營むべき設計書が記されてあり、また我々各自が朝から晩まで孜孜としていそしみ勵むべき設計圖、仕様書が展げられてある、若し我々が此の現場に居り乍ら監督者の指圖に従はず、命令に反抗して我儘勝手な振舞がありとすれば、こゝから放逐されるのは當然である。また興へられた設計圖を讀まず、授けられた仕様書を見ずして自分一個の了見で、勝手な仕事をするなら、それは全然無駄な仕事 (Negative work) で却て秩序を乱し同勞者に大變な迷惑をかけるものである。斯うした人々は仕事場に居つたとしても勞金は勿論、賞與金も、慰めの言葉一つも受けることは出來ない。その如く、若し我々が人生に處して、神を信せず徳義を省みず、自己満足に醜態するならば、行く處、止る處、失望と失敗と困苦と、墮落に窘められるばかりである。これに反し、よく技師長、現場監督者の指圖に従ひ、建築工場經營者の定めた設計書や、設計圖に則つて、己れに興へられた現場の天分に忠、且つ善に孜孜として立ち働く人々は、身にあまる賞與と報酬とをうくるのみならず、更らに上級の仕事場又

は設計部に送られて、新らしい仕事を興へられるのである。この場合、今まで立ち働いた現場の同勞者の眼からは、彼れは消え失せたと思はれる、即ち居残つた此の世の人々からは死んだと見える、されど彼れは第一の仕事場を去つた時、同時に他の上級の工場、又は設計部に任命されて居るのである。つまり彼れは地位を進めて、同じく忠且つ善に大設計、大目的に向つて愈々、益々、其の優秀な頭腦と熟練した手腕を振はんとするものである。「何をなすために此の世に生れて來たか」の問題も、一職工が工場經營者の設計を知ることによつて、始めて解する。我らは神の大宇宙設計の聖書を窺ひ、キリストによつて指圖をうけて、始めて自己の分工場の使命と、本分を知ることが出来る。

柱を削り、煉瓦を積み、事毎に、聖書を身を以て踐み行ふて始めて、私達自身の目的と價值を知り得るのである。この第一の問題が解るなら、第二の我々の死後は如何との未來觀も明確に知り得らるゝ譯である。未來觀といふのは、我々の死後の生活である。第一の問題に解決を興へた様に、永遠から永遠に、つながつ

て居る時間の上から我々の存在を考へるとき、前後はあつても断絶はない、無窮の空間から考へるときに、地位の変更はあつても、靈は永生である。これを今一度、我々の研究所を例として説明を試みたい。研究所の一部分たる現場の工作所に、油と汗に、にじんだ作業服をつけて所長の設計に基づき、現場監督の指圖のまゝに、既に定められた、仕様書や設計書を読んで、その通りに精々と働いた人が技能も熟達し、知識も、進歩したゆゑ、更に登用せられて研究室に入り今までの汚れた作業服をぬぎすて、雪白の研究衣をまといつて研究員として試験管を振る地位に置かれたとする。此の場合、此の人は研究所を辭した人ではない。現場には其の人の姿は見えないが研究室には、大切な研究員として研究事業の一部を掌つて、終始一貫した精勤を續けて居るのである。これは彼の以前の地位よりも更に進んだ仕事で、無智の労働者を指導する尊い奉仕である。此の位置轉換の仕事は大經綸のもとには既定のプログラムであり、宇宙を、支配し給ふ、神が永遠に亘る大設計の實行には缺くべからざる大切な任務である。即ち同じ目的のために單に居場

所を換へて他の仕事を分擔したに過ぎぬ。此の意味をよく味ひ、靜に自己の立場を考ふる時吾々には死はない。死と見た刹那、此の世に姿をかくした瞬間、直ちにそれは神の世界に、靈の聖國に生れて居るのである。新しい任命を受けて、新しい仕事を行ひつゝあるのである。こゝに至つて我々は「永遠の生命」なる意義を十分了解し、これを確實に握り得る。此の境涯こそ生死超越の新天地である。

茲に注意すべきことは、假令、研究室に入つて研究員となり、助手となつても研究事業の大目的、大設計に對しては事毎に所長の命令、指導を仰がねばならぬ様に、肉體の死によりて、靈的生活に入り得た後とても、神の御許でその指圖、命令の下に宇宙建設の大目的、大方針の實現と完成とに參與するのである。我々は肉體をはなれて、自由な靈體となつて、神の聖國の一員となり、その研究助手として召さるゝ時、この世の工場に汗水流して働く同業者のために、又は知己友人のために或は親戚、故舊のために、それ等の心を住家として、力を注ぎ、悩みを慰め、弱れるを勵まし、共に永遠より永遠の大研究、大設計を各々分擔しつゝ、成就せし

めんと努むるのである。私達が祈りにより、純粹意識の状態になるとき、多くの先輩、多くの友人、はたまた、使徒達の靈が我が心に宿りて、我と語り、我と偕なりて、行きつまれる種々の問題を解き、惑ふ心に導きを與へてくださる事は始終體驗する處である。

三

今まで述べ來つた第一、第二の問題は(一)我々と(二)人生と(三)未來と(四)天國と(五)神との關係は如何なつて居るものかに就て、あつたが、この五ツの關係を明確に握つて置かなければ、根本問題である神の本體と本質とを知り奉り、そのかゞやく御姿を仰ぎ見ることは出來ぬのである。そのため今一度例を擧げて此の間の消息を申し上げたい。

人生は、かくれた寶探しに似て居る。一人の主人が森の隅か、築庭のどこかに、寶を埋め園遊會を開いて、大勢の賓客を招待し、その寶を探し當てさする様なもの

である、賓客の或る者は、始めから寶なんぞあるものかと信せず、歸つて終ふ、或る者は半信半疑で探すことは探して見たが、見當らぬので寶はないのだと絶望して歸つて終ふ。所で或る一人は主人の言葉を堅く信じ、必ず寶は何處かに有るに相違ないと、不屈不撓一生懸命に方々を探し廻り、遂に寶はこゝにあつたと、掘り出して、主人に捧げると、主人は非常に喜んで其の人を別室に招じ、多くの人達が或は信せず、或は途中で挫けたに拘はらず、卿はよく吾が言葉を信じ守つて、その如く探しあて遂に寶を得られたと褒め、その上、主人は、もてる多くの寶と、物質の富で購ふことの出來ぬ尊き眞珠を與へて下さるのである。主人とは神様で、ある、隠れた寶は天國である、貴き眞珠は永生である、多くの寶は多くの法悦である、キリストの宣ふた如く「神を信じ我を信する」者こそ、必ず天國も永生も其の人のものである。唯物的な人、厭世的な人、我儘勝手な振舞をする人は神の大きな篩にかけて振り落され、彼等の死は全く火の消えたと同じく暗黒である、彼等の前には死の谷と滅びの淵が大きな甕をかけて待つて居るやうなものである。

現世から未來、人生から天國への道程を學生に譬へてもよい。丁度試験に及第したものと、落第した者である、及第した優等生は、小學から中學、中學から高等學校、高等學校から大學へと進んで行く。彼等は月桂冠を目がけ、喜びいさんでます。學業をいそしむ。學事を怠ける者は落第をする、あまり落第をつづけると終に放校處分になる、此の者は社會から既に落伍者として葬られて終ふばかりである。進級に進級を重ねて、進み行く學生が高等學校を卒業して大學に入る時、高等學校からは其の姿は消え隠れて終ふのであるが、同時に大學の門に入り、その講堂に角帽の學生として顯れ出づるのである。高等學校から見れば死、大學から見れば生である。然しその學生自身から見れば、生も死もない一の連続である。故に信仰ある者の境涯から人生を見ると、そこに生死を超脱して居る。未來だ、現世だと區別するのは、抽象的に論ずる第三者の目に映る人生相で、當事者自身はそうした時間的の區分はない筈である。

私が嘗て二十四歳の時チブスに罹つて、一度死の門を潜つて不思議に救はれ、

信仰生活に新らしき第一步を進め、更らに今度は十二年後、……運命的一週期の後に歴々と未來の天國生活を仰いで、そこに新らしき使命と事業を興へられ、現場からその次の仕事場を窺いたやうに、實探しに土中から寶の形をチラと認めたりやうに、中學から高等學校へ入學した様な心地で居る。斯くして地上の御奉公が終へてお召しがあれば、私はよろこんで肉體の自己を捨て、靈體の私として從來から御奉仕して居た、神の永遠の御事業の一部を承り一本の柱を建て、一枚の煉瓦を運ぶと同じ様に働かしていたと信じて居る。只今私には多くの子供が興へられて居り、又種々の事業や、計畫を持つて居る。此の場合もし死んだら如何しやうかとの問題に對して、私の肉體は死んでも靈體もて子供のために、又仕事を共にして居た友のために、其の心に宿り、其の前に立つて生きて居た時よりも、優つて力ある援助と、指導を興へさせていたと信じて居る。

私達が「主よみもとに近づかん」と歌ひつゝ信仰の道を、ひたすら努力することは恰も登山者のやうである。一步、のぼれば一步だけ神に近づき、それ丈眼界が廣

く展開するのである。私は十二年前に見なかつた未來の世界が稍明らかとなり、眼界が大層擴ろがつて來た。十二年前の私はまだく山麓に逍遙して居た一旅人にすぎなかつた。一合目か二合目かの喬木帯の深林中を歩いて居たのである。その時はたゞ抽象的な概念として漠然と、解つたやうな解らん様な、霞のかゝつた思ひであつた。行くべき靈界と、生るべき靈體が目の前に迫つて居つても瀕死の病床に横臥して居た私には、何等の確かな希望もなくて、ただ不安が狭霧のやうに胸間を漂ふて居た。これは今迄、牧師の説教や、先輩の著書などで、此の場合必ず天國へ行かれるんだと理性で肯定しても、心のどこかに、心許ない淋しい氣分がして居つた。それは丁度初めて、洋行する時の様な何だか心細い感じであつた。私の出した手紙が届いたのであらうか、向ふの港で果して友が迎へに來てくれるであらうか、會話がうまく操れない私が、税關をどう通つたらよいか、着いた上でホテルはどんな處か、買物は何處でどうして買つたらよいか、後から見れば、つまらないことながら、其の時は一種の不安であつたのである、聖書で熟知の天國

へ行くに、なせ學生時代に、冬季や夏季の休暇に父母の膝下へ歸省する様な、喜びと、楽しさの満ち溢れた氣分を持ち得なだてあらうか、今地上の最後の呼吸を終へて、これから靈界の新天地で呼吸する身になれるのだ、今まで夢寢にも慕ひまづゝて居た父なる神の御許にまゐるのだといふ刹那に、なせ心安さと、心強さを持ち得なかつたか、私はこれではならぬと非常な勇氣と熱心な祈禱をつゞけ、何とかして二度目に外國へ行く心地で父母在す郷里へ歸省するときの喜びで、天國へ旅立ちたいと願ひ求めて居つたのである。

かくして、烏兔匆匆十二年は夢と過ぎ去り、地上での三十六回目の誕生日を迎ふるに至つて、やつと靈界と人生、現世と未來との間に始終自由に、往來し得る大路のあることを啓示されたのである。それは前に申し上げた十二月十二日夜十二時深更夜静まつて、萬籟聲なき書齋に一種の靈感に打たれて、祈り且つペンを走らせ確實に我が靈耳に天上よりの御聲をきゝ得たのである、此の純粹意識の鏡面に歴々として未來の世界、神の御國の有様が手に取る如く映り來つたのである。

私は純粹意識の靈妙なる働きに驚嘆するが、更らに祈りによつて、なほ一層強められた純粹意識の状態は實に不思議を行ふものなることを確實に體驗して居る。天國への通路は眞の祈りである。神應へ給ふといふ祈りの力を私は近頃、しつかり握り得たことを、王侯になつたよりも、世界の富を殘らす得たよりも喜ばしく思ふのである。

此の地上の人生に於ては、金銀、地位、學問、權勢がなければ不自由を感ずるかも知れないが、此の世を去つて未來の靈界に、自己の靈體を見出すとき、それ等は何等の價値もないのである。たゞ祈りの力丈がその時役に立つのである。祈りの呼吸をしてこそ、未來の靈界に生きられぬるのである。

元來人間發達の時代を、第一、胎内生活時期、第二、肉體生活時期、第三、靈體生活時期の三時代に區分し得ると思ふ、第一の胎内生活に於ては胎兒に肺臟はなくとも生き得られる。然し乍ら一度母胎より、離るるや否や、胎内ではなくとも宜いと見えた、肺臟の呼吸が最大必要條件となり、肺臟の有無が地上人間生命

の死活が分かる、鍵鑰となる。肺が働かねば生命が斷たれるのである。

それと全く同様に、第二の地上生活に於て靈の呼吸器たる、「祈禱」は肉體の生活には無くともすむと考へられる。然し乍ら一度人間が第二期の生活からはなれて、第三期の靈界の生活に入らんとする時、祈禱の呼吸がなければ天國に於ては、空氣中の生活に肺臟がなき如く全く生き得られない。靈界に生活する能力を失ふた者である。即ち人間が靈界に生き得るための必要條件としては、第二期の地上の生活中に靈界の肺臟たるべき、祈りの力を確實に體驗し、完全なる天國の呼吸をなすべき用意が必要であると信ずる。その準備が即ち現世に於ける吾人の信仰生活である。私はこの祈りこそ現世と天國とを連結し、現世の地上に在り乍ら親しく、まぎりと天國の光景を觀得る望遠鏡であると覺える。此の世に於て祈りの生活に入れる人は、地上で天國の生活をしてる人である。私は近頃、私の死ぬ時は、どうか祈りつゝ、そのまゝ死にたいと乞ひ願つて居る。亞弗利加の沙漠に祈り乍ら死んで行つた、リビングストーンこそ實に羨ましい、多くの人々に石にて打た

れ乍らも、祈りつゞけて逝ける若きステパノは死の瞬間、天國の人となつたに違ひない。誠に實に吾等の主と仰ぐキリストの十字架の死は、實に天と地との區劃の幕を切り落したものである。

今度の震災で祈りつゞ死んだ救世軍の指田中佐、酒井參軍は必ずや直ちに天國に入つて、地にあつた時よりも更らに大なる奉仕を、神と人となして居られるに違ひないと信するのである。現世に於て、祈りによつて事毎に天國の生活をすることこそ、眞個の意義ある人生である、人生の究極は神と偕なる祈りの生活でなければならぬ。

十二月十二日の拂曉、純粹意識の靈耳に響き來つた祈りに就ての靈響を、枕頭に居つた荆妻に手記せしめたのを讀まう。

「祈りは人生最高の生活なり。」

天の生活と地の生活の間に唯一つの橋あり、それは祈りである。祈りの生活は生と死の難問題の幕を切り落す名刀である。

眞個に祈りの出来る人の前には最早や死はない。

眞個に祈りの出来る生活は、それが即ち天國の生活である。

祈りは天國の呼吸である。

祈り乍ら死んだ人は天に於て生れた人である」

此境涯にあつてこそ生も死もないとはつきり見せられたのである。私共に眞劍な「祈」の生活が續け得る限り私共には死はない。私は斯く教へられて始めて死後の生命、即ち未來觀が私の心に深く彫りつけられたのである。

未來觀のない所に永遠の生命はない、又活きた宗教も、そこには存在しないのである。さり乍ら現世を厭離し、人生を捨て去つて彼岸の樂土、未來の世界に行き切りにならうとする宗教は、甚しい謬見である。これは厭世主義である、小乗佛敎の信仰や淨土門の宗派は其の弊に落ちて居るやうである。私達は地上から天國へと同時に、天國から地上へと、自由自在に往來交通し得なければならぬ、堅實な未來觀の存する所に始めて確乎不拔な信念と徹底した人生觀が築かれる、人生

の眞諦を明確に悟る處に、人は地上に生き乍ら天國に生きられる。人が地上に在つて確實に天國に生きる信仰生活に入つた時に、始めて人生問題の一切が釋然として氷解されるのではあるまいか。

以上の話はヨハネ傳十四章二十三節以下それから十五章十六節の終りまでを熟讀されれば必ず得る所多からうと思ひ参考までにおすゝめ申し上げる。

(大正、十二、十二、十五、)

『なんぢら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。我が父の家には住處おほし。

然らずば我かれて汝等に告げしならん。われ汝等のために處を備へ往く。もし往きて

汝らの爲に處を備へば、復たきたりて汝らを我がもとに迎へん、わが居るところに、

汝らも居らん爲なり。』

(ヨハネ 十四〇一—四)

信仰の極致

一 一般の信仰は、神を信じて

前回は私の未來觀について、(一)時間的の立場から、現在と未來といふ前後はあつても、永遠から永遠につながる永生に入り得ること、(二)空間的の立場から、地上と天國は區分はあつても、靈界に入つた人々は亦自由自在に地上の人達と靈交し得ること、(三)本質的には、地上生活の吾々が、肉體の殻を割つて心核だけの靈體となつて、靈界の人となるべきを述べたのであるが、我々はもつと深く、信仰の堂奥に入つて此の大自然の御主人、この大建築工場の設計者、經營者の本體、本質を確めその風貌を的確に仰ぎ觀たいのである。

私達は自分でよく自分を考へて觀ると、母胎から呱呱の聲を擧げて地上に生れ出で、それから人生幾十年かの生存を経験し「死」といふ状態で此の世の終りを

告げることは、判つて居るが、さて死んだ後に如何なるべきかは経験外の事實である。目に見ゆる肉體は、地下に埋められるのであるが「生」といふ状態のとき、微妙な精神作用を表はして居つた統治者格の靈は、肉體と一緒に地中に埋められて終ふのか、焼かれて、茶毘一片の煙と發散してしまふのか、また何處か、靈の落ちつく世界があるのか。此の問題について西洋では近頃英國のオリヴ、アロツヂ博士は、物理學の研究から、心靈學の研究に進んで、科學的に心靈現象を攻究し、死後の存在と、その場所を確めることに努力し、時々その結果を發表して居る。一方、電子論で有名なクルツクスは、電子の研究から心靈の本質的研究に進み、其の結果を、英國の王立學會や、心靈學會に公表して居る。此の心靈の真相を明かにするのは、科學の目的使命であるに違ひはないが、現在の處甚だ不可解の問題として取残され、随分六か敷い問題である。物質を分析して分子原子となし、更に原子を分解して電子に至り、真空放電に依つて、その活動状態を肉眼で見、或は計器で測定し得るに至つた如く、心靈も又その本體が早晚發見確證されなければ

ならぬ。若し斯くなり得れば、東洋一流の所謂「以心傳心」の不可解的な大悟道も、易く捉へることが出來、宗教や、哲學にて論ずる、人生の根本問題にも、一大光明を與へることになり、人類開闢以來の疑問として、未解決のまゝ取り残された最大のナゾを解決し得るに至るのではなからうか。

デカルトの言つたやうに「我思ふが故に我あり」と考へれば、自己の存在は誰れでも知られる。自己の存在を知ると同時に、やがて來るべき死といふ事實は老幼男女押しなべて、一度は必ず體驗しなければならぬ。

醉生夢死、名利と物慾に餘念のない者でも、未曾有の震災に遭つて、邸宅をすて、家財をすて、搖れる大地の上を、八方から襲い來る猛火を潜り抜けて、逃げる瞬間は、眞個に死に直面して、今迄味つたことのない嚴肅な氣分を、體驗し得たとの實感は、多くの人達から親しく聽く。この嚴肅な氣分を味つた人達は震災後續々宗教の門を叩き信仰の道を求めつゝある。

我々にとつては「生」と「死」は相對的なものである。死の問題の解決は我と

は何ぞやとの「我の本體の解決である」。「我」の本體の解決は未來世界の解決である、未來の世界の解決は、結局神の本體の解決になる。此解決をなしたのが基督である。我れの本體と、神の本體とは、光源と鏡面上の光の關係のやうに神と我とが切つても切れぬ父と子の關係にあり、神と人とが相互の本質上に同じ「力」が流れて居る事を明確に啓示されたのである。

神の本質を完全に知悉せんとするは、恰も太陽面上に行つて、太陽を研究しやうとするのと同様に至難中の至難であらうが、私は今一片のプリズムを取つて、スペクトルに顯はれた「ブラウンホーヘル線」の黒線を通じて、太陽面に在る物質も、亦遠方に輝く星の成分をも知り得る。その如く、自己の「心」をプリズムとして、純粹意識に寫り來るスペクトルに依り神の本質、我れの本體を明確に知り得べき道が存するのではあるまいか。

我々の死後の生活は如何なるものかとの問題は、今日の學術ではまだ充分に闡明されて居ない。たゞ我々の主觀的經驗に俟つより外に道がない。斯うした解り難

い問題も、私共の取り扱ふ科學の立場から卑近の例證で説明を施すときは、却つて容易すく首肯され得る場合が少くない。

最近の物質觀は電子論の證明によつて大なる啓示を受けて居る。有ゆる物質の根源は、電子の結合から構成され、それが原子分子となり、肉眼に見え、五感に觸れ、計量器で計り得る物體として實在することは何人も疑ひ得ざる事實である。而して電子論の歸結はエネルギーとその活動といふことに歸着して了ふ。

宇宙の潜在エネルギーが、或る統一ある活動状態に來る時に、始めて人の心に存在の意識が明確に與へられるのである。

科學の方面から音響、熱、光、電氣を物理的に研究するときには、此れ等は皆宇宙エネルギーが、活動状態として、ある異なつた統一體系に現はれた顯現相に過ぎない。そして是等の活動状態は一樣に波狀運動をもて四方に擴大しつゝ、傳はつて行く。人間には可見範圍と不可見範圍の差別はあるが、活動力そのものは人間がそれを知ると知らざるとに關係なく嚴然として存在して居る。即ち音、熱、光、電氣

夫々の本質から云へば、人に感ずる、感ぜざるに拘はらず、自然界には永遠から永遠に存在するのである。

我等は肉體が見えなくなれば、その事實を「死」と云ひ、又その人の心が感ぜられなくなれば、靈魂は滅亡したと云ふのだが、上述の科學上の事實から見ても、今一度「死」その物に對する我等の「觀方」を深く眞劍に、考へ直さなければならぬ。科學の眞理から死後の生命といふ問題を考へて見るに、生と死との關係は、丁度一枚紙の表裏のやうなものであるまいか。熱と光の研究に依つて、見えざる赤外線や、紫外線の光が、闡明されたやうに、亦一枚の紙の表面を眼光紙背に徹する研究を遂げることが、其の裏面を正しく判斷せしめるやうに、現世の我れを明確に知ることによつて、死後の我れを明確に知り得るのであるまいか。私は科學の立場から、此の問題を考察して次の如く言ひ度い。未來の我れを知り得る度合は現世の我れを知り得る度合に比例して居る。私は近頃、此の問題を眞劍に考へさせられ、時々ハツキリ鏡面に寫る自己を正視し得て、死後の生命に對する思索に

一道の光明を投げかけられる心地がするのである。

宇宙と人生、即ち神と人との關係を、譬でいふなら、宇宙は一大建築工場、地球は其の一分工場、日本はその分工場の一工作場に相當する。そして神はこの建築工場的设计者で、また經營者で在す。人間は生れ乍らにして、一勞働者として母胎から此の工場に生み落され勞働服を纏ふて何物かの勞働に従事して居るものである。職工自身は何故、こんな所に煉瓦を積むのか、何故こんな柱に穴を鑿るのか、何故こんな鐵棒を打ち伸ばすのか、少しも解らずに居るけれども、經營者や設計者は一切を熟知して居られる。更らに、その工場を監督する技師長は經營者、設計者の意志を全部呑み込んで此の所には煉瓦を積む、此の處には柱を建てる、この處には彫刻を施すといふ風に、仕様書が秩序整然として出來上つて居る。我々は、大工、左官、鍛冶の一職工として、精勤を抽んで居るには、永遠の昔から神が定め給ふた仕様書を能く讀み、能く心得て、一枚の板を削るにも、一本の釘を打つにも、設計者併に技師長の指圖を待ち、命令に従ふて立ち働き、無駄な勞作をなさぬ様注意

せねばならぬ。

人生の目的如何を知るには、宇宙設計の神の大聖意を知ることが第一である。御互が人生といふ工作場に居る時、十人十色、百人百色、各々が與へられた職業も、使命も、境遇も悉く異なつては居るが、神の大設計に基きて、精一杯自己の本分と、任務を遺憾なく果す所に、人生の眞意義は自ら明亮になるのではあるまいか。

神の仕様書、設計圖の青寫眞を知るには種々の方法があるに違いないが、私共が自ら體驗して、最も的確な道は聖賢の教を學ぶ事である。聖賢に學んで、神の大設計の聖意を會得した人は、更らに技師長としての活ける指導者の在ますことを知らねばならぬ。指導者の指圖、命令、合圖をよく理解し得る時に、始めて、天來の聖聲に接し人生の目的、自己の使命を明確に教へて頂けるのである。

基督を通し神の永遠に亘る大設計の説明を承り、聖書を通して、其の設計の仕様書を示さるゝ場合、初めて歴々と東天に旭日を仰ぐやうに、設計者たる神の大聖

旨を明確に悟得し得る。神は永遠の昔から、永遠の未來に亘つて宇宙の大建設に日もこれ足らずに働き給ふのである。土塊に似た我々が、神の大設計に参加して、その仕事の一分を、お手傳ひ出来ることを思ふと、光榮身に餘る喜びである。

私の信仰から、生と死の問題を今一度考へて見たい。前回にも述べた様に現世と天國、人生と未來は學校の進級や、卒業に酷似して居る。高等學校の活氣ある寮生活を生とすれば、角帽の大學時代は天國に相當して居る。高等學校の卒業は地上の死で、同時に大學への入學は天國での産聲を擧げて生れたものである。地上の死は、天國の生である。神の聖旨を一生懸命に闘むなら、所が違つても位地を更へても、同一の目的に御奉公するのである。神を信する私達は、肉體の死が靈の生である。これを私の經營する研究所に譬へていふなら、現場で手も、顔も、眞黒に汚れて立ち働いてた現場員が、その技術と研究の進歩を認められ、今度は研究员として登用され、研究室で雪白の研究衣を纏ふて、試験管を振つて分析に従ふ身となつたとすれば、此の人は現場では死んで、其の姿は消えたが、研究室に

は生て新しい使命の下に、新装の姿を顯はし、所長の命令に従ひ、研究目的に向つて其の全力を傾注してゐるのである。斯くして此の人はその研究の結果を現場員に示して、益々新らしき發明を成し遂げる任務のために働くのである。

基督の宣ふた永生も、近代科學でいふエネルギーの不滅も、佛教でいふ久遠實成も、此の處まで到達して、始めて其の眞意義が氷解されると思ふ。我々の死後は、誠に自由なる世界である。靈體としての生活である。宇宙設計者の聖意のまゝに従ひ其の技師長、監督者たる基督の命令のまゝを信じ、聖書の教へらるゝまゝを踐み行ふ所に、假令異つた位地に立ち働くことはあるも、我々の靈は、永遠から永遠に涉つて『生』である。親しき友の心を住家とし、愛する兄弟姉妹の胸を宮として、自由自在に、往來し得る特權が與へらるゝのである。キリストが「父の家には往家多し」と宣ふたのは、明々白々に、此の境地を御覽になつたからである。「信する者に助け人を遣はす」と仰せられたことも、この信仰の境地に入つて、しみじみ味ふ事の出来る御言葉である。即ち私共は靈の世界から、靈體もて「助け

人として」この世の兄弟姉妹の心に自由自在に往き來し、偕に語り與に慰め、且つ勵まし合ふ事が出来る、基督の教には生ありて死は無い。例へば今外國へ行く人を白いハンカチーフを振つて名残を惜しみつゝ送るとする。汽車は一抹の白い煙を残して駛り去り、三年も、四年も其の人の姿は日本から消えて居る。しかし私共が其の人は亞米利加に在りて何々大學に勉強して居ると信するとき、其の人はまざりしく生きて居る。無線電信で通信が来る。愈々其の人の健在を信する。東京驛で別れたあの人が今米國に在りと確信する如く、此の世に於て完全に其の使命を果して永き眠りに就いたと思はれた人は、實は永き眠りについたのではなく、却つて忙しい靈界の事業にたづさはるべく召されたのである。肉體の生活は永遠の靈的生活の一部分である。例へば長い連鎖の一つの輪である。比の一輪がもし不完全であるならばその連鎖はそこからブツツリ斷ち切れる様に、我々のこの地上の生活が充實し、聖化され、神の聖意に適つたものでなかつたら其の人の死は眞個の死で永遠、地獄に投げ入れられることになる。人生究極の目的は。神を信

じ基督を信じ、神の大目的、大設計を知り神と協努力行の生活に入る事に存する。語に「大丈夫世に生る須らく名を竹帛に垂るべし」といふが、これはまことによい激励の語であるが幾人が此の眞の意味を味はつた者があらうが、名を竹帛に垂れることも功を千歳に貽すことも、之れは何事かを成したる後の結果である。眞に不朽の名は永遠の生命に由つてのみ残る。眞に功を千歳萬歳に傳ふべき事業は神の大目的、大設計に参加し、之れを翼賛し奉ることである。即ち原因は神にある。原因を究めずして名を慾し功を逐げんとせば、それこそ却つて世を害し人を毒するものとなる。實に神を離れて人の生活は無意義になるのである。故に信仰の最究極は「神を見るに在り」と信ずる。神を見ることによつて一切の問題は解決が着く。

信仰に入るとは明かに神も見奉ることが始めて亦終である。

二

人生に處するに當り信仰の必要なることは、今更改めて説く要はない、石炭なき汽船は航行することは出来ぬ。電流の通らぬ電動機は働きをなさぬ。信仰は人生の石炭であり、電流である。人生の荒海を乗り切るにも信仰なくしては彼岸に達し能はぬ。而して信仰の奥義は見神に在る。この見神方法に就て、私は科學的の見地から六ツの道の存することを紹介申し上げたい。丁度それは富士へ、登るに吉田口とか、御殿場口とかあるやうにいくつかの通路がある。

その第一は一般的經驗に依る見神法である。これは過去幾千年間、人類の經驗する所に依りて、動すことの出来ぬ公理的の事實を認め、又は自己の經驗によつて見神を信するのである。例へば空のコップを逆さに水中に突き込んでコップ中に目に見えざる空氣の存在を知り或は深い井戸にローソクを點火して下ろすと火の消ゆる事實に基きて、そこに空氣より異つた氣體の存在するを經驗するやうなものである。此の場合では、空氣は酸素と窒素及び其他色々な瓦斯體の混合物だといふことも、また井戸の深い處にある瓦斯は酸素と炭素の化合物の炭酸瓦斯

だとは解らぬ迄も何物が在るといふ経験だけは確信し得るのである。その如く九死一生の危難に遭つた場合、不思議に命拾ひしたり、又は知己や近親の死の豫感やその時の體驗に由つて、漠然ながら宇宙の大支配者を意識することがある。これは主觀的な經驗で最も幼稚な見神の入門である。

その第二は物理的の見神法である。丁度引力のやうな見えざる力を見ゆる形式に導き、または見ゆる物から見えざる原因を探し當て、その實在を確認する方法である、キリストが老學者ニコデモに「風は己が好む所に吹く汝その聲をきけども何處より何處へ行くを知らず、すべて靈によりて生るゝものも斯の如し」と教へ給ふたやうに私共は梢を揺り動かし、葉を鳴らして吹く有様を見て風の力とその方向を知るのである、青空を仰いで風を見んとしても我々の肉眼には風は見えぬ、たゞ雲の徂徠するを見てその吹く方向を知るのである。

靈は靈を以て見るべし、靈そのものは我々は容易に觸るゝことは出来ぬ、けれども靈が働いて、實現した結果から、原因に遡つて大なる力の存在を知るのであ

る。多くの人々が日月星辰の運行を仰ぎ見、そこに偉大なる力あるを認めて神を信じ或は聖賢哲人の高潔なる人格や事業を慕ひその蹤跡を尋ねて入信に志すのは皆顯はれた結果から見えざる原因を信する物理的の見神法でこれは第一より稍や進んだ信仰である。

その第三は化學的の見神法である。見えざる物質を化學的に見ゆる物質に變化せしめその結果から原因の或るものを認むる方法である。例へば室内の空氣を澄み切つた石灰水に吹き込み炭酸石灰の白濁が生ずるのを見て炭酸瓦斯の存在を知り、或は透明な試験管中の水へ青色リトマスを入れて赤色に變化するを見て酸類の存在を知り、また赤色リトマスの青色に變化する場合はアルカリ類の混入を知る如く新しく化合して生じた炭酸灰なり、青色なり、赤色なりの新現象を顯はさしめる所から、その力の本源を見極めるのが化學的方法である。

キリストが「我れを見し者は父を見しなり」との御言葉は天上の聖なる神が地上の肉體と化合して「神の人」なる新しい姿に顯はれ給ふた化學的結合を宣ふた

ものである。私共は炭酸瓦斯も酸類もアルカリも、直接肉眼に見ることは出来ぬが、その化合状態に於て萬人が均しく仰ぎ得る如く靈なる神は我々の意識の上に、はつきり印象し難いが神と人との化合體なるキリストに於て明確に之れを仰ぎ奉ることが出来る。

明確なる見神の方法は神と化合状態なる人を通して神を見る化學的見神法である。

その第四は論理的見神法である。此の方法は物理的、化學的方法より更に進んだ見神法である。

經驗又は物理、化學等の實驗方法を基礎とし尙ほ其の上に必然的な論理の判断に依つて、その思索を進め、見ずして信ずる見神法である。この方法は人間智識の微妙な働きから眞理に到達する頗る幽玄なものであるが、一面その確實さは、手に取り、目に觀たものより一層の確實さを有つて居る。例へば今こゝに蠟燭が燃焼して其の形は全く消え失せた場合蠟燭の成分を化學的に分析し、炭素、水素、

酸素の三元素から成り立つて居ることが解れば論理上燃焼の結果は、炭酸瓦斯と水になつたに違ひないと論理的に論證し、そう判断を下し得る。これは見ずして明かに理解し得る事實である。アインシュタイン博士の相對性原理も數學的の論理から推理して下した恒星より地球上に來る光線が太陽面上を通過する際屈折するといふ事實を實測せずして彼は確認したのである。キリストが「見ずして信ずる者は幸なり」と宣ふたのは此の間の消息をお教へになつたものである。論理によつて見ずして神を信ずる方法は、知識的に於て最も優れ、最も賢明なるものである。

その第五は直觀的見神法である。靈妙不可思議な心の作用は時々經驗も推理も論理も、すべてを超越して、神の靈光を直面して拜することがある。世慾の一切を拂ひのけて玲瓏恰も研き上げた鏡面のやうな心地、中禪寺湖のやうな廣い水面に漣波一つ立てぬ、状態になつたとき、天上の靈光は電光のその如く閃き寫つるのである。

昔から東洋には釋迦や達磨や禪宗の人達が三昧に入りて佛性を徹見すといふのもこれである。これは即ち直觀的見神法なのである。しかしこの方法は、何時、何處で、また誰れても行ひ得る方法であるかと云ふに決してそうでない。釋迦が菩提樹下で命を賭けての禪定で漸く、透見得たものであり、又達磨が小林寺で面壁九年の空禪で始めて悟り得たものである。此の境地を例へていふなら暗夜にトボくと歩み運んで居る折電光がバツト閃めき其の瞬間今迄見えなかつた道も、林も、山も明瞭に觀取るゝやうなものであらう。聖徒オーガスチンが歡樂の街をすて郊外に出でた其の瞬間、天よりの光と聲に觸れたといふもこれである。一度此の境地を味ふた者は再び、三たび味はんと努力する。釋迦の一生涯がそれである。彼れは「汝等宜しく白衣を著たる心地にあれ」と其の弟子を戒めて自らもかくならんことを勉めた此の直觀的見神法は萬人向きの方法でない。異常の人が、異常の場合、異常の機會で握り得らるものである。

その第六は内觀的見神法とも名づくべきものである。以上申し上げた五つの方

法は一昨年曾て公表したものだ、近來更らにこの内觀的見神法を教へられて居るから申し上げたい。

内省的見神法

人は多く神を遠く離れたる天に求むる。また未だ見ざる世界を茫漠と考へ暗中に摸索しつゝ、神の姿と木質を尋ね求めんとして居る。けれどもそれ等の凡ての努力は望遠鏡とプリズムを持たずして、天體を仰ぐが如く、又試薬と試験管を持たずして物體の本質を知らんとすると一轍である。到底明確な神の姿が見ゆる筈がないのである。眞理は手近に在る。至難とせられた見神の道も亦案外手近に備へられてある事を發見する。

太陽面上に働く引力の真相も、無限の距離にある天體に働く引力の法則も、これ皆地上一塊の石に働く引力の真相と少しの變りもない。故に私共は地上一塊の石の中に潜みそれに働く引力の法則とその作用本質を明確に知る事が出来れば、そ

れ自身が即ち萬有宇宙の法則の真相を掴んだ事となる。

地上一塊の石に働く引力を眼光紙背に徹する如く凝視し得る人は即ち宇宙引力の本體を地上一塊の石の中に明確に發見し得た人である。

宇宙間の惑星の實質と本體の真相を、手に取る如く見る道は最も手近かな地球自身の真相を確實に握る事である。宇宙の恒星の姿を肉眼で見ると見る如く見る方法は即ち自己の中心たる太陽を凝視する一事に依つて達成せらる。人跡達し難き雲間にかくるゝ山嶺に、千古神秘をたゞゆる湖水の本質を知るには、その湖水より流れ落つる山麓溪川の清水一滴を精細に分析研究する一事に依つて完ふせられる、唯求道者なる吾々の注意としては、吾人が試料として採るべき山麓の水を自身に途中より汚水が混じらざる一條件を嚴密に吟味せなければならぬ事である。至純な山嶺の湖水と同質の清水を採つて、之れを分析し之れを研究すれば、それが即ち山嶺の不可見世界にある神秘の湖水の本體を示すものである。こゝに亦確實な見神の大道が存するを覺ゆる。

自然科学の金科玉條は、自然界の整一とその普遍的真理の原理法則の上に立つ。自然科学が人類の思想界に貢献した最大の業績は代表的試料に對する研究の一結果を宇宙全体の問題に當て嵌めて間違がない。即ち宇宙は普遍的真理により貫通せられ、一事象より深くその眞諦に徹透して握りたる真理の道は宇宙全部に通ずとの一大原則を、一點の疑ふ餘地なく證明し得た事である。

人は宇宙の縮圖である。神の心は人の心に宿る、自分、自身の心を極めて嚴密に、直觀的に、且つ組織的に研究し盡くして得たるエッセンス、即ち核心が、神を自身の御心であることが悟り得る。生命の泉は遠くにあらすして極めて手近にある。神は遠方に在し給はずして、吾が内に、吾が周圍に、直ぐ近くに在し給ふ。見神の神秘は、「眞の我」を視ることである。私共が望遠鏡もて大宇宙星辰の運行の中に、神の眞理を見出すも大切であるが、又顯微鏡よりも、更らに精密なる装置もて真空放電の管内に電子の姿を凝視し、そこに大宇宙の、縮圖たる小宇宙を見出すも亦確實な一つの道である。

空漠たる天に向けて、求めに、求め、探しに探して居た望遠鏡を、吾が心の裡に向けて、顕微鏡の如く使用して、自分の心の中から濁つた海水から食鹽の結晶を析出せしめる如く、汚れた砂糖水から、透き通つた砂糖の大結晶を作る如く、神の御心の結晶を萬人が萬人とも、正視し得る様に、自らの心底より析出せしめるならば、それが最も手近かな見神の法となり得るのである。

信仰といひ、教育といひ、精神修養といひ、結局は人の心の濁水から神の心の結晶法の研究に歸着するのである。

倫理學者、哲學者は我々の心に良心なるものがあるといふ。我々が石を持つて重さありと感ずるは石に地球引力が働き、我々の手がその引力に對して反對運動を起すとき感ずる抵抗で石それ自身に何等の重量はないのである。その如く良心といひ、良知といふも我の心の神性が外界の物慾や性慾に抵抗する心的の現象に他ならぬ。神性のないものには、良心といふ抵抗は感じない。鋭敏なる良心の所有者はそれだけ神性が鋭敏である。良心は實に神力を測定すべき一つの「メー

トル」である。「ヴォルトメーター」にて電氣の電壓を測定し得る如く、人は良心の感應度により神の力を測定し得るのではあるまいか。「メートル」に電力が流れぬ時には「メートル」の指針は動かぬ、指針の動く時は見えざる電力が流れて居る場合である、その如く、「良心」と云ふ「メートル」に強い「ショック」を感じ、心の指針が甚しく振れる場合は即ち見えざる神の力が強く吾が胸を撃つて居る時である事を忘れてはならぬ。「メートル」は見えぬ力を萬人に明示するものである。夫れと同様に「良心」は見えざる神の力を指し示す一事に深い注意を拂はねばならぬ。我々の心の奥に隠し置き給ひたる此の貴き寶を見出すことが、全世界の富を得るよりも最大急務である。農夫が幾年も溪川の水を呑みながら山嶺の湖水を知らぬやうな生活を御互が續けて居りはせまいか。一滴の水から山嶺の水を知り、一個の石塊から萬有引力の原理を知り得た先哲のやうに、我が五尺の肉體、我が一寸の心を望遠鏡とし、この小なる我をも宇宙の縮圖として、的確に輝き亘る神の大御心を拜し奉るべきである。

原始佛教の見性成佛は深い坐禪に入つて眞の自己を看るとき心の内にある神性を観て直ちに「我れ自身これ佛なり」と觀た釋迦の大悟徹底の眞髓も、丁度真空放電の燦然たる光を見て「我れ是れ佛」なりと觀じまた「奇なるかな奇なるかな一切衆生の心に佛性あり」との新發見をなし得たと同じではあるまいか。たゞ自己内在の光にのみ眩惑して外在の神の力に活眼を開き得ざりし一事は返すくも惜しい事である。

吾が心の裡に宿る純眞なる神性を見る事、之れ最も適確な一見神法であるが、單に吾が心に寫る神の姿を見ただけで、その域に止るならば、恰も石の一塊に引力が働き、そのため重量が生ずるとの道理を知つただけで宇宙萬有法則の原理を見逃して居ると同様、極めて價値が少ない。どうしても吾人は裡なる眞理を逆に、宇宙萬有に應用擴大して、内在の神性を通して、宇宙の生命たる大神に到達せねばならぬ。即ち内在の神心を見出す事は、やがて外在の宇宙の本體、生命の根源たる神に至る一つの道程であることを忘れてはならぬ。手段方法を目的と取り違へたる時

に、恰も電動機の内部構造のみの研究に没頭して、電流を通ずる事を忘れて居た學者の如く、そこには動かぬ生命なき形體が残るのみである。現代の所謂心理學、哲學、教育はみなこの陥穽に陥つて居るのではあるまいか。佛教も若しそれが原始佛教の如く「我」の外に神あるなし、吾が心則神なりとの思想に止るならば、真空放電にて電子の燦爛たる光にはふれたが未だ、原子の構造に思ひ至らず、宇宙物質の根源が電子そのものなりとの宇宙觀に至らぬ不徹底のものである。

キリストは「汝の心は神の宮なり」といひ「心の清きものは神を見得べし」と言はれた。こは内在の吾が心の中に神の本質を見得る見神の實驗を教へられたのであるが、基督は内在の神性を見ると同時、に直ちに天の父なる外在の神に達して居る。茲に徹透した眞理と宇宙の眞相が掌上に凝縮されて躍り出るのである。私共はいつでも地上一塊の岩石に働く引力の眞相を正見すると同時、に直ちに之れを宇宙萬有に應用し、一塊の岩石より發見せし眞理と、宇宙萬有の眞理との關係を究め、宇宙生命の根源に迄達すべきである。

然らば吾が神なる心に、純の純なる神心は何かといへば、先づ第一に私は「親心」即ち神心であると謂ひたい。「親心」これは、人の心の中に宿る純の純なる神の心である。茲に確實に神の本性の一面が見られる。「神は愛なり」「天の父なる神よ」これは神心と人心とが一致融合した神の性であると思はれる。

私共はかくして、親が子供を愛する様に、人類を愛し給ふ神、天の父を確實に見、且つ體驗し得るのである。釋迦が衆生は是れ皆吾が赤子なりといはれた境地もこゝであると思ふが、惜いことには、自己を神とし、自己の心それ自身を神として、宇宙の支配者たる神が同じ親心を持つて人類に臨んで居られる點を軽く見て居るのは釋迦のために惜しむのである。

キリストは、この宗教の見神の究極點の最高嶺に達し、確かに空前絶後、遙かに群を抜いて雲表に聳へて居る。要するに内觀的、見神法も自己の中に神心を發見し、それをレンズとして、宇宙の本體たる神を觀望する一事に歸結するのである。

以上、見神法の六門を少し述べたが、信仰の極致は見神の事實を明確に體驗する

にある。確實に神の臨在を信じ、我等の靈魂の永生を確信し、神が永遠より永遠に亘る宇宙の大建設の設計圖を見出さねばならぬ、神の設計圖に則つて地上に神の國を建設する、是れ即ち人生の眞意義であり、又その建築工場の一労働者としての自己の職責を見出だす所以である、是れ即ち人生の目的である。科學も、宗教も、教育も、乃至藝術、政治、産業その他一切の文化事業はこの眞理を闡明し、この大目的を達成せしむるための一手段にすぎない事に注意すべきである。(二二、二二、二二)

國民よ！神と基督に歸れ

一體、人生五十年といつてゐるが、一晚の悪い機會で暗い生を送ることにもなるし、又一晩の善い機會で光に歩むことにもなる。

多くの方々のうちに、信仰といふ問題に就いて科學的に深く研究した人は少ない。科學界にケプレル、ガリレオが出ぬ以前は、物理學が甚だ幼稚であつた如く、この科學的研究を除いては、信仰といふ問題へも、眞の深味に徹底し難いものではあるまいかと考へる。萬有引力はニュートン以前にも働いてゐたのであるが、人々は氣付かずに過して來た。石が落つる、塩が辛い、砂糖が甘いといふ様な個

々の事實のみを知つて、その依つて來れる根本原理にはふれ得なかつたのである。

ガリレオ以前の自然界に於けると同様、宗教界にも、たゞ事實を事實だけとしてそのまゝに信じ來たりし當時はただ口傳として傳へられたので、信仰も只個々の問題に付ての體驗を述べる丈で統一した根本原理には觸れ得なかつた。林檎の地に落つること、重さを感じること、星の空を飛ぶこと、これら凡ての現象の根源は引力に依る。この引力の眞諦を握つてこそ、更に飛行機の空を飛ぶ力學が明瞭となるのである。信仰に於ても、個々の事柄についての體驗があつても、その奥に潜む宇宙の根源たる神をハッキリと掴まないから、眞個の確實な信仰が得られないのである。心の問題を解くにも、その根源たる心の本質をハッキリ會得せねばならぬ。王陽明は、山中の賊を破るは易いが、心中の賊を亡ぼすは難いといつた。有名なペーテル大帝も、予は大露西亞を平定し得るも我一身を治め得ないと歎いた。「善をさいて従ふ能はず、不善改むる能はず是れ我が憂也」と孔子も嘆じてゐる。智識の問題は學問で解決がつくが、人生の大問題は仲々難いものである。そ

こでエマーソンは心靈の法則を掴まねば、人は眞個の力を得られないといつてゐる。實に心の世界の解決は、只信仰に存するのである。心の世界に於ける原理法則は宗教にある。即ち我々の心の中での消息の原理法則を握ることが、信仰に入る第一歩となるのである。心の問題を捉つて目に見えぬ靈界の發見をしたのが宗教家である。

我々は、決して知識のみで生き得るものでない。茶を飲まずに、米のみを嚙るときは營養とならず、却つて身體を毀すことになる。知識を學んでも、満足出來ないのは丁度、米のみを嚙つて茶を飲まねと同じである。明治時代は、この米のみを嚙つた時代である。現代の思想界に、不健全な多くの病根を醸したのもこれが原因である。科學は頭の問題を取り扱ひ、宗教は心の問題を取り扱ふ。米と共に茶を飲まねばならぬと同様、人には知識の米と、信仰の天來の清水が必要である。御互に知識を學ぶものは、信仰生活に入らねば、眞人としての價值はないのである。こゝが我々に信仰の必要な所以である。即ち科學と、宗教とは車の兩輪

の如しと、私が常にいつてるのもこのためである。

昔は物質と靈との間に越ゆることの出来ぬ溝渠があつて、肉と、靈とは千古未決の謎となつてゐたが、今では科學が電子論の立場から美事この溝を埋めてくれた。私共はこういう現代に生れたことを有難く感謝せねばならぬ。科學は電子論を橋架として靈界の域に入つたのである。今後の宗教は眞理に徹した科學者が眞劍にあづかるべきことを啓示してゐるのである。

科學と宗教との間に、横はる溝を既にとり除いて呉れてあるにかゝはらず、物質は物質で靈とは何らの關係がない、肉の附屬として靈があるときへ考へてゐるものが、まだ日本國民に多いのは實に歎かましい至りである。眞の宗教の傳道ほど今日急務なるは他にないと信ずるのである。

只今では物質の根源は、電子からなることは明瞭なる事實である。物質があるのではなく只電子が在るのである。電子の或る數が或る排列に置かれたものが物質である。電子の排列の模様に従つて、金、銀、銅、鐵、砂糖も、鹽も、人間の肉

體も生じる。即ち我々の肉體も遡上つて考ふる時は電子の或る數が或る排列に列んだもので、又我々が金を持つてよろこんでゐるが、土と只そのからくりが違つたものに外ならないのである。その本質は唯一つの電子で實に平等無差別である。所が、最近學者の研究に依れば、電子は物質にあらずして、一種の力の表現に過ぎないとの結論に達して居る。こゝをよく考へて味つて見たいのである。

我々はお金を大切がるが、實は金が欲しいのではない、買ひ得る力が欲しいのである。金銀が欲しいのではなく購買力を欲するのである。

地位と、學問を望み求めるのは、それらが我々生活の安定をなさしめる學力が欲しいのである。地位に伴ふ權力が欲しいのである。即ち力が伴はねば無價値である。大學を出て世の中に何らかの力を認められなければ、大學を出た事は無駄である。ロビンソン、クルーソーには、百萬圓を持たしても離れ島で購買力の伴はぬ金には價値がない。我々のほしいものをよく見つめるとき、それは有形のものではなく、無形のものである。

宇宙に充ち満ちてる無限の力が人間の見える形に現はれた一部の力が電子である。その現はれた電子の排列によつて、山川、草木及び動物、更に人間をも構成してゐるのである。見えるもの、奥に、見えぬもの、あることをよく知らねばならぬ。

我々は、華嚴の瀧を見て、これが何十萬馬力の力を出すのかと思ふと自然力の偉大なことに驚嘆するのである。

この力は、昔から湛へられた中禪寺湖の湖水から流れ出でた溪流に過ぎない。その湖水の裡に、我々の認識を超越した潜在状態で、何千萬馬力の力が潜んで居るのである。湖水にたゞへられた「位置のエネルギー」が瀧の「運動のエネルギー」にかはつた時に、人は始めてその力を認識し得るのである。電子は、一秒間十八萬哩の早さで飛んでるのである。即ち宇宙には、中禪寺湖の中に潜在して居る様な吾人の認識を超越した力が充滿して居るのである。それが電子といふ活動状態に移る時に始めて、物質といふ觀念の根源を興へるのである。瀧の流れ落ちてる

時でも、湖水には相變らずその潜在状態の無限の力は湛へられてゐるのである。宇宙にも無限の力が湛へられ、その一部分が電子となつて表はれたのである。陽電子の周圍に、陰電子が一つ廻つてゐるのが水素で、二つ廻つてゐるのがヘリウム、六つ廻つてゐるのが炭素で、七つ廻つてゐるのが窒素で、八つ廻ると酸素となるのである。そしてこれらのH、C、N、O、等が集つて、人間の肉體となつてゐるのである。

我々は往々にして瀧のみを見て山上湖水のエネルギーを見落とし勝ちである。靈界に於ても丁度、これと同様の關係が成立し得る。神様の力が人間に表はれて始めて人が神の力を認め得る。

精神界と、物質界との關係を例へて見るに、中禪寺湖の潜在せるエネルギーが瀧となつたのが物質であり、雲となり、雨となり、人の周圍に見えざる形にて満ちて居る水蒸氣が靈であるとも觀じ得る。即ち靈と、電子とは、一つの本源から流れ來たもので、唯その作用の異つた表現であると私は信ずるのである、瀧とな

つて流れる水の真相を静観するのが、科學であるとすれば、雲となり、水蒸氣となつて存在する水の真相を正見するのが宗教であるとも謂ひ得る。科學のみを肯定して、宗教を否定するのは楯の半面のみを見たものである。瀧のみを見てゐたのでは、湖水に降り来る水の根源である雲や、雨の現象は、不可解となる。我々はどうしても、根本の神に歸り、それから分化して生じた科學と宗教の両面を見て進まねばならない。この意味でほんとうの科學者は、ほんとうの宗教家でないければならぬ。科學は宗教の兄弟である。我々は科學を研究しつつ、靈的生活を爲さなければならぬ。それにも拘はらず、日本の現代國民が眞理の一面である科學のみに囚へられて居るのは大きな誤謬である。是非その蒙を啓かねばならぬ事と信ずる。現代の我々はどうしても、學問と共に、靈的問題に入らねばならぬことを痛感するのである。我々が物質に重さの感じを得るのは、目に見えぬ引力が物質に働き、引力がその物質を引きつけてるからこそ感ずるので、それを我々が支へる時の抵抗が、即ち物體の重さの感じとして體驗し得るので、引力が

なくなつたら、石にも「重さ」がなくなるのである。

地球上で一貫の重さに感ずるものも、太陽上では二十八貫の重さとなる。これは太陽上では、地球に於ける引力の二十八倍であるからである。我々御互、人間には變りはないが、人間に働く神の力が倍に働くとき、人間の價值が倍になるのである。神の力が二分の一になると、人の價值は二分の一になる。神の力が零になれば、人間の社會的の重さは全く失はれて、失敗して了ふのである。

人間の價值は神の力の表はれであり、その輕重、大小は人が所有する神の力の大小に正比例するものである。人格とは人に働く神の力である。心の重力が大になつてこそ人格に重さが生じるのである。

人の眞價值はその人の有する權力ではない、物質ではない、只信仰てふ神の力にあるのである。

源泉が濁つて末流の清くなる理がない。地下の根に肥料を與へずして草木が開花する筈がない。根本から育くんできこそ、臆で冬去つて春風にあつて、發芽し、

花を咲かすのである。幹を離れた枝からは花は断じて開かない。我々はこの源を培かはずして、末の花のみにあこがれ勝である。蹉躑はそこから起るのである。行づまりはこゝにあるのである。現今の政治界に、教育界に、あらゆる方面の行詰りはこゝに原因があるのである。現下の根本問題は末を棄て、根本の神に立ち歸る一事である。神より出で、神の心を盛られて作られし人は、その根本たる神に歸らねばならぬ。現代人の凡べてが一人残らず神に立ち歸る一事が、目下の日本國民を救済する最後の、唯一つの道である。その外に救極の道はあり得ない。

【基督に歸れ】「Back to Christ」とルuterは叫んだ。【自然に歸れ】「Back to Nature」と眞人が叫んだ。【神に歸れ】「Back to God」と大聲張り上げて、全國民に向つて叫ばねばならぬ時は今である。

次に、私は今一つ大切な問題を申し述べねばならぬ、それは人生問題の根本となれる基礎問題たる吾人の宇宙觀に就てである。

宇宙は生きて活動してゐるものである。死んだものに活動も變化もあり得る筈

がない。變化と活動とが統一状態に來る處に、生命現象が現はれて來る。生命の存する處に、調和と進化があるのである。

宇宙は生命ある一大有機体として、刻々進化してゐるのである。生命の根源の神が形を表はしたのが宇宙の見ゆる世界の一切である。人は宇宙の本体たる神の一分身であり、神の縮圖である。天体も、山も、川も、草木も、動物も、人もあらゆる靈と、物質の一切を總括して宇宙全体が統一意識の状態におかれて居る。そこに宇宙全体としての生命が表現されて來る。その生命の根源が神であり、神を構成する一分子、一細胞が、大自然そのものであり、宇宙の實相そのものである。即ち宇宙は、その生命たる神に依つて統一されて、活動と進化をなしつゝあるのである。生命があつて活動する處には、必ずその活動の目的がなければならぬ。宇宙は實に一大目的を周到なる一大設計のもとに、日毎にそのプログラムの一節、一節を進めつゝあるものである。神様は宇宙の御主人であり、大自然界はその建築工場である。家を建てるにも、先づ理想的の設計圖を作り請負師に頼み、

材料を集め、そこに初めて現場仕事が始まる。設計圖の通り組立て、壁を塗り、全部仕上げから、御主人が住み、そこに靄々たる家庭團欒の生活が始まるのである。宇宙の主人たる神様が永遠の昔から御設計を立て宇宙の大建築を企てゝゐる。その建築工場の一分工場は地球である。分工場の仕事のプログラムは已に定まつて不完全より完全へと進んで居る。其工場現場仕事をやつてゐるのが我々人間である。一大工、一左官が我々である。大工や、左官は主人は誰か、監督は誰かをよくわきまへず、又設計圖もわからずにやつてると、所謂無駄骨を折る事になり、結局は、不用のものとして現場から追出されるのである。人類の御主人たる神様及び指圖者たる神が人の形にて現はれたキリストによく従ひ、彼に學び、彼の一言、一句に耳を傾けてその指圖のまゝに従ふ處に道が見出されるのである。

大工が、價值ある仕事をなすのは、その棟梁に従ふ所にあるのである。忙しい時は棟梁は、手で相圖をすることがある。我々は、神様の無聲の相圖を理解する力即ち「祈り」の体験を持ち、更らに、御主人と指圖者を知る外に設計圖を見

キリストは神か
人向か？
人向か？
神か人の形にて
現はれたる神か

る活眼を持たねばならぬ。神の設計の仕様書たる聖書を體得する時に、神の設計圖が眼前に彷彿として現はれ來り、その計畫を氷解し得るのである。設計圖と仕様書とを持たずして神の左官、大工たる人間は有意義の働が出来ぬ筈がないのである。

先日、日本の電機工業界に多大の貢獻をなされた一老紳士が私を訪ねられての話に「今まで水力電機の設計圖はよくわかつて事業を經營して來たが、神様の設計圖を取り失つて五十年間睡生夢死の生活をして來ましたが、今度はじめて、神の經綸の意味がはつきりわかり、先日決心して洗禮をうけました、今後は神様の御用外は何事もせないことに心をきめました」とかゞやいた顔をして感激に満ちて述べ居られました。世には物質上に成功する人は多々あるが、神の設計をよく理解して神の御事業に成功する人が少ない。永遠から見て價值ある人生とは實に神と偕なる信仰生活を實行して行くことである。吾々が朝から晩までひつきりなしに仕事を勵んで居ても、それが間違つてゐたら、全部やり直さねばなら

ない。やり直す位なら、始めからやらない方がよかつたのである。人生も睡生夢死で送るのなら結局生れて來なかつた方がよほど良いのである。

全く價值ある人世の世渡りは、神の設計圖をよく見て働くことである。人生の仕事場にて働くべく呱呱の聲をあげて生れた以上、その説明書及監督者仕様書をよく知つてやらねばならぬ。仕様書は聖書である、監督はキリストである。棟梁は聖靈である。この眞理を度外視して、如何に現世に、物質上の成功をしても、それは、空の空である事を悟らねばならぬ。

(大正十二、十三、二十九)

自然界の法則と靈界の法則

私は科學者の立場から「自然界の法則と靈界の法則」といふ問題に就て觀察を述べて見たい。自然界といふのは物質界で、靈界は精神界を指すのである。故に宇宙萬有、森羅萬象に働く物的法則と、見えざる精神界に働く靈的法則との間に如何なる關係があるかを考察して見たいのである。

私は、曾て人は靈と肉の兩限界線上に置かれた一生物だと申した。

靈、肉兩相の限界線上におかれた一生物としての人間たる我とは何ぞや、人間本來の目的は何か。人間の眞の價值は何に由つて決定されるかとの問題を見極めて人生の大海に乗り出すものでなくば、決して光明の彼岸に到達し能はぬ。眞の

自己を視詰めて、その本體を知るにあらざれば、巨億の富も秋空の夕榮、砂上の大厦高樓である。

一體、人は自分で自分の眼を見る事が出来ない。他人から見て貰ふか、或は鏡に向つて始めて知り得るのである。又平和、静寂な田舎の真趣は、始終その中に生活して居る田舎人には分らない。偶々喧騒な都會を遁れて、山里に足を踏み入れた人達によつて始めてその静寂、平安の妙味が味はれるのである、同様に我々人間が「我とは何ぞや」の真意を悟るには、人間を離れた他の生物から之れを聞くか、又高い超人間の天の立場に先づ自分をおいて、そこから我なる姿を瞰下ろさなければ解るものでない。

抑も人間は、天上界と、動物界との交叉點、即ち靈と肉との、限界面上に置かれてあるから、これを天上界の方面と動物界の方面からとの二方面から仔細に觀察せなければ、眞個の人間の真相は解るものでない。私は今一度此の立場に自己をおいて靜に考察して見たい。

この立場を明瞭に會得するため、私は一つの例を以て申し上げたいと思ふ。エマソンは、「人は宇宙の縮圖である」と言つた。誠に至言であるが私は今、人は宇宙の「通譯」であると申したい。宇宙とは可知的、可見的世界は勿論、不可知的、不可見的な經驗を超えた觀念の世界をも含なものである。通譯とは分からぬ言葉の心を通してくれる中保者である。我々が、英佛獨の言葉を知らずに、外國へ行つたとする。その場合、外國人の話を聞いても、聲だけは聞えるが、意味は通じない。工場を參觀しても、説明者がこれは何、あれは何をする器械だと、言つて呉れても、馬の耳に風で、眼前に動いて居る器械は何をするのか、皆目解からない。結局不徹底な赤毛布に終つてしまふ。丁度、信仰を持たぬ科學者の人生觀は、往々にして外國語へ旅行して工場見學をした報告のやうなもので、獨斷な、無理解な、不合理な、偏見が記載されて居る。處で、若し外國へ行つたときに通譯が傍から一々外國人の談話を翻譯して取次いで呉れるならば、如何なる用も辨ぜられ、參觀した工場の作業も、機械の運動も、一々明亮に理解し、會得されるのであ

る。

その如く、人は大自然界の通譯であり、大宇宙の説明者である。宇宙の健々たる運行は、犬や猫には見えて居つても、その理由は解らない、たゞ人間のみが、森羅萬象に働く事々物々の聲を理解し得る。天體の運行、人類相互の關係、或は、生物界と物質界との關係を通譯して、宇宙の根本精神と、神の大設計を理解し、また人々相互の間にも之れを理解せしめ、更らに動物植物に對しても、その理解の下に指導、使役して、宇宙の根本目的を達せしむるのである。殊に注意すべき一事は、通譯の價值は、發語者の言葉を第二者に理解せしめ得る場合に限られて居る。若し語る者もなく、聞く者もない場合には、通譯は全く不必要のものである。その如く、人間も自然界に無關心であり、又周圍の人々にも我不關焉の獨善主義では、自己の存在の價值は認められない。よしや、宇宙と人との心づいても、自然界の言葉を十分に聞き取り、自己が先づ、その含蓄された意味を明確に了解出来ぬならば、通譯は不可能である、私共は、靜かに目を舉げて大宇宙を觀、

思ひを潜め、靈耳を敬て、天來の無聲の聲を聞き取り、自らを空虚にして、神秘幽玄な意味を徹底的に理解する所なくば、人間としての價值、または通譯としての資格は全然零である。自然界と宇宙に正面して、その事々物々を通じ、それを語り、それを指示する神の聖旨をハッキリ見出し、無聲の聲に耳を傾け、不可見の姿を見上げて、完全に通譯の出来る人こそ、所謂眞の人間と稱せられるものである。こうした自然界の通譯をなし得る能力は、嘗に古への聖人君子と稱せられた人々に限られたものではない。語にいふ「堯何人ぞ、舜何人ぞ」である。我々御互は、一視同仁の愛の神様の赤兒である。甲にも、乙にも、丙にも、丁にも平等に、愛の雨は注がれて居る。善き樹にも、悪しき樹にも、均しく太陽の光と熱を與へて芽を吹く力は授けられて居るのである。私共人間は、大なる祝福の下に曾て他の生物が所有せざる貴き「智」を與へられてある。一片の硝子の破片を取つて、それから天体の秘密を發き、宇宙設計の神秘を知り得る如く、我々に與へられし貴き「智」を聖旨のまゝに働かせ、靈眼を啓き、靈耳を澄まして、天來の

聖聲を聴き、真意のある所を人をして理解せしむることが、通譯としての職責を完全に果す所以であり、之れ亦靈肉の限界線上に置かれた人としての眞の價値を發揮する所以であると信ぜられる。

次に、斯うした觀方から考へて見たいのは、科學と宗教の關係である。我々の意識の世界で、最も解り易いものは物質界である。物質界とは即ち、目に見、耳に聴き、手に觸れ得る五感の世界がそれである。その世界の眞意を理解するのが、自然科學の役目である。結局、自然科學といふものは、自然界の符合と言葉を理解し、その眞髓を掴むことである。その眞髓が法則となつて表はれたのが物理學や、科學、天文學その他の自然科學である。即ち、自然界には之れを統轄する一定不變、靈妙不可思議の法則があつて、森羅萬象は其法則の支配下に動いて居る。我々人間も亦、自然界に置かれてある以上、矢張り自然界の法則の羈束から脱する譯にはゆかぬ。之れに順應し、その眞意をよく呑み込んで安定の生活を營まねばならぬ。物理學や、化學の發達は、自然界の幽玄の法則を明瞭に我々に教へ、

それによつて自然科學は益々宇宙の神秘を探り發きて、日一日と、著しく進歩してをる。それにも拘はらず、一方未開拓な、人の注意から逸して居る世界が宇宙に數多く取りのこされてをると思ふ。その世界は何か。我々が工場見學に行つて、大地を搖がし、響を擧げて運轉する機械の機能を知つた丈では、その見學の目的は完全に達せられたと言はれない、是非、その工場の經營者は何故この機械を使つて居るのか、何のために製造工業を行つて居るのかを、熟知するのぞなければ、その見學は一向役に立たぬのである。それと同様に、かくの如き大自然の運行は何のためか、經營者は何の目的を以て、かくも大宇宙を動かして居られるのか、そして大宇宙の主人公は誰で、何と申す方かを先づ第一に確かに知る必要がある。

機械に就ての説明は科學が教へる。その運轉の理由は哲學が教へる。そしてその製造の目的、經營者の氏名人格は宗教が教へるのである。結局、宗教の宗教たる價値は、自然界の支配者たる神の聖旨を體得理解し、之を未だ知らざる人々に

翻譯して、その主義方針に従つて、神自らの目的を達成せしむる所にある。

靜に思を潜めて考ふるとき、宇宙の事々物々は一絲亂れず、秩序整然として統一され、相協調しつゝ、浩々と運行を續けて居る。ガリレオ、ケプレル、ニュートンの碩學が、天の運行を仰ぎ、自然の秩序を見て讚美の聲を放つたのは、この靈妙、不可思議の整然たる統一的法則であつた。幾萬かの兵士が隊伍を組んで、一指揮官の命令下に歩調を整へて進行する如くである。先年アインスタイン博士が日本に來遊された時に、私共が宗教に就てその意見を尋ねた返事に、「スピノザの汎神論の神を信ず」といふて居つた。之れは、大自然と宇宙そのものが神の表現であるとして居る彼の宗教觀である。斯の觀方は、アインスタイン博士一人でない。詩人や、文學者や、藝術家、また東洋殊に印度系統の哲學者間には、汎神論的に宇宙を見、神を認めやうとしたのである。蘇氏の詩に「山色はこれ好身、溪水はこれ廣長舌、夜來說く、八萬四千の偈」とあるが、野邊の花一輪に、潺湲たる溪水の響に、神の御聲を聴き、神の御姿を認むるものである。私共は、斯うした

汎神論的の思索から一步を更に深く堂奥に進めると、現象的宇宙の中心に眞の統一的主人公のあるを識り、その宇宙統治の意志と目的とを理解さるゝのである。即ち汎神論的の見方は、宇宙の森羅萬象、山川草木、狗、も猫も、人間も、相對的に何物かある不可思議な力の存在を認めはするが、まだ絕對的に統一された神の統治下にあることを知らない觀方である。唯一なる神を認めないと云ひながら、各自が統一的な中心を目掛けて無窮から無窮に、永遠から永遠に働きつゝある大生命の一分身である事に思ひ到らぬのである。私は汎神論的の思索から、唯一神論的に、相對的から絕對的に、分類から統一への道筋に立つ私共人類文化の蹟を顧みつゝ、現在の自己を省み、また將來を思ふ時、大きな光に打たれるが如き思をなすものである。

哲人は、「人間一個は宇宙の縮圖である」といふが、實に、我々の身體は、一の統一體である、一部分でも統一を欠く時は忽ち病氣を惹き起す、尙ほ不統一が甚しくなつたときは遂に死に至るのである。即ち、統一ある所に潑瀾たる生命が漲ぎり湧き來るのである。この意味を以て宇宙を觀るとき、そこに統一のあるこ

とは、唯物論者も、無神論者も、肯定するのである。地球や、火星や、金星乃至無数の星辰は、宇宙體を形成する一細胞である。それらの無数の星辰の細胞からなる一大有機體の宇宙には、宇宙全體を統一する精神がなければならぬ。その一大精神を、私共は神であると信ずる。デカルトは、「我れ思ふ故に、我あり」と云つたが、私自身は、「生命あるが故に、我れ思ふ」と云ひたいのである。完全なる統一の下にある我々の身體に生命の存在を疑ふことの出来ぬ様に、深甚微妙の統一下にある宇宙に一大生命の存する事實は否定し難い。宇宙に生命ありといふは宇宙は生きて居るといふことである。さすれば、その活ける宇宙の一細胞として、地球上に置かれた人間に、「生死」の新陳代謝の起るべき事も、當然な道理であると云はねばならぬ。

聖書に、人は神の姿に似せて作られたとある。詩人は、人は宇宙の縮圖だといふ。人に精神ある如く、宇宙に精神がある。即ち、人間生命の統一の中心は精神である。宇宙生命の統一中心は宇宙精神、即ち、神である。

人々世に生れながら、
有るや無きや

我々は御互に生れながらに、神心を一滴づつ、注ぎ込まれて、此の世に生れ來つたのである。十人十色、人生に處し、各々利害得失を異にした人間同志が理解し合ひ、協調し合ふことの出来るのは、御互がこの共通の神の心を宿して居るからである。この立場から、大自然界を眺めると、野の芝草にも、庭にたはむれてる小猫にも乃至、山も川も悠々徂徠する白雲にも、神の御心の雫が滴つて居ると思はれる。詩人が自然を愛し、風月をめでののも何となく、その裡に流るゝ神心に共鳴し、自ら詩となり、歌となるのである。

科學者は、一々自然界の事象を捕へて、これを直ちに物質界のみに屬さしてしまふけれど、物質それ自身が神から出て、神の統率のもとに置かれてある以上、私共は、物質を通して、神の聖意を透見せねばならぬ。世人は物質を無情、生物を有情と考へて居るが、私は有情だの、無情だのと判然たる區別は立て難い。こんな境界線を設けることは、不合理のこと、思はれる。例へば、同じ電機であつても、一は電熱器のニクロームを通つて熱となり、一つは電球のフィラメントを通

つて光となり、一はモーターを通つて機械力として現はれ来る様に、同じ神の聖心聖力の表現を我々は、靈界と自然界、物質界と精神界の二相に見るのである。而して、全く別種類のものだと考へて居た電熱の根源を徹底的に調べて見ると、今迄別種屬と思つて居た電光の本質と全一である事實を發見する。その如く、自然界に働いて居る原理法則を徹底的に深く識れば、他方面の表現であると思つた靈界の原理法則をも併せ知ることが出来るのであるまいか。自然界の原理法則を研究しても、未だ心靈界の原理法則に觸れ得ないといふのは、その觀方にどこかに疎漏の個所があるに相違ない。物質と、心靈との相關論は常に心理學者や、倫理學者や、哲學者を待つて知るべき問題でない。尠くとも電子論に指を染めた者には、此の間の消息は釋然として會得し得る筈であるまいか。

私共が光や、電熱の事柄を明瞭に知悉せんとするには、その根源たる電子に就て熟知せねばならぬ。その如く信仰の眞髓に觸れるには、自然界と靈界とを打つて一丸とした根本の根本、中心の中心たる、神の本質を知ることが、最も捷徑

で、最も肝心である。

塵捨て場に投げられた硝子の破片を、研いてプリズムとなして用ふるならば、遠い／＼天體の星の成分を居ながらに知り得るやうに、心理學者や、哲學者や、宗教家が餘り顧み無い自然界の法則を、活かして用ふるならば、之れを通じて見えざる靈界の法則を觀察し得て、神の聲を聴き、燦ばゆき神の御姿を仰ぎ見得るのではあるまいか。

私は自然界の法則と、靈界の法則との協調相關の理を、直覺せしめられるのである。

若し宇宙間に、引力がなくなつたらば、地球も、太陽も一切の星辰は滅亡し、宇宙は破壊されて了ふ。自ら靜止して居ると考ふる我々人間は、一秒間七里半の速度で、無限の空間を地球といふ大きな球面上に引力で引き付けられながら飛んで居るのである。若し假りに宇宙間に引力がなかつたとすれば、その刹那我々は地球廻轉の遠心力を以て、無限の空間の彼方へ跳ねとばされてしまふのである。

我々自身が跳ねとばされるばかりでない、地球上の一切のもの、山も、川も、草も、木も、岩も、家も、微塵となつて跳ねとばされてしまふ。地球上だけの問題でなく引力が無くなれば、地球自身も、無限の空間に跳ねとばされ、太陽も銀河帯の幾億萬の星も、無限から無限の空間に飛び去つて、宇宙は滅亡である。所が毫かの狂ひもなく、整然たる秩序と統一の下に、宇宙全體が互に引き合ふ引力によつて、規律的に永遠から永遠に向つて、運行を續けて居る。即ち引力とは、宇宙に統一力の存する一大事實を、最も解り易く證明する一表現である。

宇宙の破壊に今一つの機會がある、それは天体の衝突である。天文學者の説明に依れば、三億萬年に一度は必ず此の銀河世界の星の何れかの一つに、衝突が起り、滅亡するといふ。さればその三億萬年目の恐ろしい日が、今日來るかも知れず、或は今晚であるかも知れない。僅か震幅四寸で、大東京は一抹の煙となり、三百年の文化が焦土となつたが、星と星との衝突は、そんな生やさしい地震や、

火災の騒ぎに比すべくもない。眞の意味に於ける「世界滅亡の日」である。これはたゞ星と星との出來事であるが、引力がなくなつたとすれば、最も完全に宇宙全體の滅亡である、斯く考へれば、我々、ありとあらゆるものが一番感謝しなければならぬものはこの引力の恵である。物理學が教ゆる通り、引力とは個々の分子間に働く目に見えぬ力であり、一切の物質の存する處にはこの引力が必ず存在して相互の間を結んでゐる。即ち、一切の物質は見えざる引力といふ力の支配下に在つて、始めて、永遠性と安定とを保つて居るのである。こは公知の事實であるが、この裏に、宇宙を貫く幽玄な哲理と靈的眞理が伏在して居るのである事を見逃してはならぬ。

大自然界に無數の物体が在るが、その分子間に於て、引力が最も強く働くものは、剛体で、鐵だの、岩石だのがそれである。少し位の伸張力ではその分子間の引力を引き離し破壊する事は出來ない。即ち分子間相互の引力が、大なれば、大なる程、その物体は、破壊力に對してより強く抵抗し、より完全な安定を保ち得

るのである。國家は一つの有機體である。國民の一人一人は一つの分子、個々の細胞である。この細胞、この分子の各々が、相互に相引き合ふ力、相扶け合ふ力が剛體の如く強くあつてこそ、その國家は大磐石の如く、安定であり、大鐵塊の如く堅剛である。國民が一致團結の引力が強大なるとき、その國家は、列強の間に位して、内政にも外交にも、常に優越の地歩を占め得らるゝのである。

引力の弱きものを、物體に求むるなら、氣體と液體である。僅かの外力の衝撃に動搖し、破壊されて了ふ。「水は方圓の器に従ふ」といふ諺があるが、弱い人はそれである。外界の境遇のまにまに形を變へて行く。善き友に交るときは善に、惡しき友に交るときは惡に導かれて行くのである。不良少年などは恰も氣體に類してゐる。捉へる所なく、フワ／＼して寧ろ健實の國家社會の團結と秩序に大なる防害を加へつゝあるのである。乃ち、我々が眞個の力強い生活に入るには、宇宙を支配し、更らに我々を支配し給ふ神の聖力に強く引きつけられ、又御互同志が同じ神の力に依り堅く結ばるゝ事が最も大切である。我々が神の力に引き付けら

れる事は丁度、鐵片が大磁石に引き付けられるが如きである。

大磁石の前には、一小鐵片は何の用捨もなく吸ひ付けられる。それは鐵片が磁化されて、一大磁石と共鳴し、相互間に引力が働くからである。それと同様に、人間は生れながらに、神の心を與へられて居る。地上に捨てある一片の鐵塊にも、一本の古釘にも、鐵である限りは、そこに磁石に吸引さるゝ力が潜在して居る様に、人々の心と心との間にも、一種の引力が働いて居る。この引力を「愛」といふ言葉で基督は表現した。それが、神の大慈愛、大磁石に觸れることによつて、一層確實にその働きを表はし、神と同化して、神の人となり得る次第である。我々御互が愛なる引力によつて、堅く結び合ふとき、そこに始めて堅い統一が生じ、そこから躍如たる生命が湧き溢れ、神の御國にふさはい、美しい、國家社會が生れ出づるのである。この心と心との引力をキリストは、聖愛の力と宣ふた。印度の釋迦は、これを慈悲と名づけた。支那の孔子は、仁と稱せられたのである。

こゝに一椀の水がある。卓上の水は一見した所、何等の力も持つて居るやうでない。然し、これを中禪寺湖に注ぎ入れて、自然の引力にまかせ、引かるまゝに流し落とすならば、華嚴の大瀑布となつて、今まで表はれなかつた、何萬馬力の水力電氣を起す。その如く我々も己れをすて、己れを虚うし、神の聖愛の御手にまかせまつり、十字架を負ふて聖旨のまゝに働くとき、常人の企て及ばぬ大事業を成しとげ、震天動地の奇蹟さへ行ひ得る。我これをなすに非ず、神これをなし遂げ給ふからである。

地上の凡ての人々が、神の聖愛に堅く結び付く時、始めて人類は聖められ、産業も、政治も、教育も、學問も、すべてが正しき道に進み、眞の平安、眞の幸福が、その國民と社會に齎らされるのである。

神と偕なる聖愛の生活に入つてこそ、初めて悲しみを喜びに、失望を希望に、暗黒を光明に、混亂を秩序に、分立を統一に導き得る。自然界の大法則、大原理の根源は引力である。靈界の大法則、大原理は愛の力である。混亂したこの日本

を救ふものは、この神の愛の力に復活する外にない。

今日本は、大リバイバルの焰を待ち臨んで居る。かの昔のポーロやステパノの如く、殉教の血汐を注いで、之れが導火線に誰か點火を試みるであらうか。我々各自の上に、その大使命が今下つて居るのでなからうか。

神の愛を離れて、我儘勝手な生活を營むものは、地球の引力から離れた物體の如く、それ自身が、既に自らを破壊し、滅亡せしめて居るのである。自らが、自らを破壊する一事が、曳いては、世界も、國家も、家庭も、友人も、知己も、すべてが、破壊され、滅亡されるのである。原因は自己が神の聖愛に離れた瞬間にある。幻のやうな、地上の權勢や、財産や、名譽を得んとするは、恰もこれ、水中の月影を捉へんとする猿猴の類である。輝く月は天上にある。神の法は吾等の心の中にある。水中の月影を追ふことをやめ、神の懷にとび込み、潑刺たる生命の乳房を搜り求むべきである。

神の聖愛に觸れ、生命の乳房を啣む事は、全世界の富を獲たよりも、王候の榮華

を身に鐘めたよりも、大なる喜びである。農夫が、かくれた寶を見つけたならば、己が持ち物の凡てを賣り拂つて之れを求むる如く、我々も亦朽ち果つる金錢、名譽、地位、權勢の束縛から解脱して、この天の寶を握るべきである。神によつて聖められぬ財産は、却つて躓きである。世界の富を一身に集めたカーネーギの晩年を見よ、神によつて聖められぬ權勢は寧ろその人の桎梏である。世界の近世史を震撼したナポレオンの末路を見よ、我々御互は、神の愛の力に生き、愛の力に哺ぐまれて、愛の力のまゝに働きたい。

我々は、靈界の法則をキリストの體驗に見出す。ニュートンが萬有引力の法則を啓示してくれた如く、キリストは、既に二千年昔に靈界の法則を吾人に明確に啓示し給ふた。「神は愛なり」とは彼の結論である。愛とは即ち心と心との引力である。大自然界の物質が、ニュートンの示した引力を基調として、成立する如く、精神界は愛を以て基調として成立してゐる。實に靈界の法則は、神の愛を根本原理として、一切がそれから成立し、生命が湧き來る。萬有引力の法則を學んで、始

めて、宇宙萬有に通ずる科學的事象が釋然と水解する如く、我々は、「神は愛なり」との靈界の法則を學んで始めて、宇宙生命に關するあらゆる問題が、豁然大悟し得るのであるまいか。

私共は、もつとく、へり下つて、基督に學び、宇宙を支配し、世界を動かす愛の力に就て、深く學ぶ處があらねばならぬ。

(大正十三、一、十二)

愛の力學

……愛する者よ われら互に相愛すべし…… (約一書四〇七)

過去六千年の人文發達の跡を顧みて、人類が非常な發達を遂げ、文明史上一大飛躍を爲し得た時は、必ず何物か一つの未知の「力」の真相が發かれ、人間の手に依つて、利用し得るに至つたの時である事が見出される。

それ迄、未知であつた「力」を人類が確實に實驗し、科學的に考察して、その「力」の本質を確かめ、その道に従つて、利用原生を攻究する時に、そこから偉大な發明が生れ來り、人類生活に、一大革命が與へられる。「火力」「水力」「蒸氣力」「電力」がそれである。今日の世界の文化の一切は、この力から湧き出でて居ると云つても過言でない。

歴史は繰り返す、人類の努力と究明に應じて、神はその御姿を次第に顯現し、その真相を示し給ふ。上述の「力」を科學的研究方法により發き出し得た如きものは將來の發展より見れば、その過程の、ほんの一部分に過ぎないものと思はれる。

私は今後、科學者の手に依つて、宇宙の真相が確かめられ、將來の人類を祝福し得べき一大革命が與へられ得べき發明がありとすれば、それは實に「靈力」の研究とその應用でなければならぬと信ずる。

今迄人類が見出した、火力、水力、電力等は何れも、人間から見て無情の世界の物質界に屬するが、人は「パン」のみにて生きるものにあらず、靈的實在たる人間はまたその本性と共鳴する有情、有心の「靈力」そのものに就ての科學的攻究が極めて大切である。

靈の實在に就ては、人間が生きて居るて事實さへ能く反省凝視すれば、直ちに認め得るが、さて、その靈の本質と應用に就ては、恰もニュートン以前の人間が、岩石が落下し、水が高きより低きに流る、事實は常に認めながらも、その眞

相に觸れ得ずして、過ぎ去つたと同様に、物質力のみで囚へられ勝ちなる現代人には、靈力の真相は、顧みられずして等閑に附せられて居るのではあるまいか。等閑に附せられ、見逃がされて居ながら、現代人は、物質に飽き足らずして、何物かに、自己の靈性の饑渴を満さんとして苦心し求めて居る。これが乃ち、現代、社會一切の懊惱と、矛盾の原因であると私は觀て居る。

基督は、「神は靈なれば、拜する者も靈と眞理とをもて拜すべし」と、仰せられた。

また、「神は愛なり」と宣言された。「靈なる神が愛である」とは、私共には、暗夜に一闪、輝やく雷電の閃きの如く感ぜられる。

底ひの知れない、靈界の探求に入り込む、絶好の手懸かりであり、地下深く埋没する金銀鑛脈を掘り當てんとする者への露出脈の突角の如く感ぜられる。

神の「靈力」の真相を科學的に確認する前に、私共は、「靈力」と相關的に、原因、結果、の關係に立つ、「愛の力」に就て、科學的の考察を進めておかねばなら

ぬ。

「愛の力」は「靈の力」よりも更らに、私共が日常痛切に、經驗させられる驚くべき力である。殆んど、人生一切の事象は、それが幸福であれ、不幸であれ、歡喜であれ、悲哀であれ、一切の出來事が「愛」より迸り出て居る。

人生の一切は「愛の力」と云ふ潮流の上に浮かされて、流さるゝ一艘の舟の如きである。

「愛の力」てふ潮流の方向のまゝに、流され、その動搖、その波瀾のまゝに一沈一浮、一進一退して居る。

人生とは、人間相互の間に働く、「愛の引力」が働いて現出せしめた、地球表面上の一現象に外ならぬと觀られる。丁度地球表面上の物質運動の一切、森羅萬象の變化の一切は、物質分子間の引力に依つて實現されて居ると同じ事實であるまいか。

地球上に引力が存在するならば、それと同様の引力が、亦宇宙星辰の間にも働

き、宇宙全體がその引力の活動の場である事を科學が教ゆる如く、地上人間相互の間に、「愛の引力」が働いて一切を支配して居るならば、亦同様に同じ「愛の力」が、宇宙全體に働き、宇宙そのものが、愛の引力の活動の場である事を認め得るのではあるまいか。

引力の働く場には、力線が存在し、その線に觸れるものには、力を感ぜしめる如く、愛の引力の働く場に、愛の力線が充滿し、その愛の力線を感じ得る有情の人間には、その力に觸れて丁度、磁石が大地の磁力線にふれて、南北に向けられる如き力を、人の心が感受し得る事實を吾等は日毎に經驗する。

この愛の力線を、靈力と云ひ、この力線に人の心がふれた場合を、靈的體驗と云ふのではあるまいか。

科學に於いて、引力活動状態が明らかとなつた結果、宇宙一切の物質運動の現象が闡明せられ、電磁場の力線の真相が明らかとなつて、電磁氣現象の一切が了解し得た如く、人の心と心の中に働き、又人と神との間に働く、愛の引力の真相を、

究明して、徹底的に解決した時が即ち人生一切の問題を、釋然と氷解し得た時ではあるまいか。

私は、現在自分が多くの物質科學の研究問題に没頭し、その真相の探求に深い興味を持つ如く、又自己を一個の試験管とし、一個の小さな磁石として、この愛の引力の働く磁場におかれた吾が心に、寫り來たる光に深甚の感興を覺ゆるのである。次に、私が昨年、愛の力學に就て、考察した消息の一部分を、御參考迄に申し述べておき度い。

近代の科學は、電子論の研究より、原子構造論に入つて、漸やく、その堂奥に入つた感がある。その最深、最奥の科學の堂奥の原子構造論の觀方を、靈的方面より觀察すれば、そこに、何物か、靈の輝やく光の見出し、深い思索に導かれるやうに思はれる。

先づ第一に見逃してならぬ事實は、電子の集團より成る原子が、一定の幾何學的構造を有する事實で、之が靈的に何物かを私共に暗示する如く感ぜられる、幾何學

的構造と神秘の世界、この二つは、從來少しも關係なき如く考へ來つたものであるが、最近不思議にもこの二つの間に極めて重大なる密接の關係が存在する事實を發見するに至つた。幾何學は、數學中最も平易簡單にして、理解し易き學問である。而して數學の一初歩として學びし幾何學が、人生に如何に應用し得べきかは多くの人々は考へ及ばざりし事柄である。而もその幾何學が、最も深遠にして極大なる宇宙の構造と、又最も幽玄にして極少なる原子の構造に、極めて密接の關係を有するとは、誰れしも想像も及ばざりし處であらう。最近二十世紀の科學が産んだ最も偉大なる二大發見は、物理界に於ける相對性原理と、化學界に於ける電子の發見の二つである。人類が、未だ曾て考へ及ばざりしこの二大發見が、何れもその深奥なる學理の基礎を、簡單なる幾何學の上に立て、おる事實は、最も注意すべく、且つ興味深き事象であると云はねばならぬ。

元來、數學は人の腦裡に於て組織的に組み立てられた一つの論理であつて、決して自然科学そのものでなく、寧ろ精神科學の一つに加へらるべき

ものである。然るに、自然界の現象そのものとは、何等直接關係を有せない數學が、自然を取り扱ふ自然科学の一切の現象を解決すべき唯一の鍵鑰となつて居るのは、實に面白い事實で、而も、數學中の最も簡單明白な關係を取り扱ふ幾何學が、有史以來神秘の世界と考へ來りし、宇宙の構造と、原子の構造の基調をなして居る事實を見出だし得るのは、そこに深い一攝理の手が働いて居る如く感じて、盡きぬ感興を覺えずにはをられない。

相對性原理は、アインシュタンの頭腦の中で、幾何學的の二つの坐標系の相對的關係から始まり、非ユークリット幾何學が導く空間の觀念、宇宙の構造論に至つて居る。若しも、アインシュタインが、幾何學と云ふ一つの武器を有せなかつたならば、今日人類を驚異せしめし相對原律の、神秘の扉は切り開き得なかつたに違ひない。實に幾何學乃至一般數學が教へ導く一つの道は、地上の人類を、超人の世界へと深く入り込ませしむる一筋の天與の途であると云はねばならぬ。第二の驚異すべき事實は、幾千年來の人類が有せし物質觀念を根本より覆へし、人智をし

て極少なる電子の世界に導き、新物質觀念を與へた電子論の發見である。この電子の世界の展開によつて、不滅と認められた元素乃至一切の物質がその姿を消して、唯だ存するものは見えざる微粒電子そのもの、世界となつた。電子論の立場より觀たる吾人の世界には、最早物質は無く、電子の集團があるのみである。物質なる觀念は、實に電子集團の實在に對する陰影として、吾人の感覺に觸るゝ一現象に外ならない。而して、見えざる微粒子の電子が、吾人の肉體に見ゆる形式に組み立てられ、物質なる觀念を引き起こさしむる間に、一つの因果關係が成立してをる。その因果關係を明らかに説き示すものが、即ち電子の幾何學的組織である。電子が互に幾何學的に集團する結果として、吾人に元素なる具體的事物を認識せしめ、自然界の森羅萬象は現出し來る。即ち吾人を圍繞する大自然は、山も、河も、野も、鳥も、人間自身も、結局は見えざる電子の幾何學的集團が持ち來らしめた具體的徴象に外ならぬ。

一方に於ては相對原律によりて、人智の達し得る極大の宇宙觀が、幾何學的に

構成されて居ると同時に、又他方に於て、人智の達し得る極微の原子が、電子の幾何的構造に依つて現出して居る事を發見するは、實に天地構造の妙、茲に至つて極まれりと云ふべきである。曾ては、多種多様なりしと認められたものが、現今では全く一元に歸し、而も宇宙一切の事物が、悉く是れ神の手に成る事が如何にもと肯かれる。私はいつも、斯く考へたる時にダビデと共に、天地の造主なる神の聖業を讚美せずにはをられぬ。あゝ讚むべき哉、天地の妙、あゝ讚すべきかなエホバの力。

茲に私共が、今一つ思索を更らに押し進めて行かねばならぬ事が残つて居る。それは極大の宇宙と、極少の原子が何れも幾何學的構造の上に建てられて在る以上は、その極大と極少の中間に介在して居る人生社會人類全體が矢張り幾何學的基礎の上に建てられ、その法則のもとに支配され、且つ安定の運動を保ちつゝある事を知られる。その道に従ふものは榮へ、その道に逆ふものは破滅すると云ふ一つの前提を肯定して、靜かに人生てふ一大實驗室に於ける諸現象を凝視せねばなる

まい。

私は從來人類が神秘と考へ、幾千年間神が地上の人に隠して開かざりし秘密の扉の合鍵として幾何學が用ひられたと同様に、人生に於て未だ開れずして残された神秘を打ち開いて、天國に通ずる眞理の扉の黄金の合鍵が、又幾何學中に藏せられて居るのではあるまいかと考ふるものである。「人生と幾何學」これは、相對性原律と、電子論とが私共に解けよと投げかけて呉れる大きな謎ではあるまいか。此の大きな謎を解く前に、一つの是非考へねばならぬ問題がある。これは宇宙の力に對する新らしき概念と、その研究法とである。

電子論の教ゆる處に従へば、大自然そのものは結局電子の一大集團に他ならぬ。電子は物質にあらずして、一種のエネルギーの顯現である。即ち力の顯現の結果である。然らば宇宙の眞諦は、力そのものであるとの結論に達する。大自然は偉大なる力の顯現である、宇宙は力である、この科學的事實を有情の人が觀るならば、「神は愛なり」とのキリストの體驗が導き出されて來る。宇宙に造物主があり、

その造物主が神であり、神が愛と云ふ引力にて結合したものが有情の心を生ぜしめ、生命現象はその力を因として發現した結果であるとの事實が考へられる。この愛の力を主觀的に生命の根本として觀た處に、宗教が生れて來る。又この力を客觀的に理性の上から靜觀した處に、科學が生れて來るのであるまいか。

科學的の力と愛が一つの同じ實在を二つの異なつた立場から觀察したものであるとすれば、自然現象の科學に於いて力の學問、即ち力學があると同様に愛の世界にまたその愛の力學がなければならぬ。而して自然界に於いて、物質力學に通ずる者は、汽車を動かし飛行機を飛ばし、潛行艇を走らせ、電信、電話の神技に達し世を驚愕せしむる力を與へられる如く、愛の力學に通ずる者は心靈の世界に於いて、世を動かす神技を行ひ得る力に通じ得る筈である。而して自然科學に於いて、一大發見者があつて始めて各人が一般的にその消息に通ずる如く、宗教上の愛の力學に於ても、同様そこに一大天才が出來つて、その發明發見を普遍的事實として啓示するならば、それが人類に對して、唯一無二の福音でなければならぬ。而して基

督は實に靈界に於ける空前の一大發明家であつたのである。

科學に於ては力學が總ての根本をなす如く、心靈の世界に於ては愛の力學が、人生の根本をなすものであると考へられる。ニュートンの物理學及びアインシュタインの相對原理が、一の力學であると同様に、基督の體驗とその教訓は、實に天下に絶する愛の力學を説いたものである。聖書は實にその力學の一切の原理と應用を書きしるしたる一卷の教科書である。科學者が、力學に通じて大なる力を受ける如く、吾人は聖書を學び、基督の教を實驗する場合に、始めて大なる力を體得し得るのである。

私は茲に、神が人に残されたる一大事實が吾人の眼前に横へられてあると考へる。それは基督の示したる愛の力學を科學的に體系を整へ、物理學や、化學を學ぶ如くに、之を普遍的眞理として萬人に示す一事である。

人類中の最大天才にして、神の人なる基督は、恰も暗夜に電光が閃いた如く、其御生涯は、極めて短時日で、天に歸り給ふた。天國の眞理の骨子を示されたる

まゝで、後の一切は將來の人類の爲めにその完成を開放せられた。實に使徒行傳及びパウロの書翰はその補遺に外ならない。聖書中使徒行傳のみが未完結で擱筆してある譯は、現代の私共にもその後篇の一節にても書き續けよとの神の攝理に外ならぬ。精神科學として基督の力學を完成する一大事業は實に、二十世紀以後の人類特に基督者たる科學者に神が残し給ふた特別の使命であると考へざるを得ない。「愛の力學と、幾何學」これは今私が、相對原律と、電子論から啓示されて居る心靈上の大きな謎の一つである。

宇宙間のあらゆる實在物は、よしそれが見ゆる自然界の諸現象であらうと、又見えざる心靈上の事實であらうと、常に一つの吸引力が互に働いて、結ばれてをる。この力が形而下の自然現象に現はれたものが、ニュートンの發見に係る萬有引力であり、この力が心靈界に顯はれたものが、即ち愛であると信ずる。而して科學界に於いて、力を取り扱ふ學問に力學があり、その力學に、更らに、氣流力學、水力學、剛體力學等がある如く、心靈上の力學即ち、愛の力學にも種々の分

類がある。此の愛の力を、幾何學の立場から觀察すれば、少なくとも四つに分數し得る。

- 第一 一點愛
- 第二 直線愛
- 第三 平面愛
- 第四 立體愛

一點愛とは、自己中心の利我愛である。他人や社會の福祉には全く無關係、沒交渉で、唯だ自己をのみ愛する愛である。水中に落した一滴の油の如く、又無人島に上陸した漂流人の如き生活で恰も空間に浮ぶ一點の如く、周圍とは何等の交渉もなく孤獨に存在する。斯かる人は、宇宙全體より見て、在つて無きが如く、全く其存在の意を有せぬものである。否意義なきのみならず、身體無數の細胞中の癌種の如く唯だ一細胞のみが肥えたらんとする時に、人間全體の生命が絶だれる。實に恐るべきは、利己にのみ生くる一點愛の生活である。これを幾何學から

觀ても、一點ほど動き易く不安定なものはない。他點との連絡なき故に、微少の振動にも、直ちに變化をうけ易く、永久に安定の地位は得られない運命に置かれたものである。

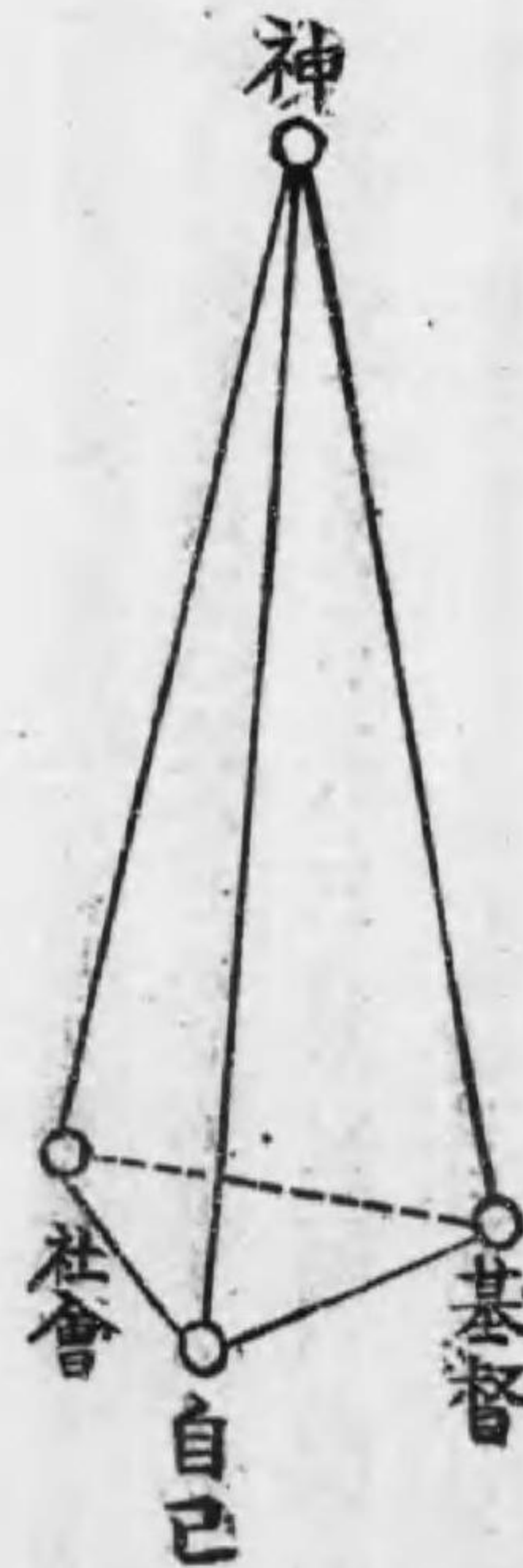
第二は、直線愛である。直線とは二つの點を結んだものである。故に他端の點が、飛び去らんとしても一方の點が固着すれば、容易に飛び去り難い、即ち一點に比して更らに安定のものである。けれども空間に於ける線の位置はなほ極めて不安定である。僅かの力にも、上下四方に自由に移動され易い。少くも強固な立場を持つて居ない。また線の中央に龜裂が一つ生じても忽ちに二點は永遠に分離して破滅の悲境に陥つて了ふ。斯かる破滅し易い不安定の直線愛は、人生に於ては即ち、自己と外在の他の一物に對する愛着心のみ依つて生きて居る人である。神を知らざる人と人との愛もそれであれば、又金錢、名譽、榮達、學問のみに焦慮熱中する一群は、皆この破滅に近い不安定なる直線愛の上に置かれた人々である。直線愛に生くる人は、その尊い生命と實と一切の運命とは糸の切れかゝた風

の上に一任してあるのと同様である。一陣の烈風は、忽ち一切を奪ひ取り風は風にゆられて舞ひ落ち、遂には泥土の中に葬り去られるであらう、かゝる不安定の生活より解脱して、更らに安定なる安住の生活に入るべきである。

第三の平面愛とは第三者が入り來つた愛である。空間に於て三つの點が互に連絡さるゝ時に、直線にあらずして平面が生ずる。即ち三點の結合に依つて、始めて宇宙間に平面なる足を落ち付かしむべき地面が生ずるのである。三點の連絡せる三角形は平面中にて最も安定強固なる形態である。一本の線が切れても他の二本が支ゆる故に、一點或は直線の如く不安定でない、極めて強固なものである。更らに三點が進んで四點の連絡となれば、四角形を形成する。而して四角形とならば四邊の長さに何等の破壊なくして、自由に變形され菱形となる不安程度を有する。然るに三角形はこの不安定度より全く獨立して嚴然と存在して變形する事がない。三角形に於てはその一邊を切り取りて押しつぶさなければ變形せない。

三邊が元の長さである以上は、永久に原形を保つ性質を有して居る。この原理が今日實社會に於て橋渠の構造及び家屋の構造の根本をなすもので、如何に偉大な鐵橋でも皆、三角形の鐵筋の組合せから成立するものである。決して四角形や一直線のみを力と與へしめないで、三角形の三邊の釣合から成立して居るものである。即ち現在の權威ある橋梁力學の基礎は三角形の幾何學的原理の上に立つて居るのである。これは人生卑近な例について考へても、一家庭に於て夫婦兩者の愛は直線愛である。けれども、茲に小兒が生るゝ時に、三角の平面愛となり、切斷し能はぬ愛が生ずる。又社會の生活に於ても、個人が利害を二點として直線連絡が生ずる場合は、又利害相反する時、忽ちに氷炭相容れざるものとなる。然るに茲に第三點の信仰上の結合が入り來り、之に二者が互に連絡して、信仰を三角の頂點とする連絡の生ずる時、始めて不滅の事業が形造られる。或は又個人個人の二點の連結に更らに之れに國家社會の爲めてふ一つの共通點が加はり、之に堅く結ばるゝ時に始めて國家は安定を得、社會の秩序は保たれる。從來歴史が教ゆる安定の社會國家、人間の形成する團體の健全なる進歩は、何れも皆人心の三角同盟

に基因するものと云ひ得る。私共自らは、今果してこの三角形の生活をして居るか
 どうか。單に利己本位の一點愛の生活にとち籠つて居るのではないか。或はまた不
 安定極まる一線愛の生活をなして居るのではないか、自ら深く反省せねばならぬ。
 第四は立體愛である。宇宙は平面でなくて、立體より成つて居る。人生そのも
 のも亦平面の世界でない。立體の問題は、平面の力學だけでは満足なる解答を與へ
 得ない、必ずや立體力學に依らねばならぬ。心靈上の力學に於ても、眞に徹底した
 る力の生活に入るには、どうしても立體愛の世界に入らねばならぬ。立體愛とは
 何か、即ち天上の神を頂點とし、地上の平面に於いて基督と、他人と、自己の三つ
 が三角をなし、各點が神なる頂點と連結されて成立する立錐體の愛の世界である。



地上に於ては、人の形をとり給ふた神の人に連結し、自己も社會も凡てが神の人
 に結ばると同時に、天の父なる神に結ばる、此の生活に入りてこそ、始めて人は
 永遠の生命に入り、元素が立體幾何學的形態を取つて、始めて不可分割の安定度
 を有する如く、人も不朽に存在の價値を發揮し、千とせの磐上に己のが足場を据
 へる事が出来る。而してこの立錐體を神なる頂點を中心として、廻轉せしむる時
 に、そこに神を中心とする一つの球體が出来る。而してその球面上の各點は、何
 れも皆互に吸引しながら、同時に中心なる神に吸引され連結されて居る。恰も地
 球表面上十六億の人類乃至一切の萬有が、何れも皆地球の中心に吸引されて、そ
 こに、極めて安定なる地上の物質的存在が許されて居る如きである。

吾人の人生に於ても全く是れと同様に、地球表面上に生存する一切の人類が、
 一點愛の生活より進んで直線愛に、更らに向上して平面愛に、更らに躍進して、
 神を中心とする立體愛の世界に活くるものとなり、始めて天國は降つて地のもの
 となる。各個人が神を愛するの愛をもて、互に相愛し、相扶けて進む處に神の國は

來り、世界の眞の平和も實現さるゝに至る。神を信じ、神を愛するは實に、世界人類救済の中樞軸なる一事を深く悟り得るのである。

(大正十三、一、十二)

人々靈力

一

キリスト教に於て、汲めども盡きぬ泉の如く、潑瀾たる生命の力の溢れ來たる源がありとすれば、それは復活の主を信ずる一事である。聖靈なる活けるキリストを初代の弟子の如く直感することである。キリストが十字架上に血を流し給ふて以後、二千年の今日に於ても若し私共が、生命の眞清水を飲みうる信徒としての實生活を送らんと欲せば、聖靈の活ける神を目のあたり見奉るより外に道がないである。

使徒行傳の一番初めには、基督が聖靈の形に於てあらはれ給ふて、おじまどへる弟子達に天の言葉を語り給ふたことが書きしるされてあ。が、今晚は、この中

に潜んでゐる盡きざる生命の糧を學んで見度い。

「主よイスラエルの國を回復し給ふはこの時なるか」と問ふた。弟子達は、召された後迄も地上の富、權利を欲してゐたのである。ローマの支配から遁れて、理想王國の建設を夢見てゐたのである。

現在の大部分の人々も、この弟子達と同じ願望を抱いてゐるのであるまいか。日本の現代の政事家、事業家社會改善家と稱する人々を見るに、地上に於て自己の名譽のみ追ひ求める結果、種々の方面に、争の種子を播いてゐるのである。されど、イエスは答へ給ふて、「聖靈汝等の上に臨むとき汝の力をうけん、而してエレサレム、ユダヤ全國、サマリヤ及地の極にまで我證人とならん」と曰はれた、實に我々が眞の神の力を受くるは物質上に恵まれたときでなく、イエス來つて我々の心中に宿るときである。

使徒行傳は、聖靈が、愚かな人々に宿つて、如何に多くの不思議のわざをなしたかを證明する聖靈行傳である。

世に眞の偉業を完ふし得るためには、聖靈が我等に宿らなければならぬ。この聖靈の力に充たされてこそ、始めて眞人間の生活が出来るのである。肉の自己のみ見つめて生活するものには、力は生じないのである。キリスト教の奥義の奥義は、見えざる聖靈の基督を直感する一事にある。この聖靈を體驗しなければ、キリスト教に、力がなくなるのである。先月の新聞に、或る英國の探險家が、エジプトのピラミッドの下を掘つて見た記事が出てゐた。四五千年前の王様の墓を掘つた處が昔の種々のめづらしいものが出て來たそうである。その珍奇の數々の中に、僅かばかりの穀物の種子が出て來た。それは、粃穀のまゝであつて、四五千年もの間、化石のやうになつてゐたのである。歐洲に持ち返つて、大地に播いて、果して芽が出るか否かを非常な興味をもて試験した。それをまいて見ると、不思議に雨や太陽の力で、發芽し生長して穂が出で終に立派な實を結んだとの事である。

五千年前の米粒は、地下では全く化石の如くなつて、そこには生命が無い如く

見ゆる。従つて若し掘り出さなければ、今後何千年たつても、芽はふき出でず、化石のやうに地下にあつたに違ひない。

所が地上に蒔かれて靈妙な光に照らされ、恵みの水分がそれを濕ほすと、何千年からうづもれてゐた靱から、限りなき生命が生れてくるのである。

めぐみの露に打たれずば、死んだと等しい種子に、この不思議な發芽すべき力が生ずるのである。この事實は、御互信仰生活をしてゐるものゝ、見逃がしてはならぬ大切な事實である。

私共は、神の前には、一粒の種子である。神の聖靈にふれなければ、心の中に發芽すべき筈の芽が出ないのである。聖靈が降つて始めて、人に力が生ずるのである。この聖靈の源なる神を知らずに、只地上の名譽や、權勢にとらへられてゐるのは、只今の日本の現状であるまいか。嘗つて地上の權勢をよりたのんでゐたパウロもダマスコ門外で、復活の主を直感し、聖靈の力にふれて、あの偉大なる生涯を送るに至つたのである。目醒むべき秋は今である。日本の現状打破の秋は

今である。種子の發芽状態を仔細に見るに、種子の中には養分を貯藏せる子葉があつて、その補助によつて芽は漸次生育するのである。我々に於ける肉體とか、物質と云ふものは、精神に對して補助機關となるべき子葉のやうなものであるまいか。實にそれらは、心の小さき粒子がのびるために用ひられてこそ價值があるのである。種子は、子葉丈では生育しない。太陽や雨に浴してこそ、完全な發育がなし遂げられるのである。我々は、たとへ地上に地位財産を積むも、この神の大きな力にふれなければ、前に申したエジプト墓下の種子と何ら變ることなく、永久に芽生ゆることがないのである。我々の悔の改めは實に墓下の靱が、日光や雨にふれて、新生命が古い靱殻を破つてのび始める時である。我々の新生は、實に悔の改めからその第一歩を踏み出すべきである。神様を知らぬ多くの人々は、墓下の靱殻の如く、永久に暗い人生を送らねばならぬのである。神のめぐみの露にふれてこそ初めて、光輝く人生が送れるのである。

結局私達が、神の前に生き甲斐ある信仰生活を送るとき、神の芽が心のうちに

のびてゆくのである。引力にまかせて落下する石は、よく下に置かれたものを破壊する力が發する。また引力にまかせて落下する瀧は、何萬馬力の電力を捲き起こす。ましてや天地の神の力にまかせて、その力のまゝに働くとき、人智にて豫想だも及ばぬ偉業が完ふされるのではあるまいか。

この不思議の力を今日私共は信仰の力により經驗し得る。火事の際に平生不能な重い荷でも何らの苦もなく運び去るのはよく聞く例である。我々が信仰生活に入つて、聖靈の神を信じ、且つ體驗する事に依つて、今まで經驗し得なかつた力が湧き出てくるのを知る。かくして初めて古き罪の自己が死し、完全な人格者が生れてくるのである。

聖靈を實感しない人は、口ばかりの信者である。電流が通ずれば、始めてモートルが動き出し、電車が走り始めるのである。而して一度動き出した電車は靜止せんとしても、容易に靜止せられぬと同様に、聖靈が心の中に注がるゝとき、不思議と思はるゝ程の力が湧いて來る。我々はこの聖靈を實驗せなければ駄目であ

る。光を受けずしては新生命は發芽し能はぬのである。

X光線やラヂウムの光線がそゝがるゝとき、種々の不思議な現象が現はれる。その如く聖靈の力に満されるとき不思議が行はれるのである。古來聖賢が艱難のうちにも泰然として萬難に打ち克ち得るは、心中に大きな力を藏するためである。心中の大きな力は、實に神の聖靈が注がれるとき湧き出づるものである。

凡ての人々の心の中に、自然にこの力が潜んでゐる。この力ある生命の芽は、神の惠の露にうたれて始めて發育する。盤根錯節の苦難に鍛はれて後、克く人生に勝利を克ち得るのである。神の聖靈が力から離れて居る人は、太陽を遮ぎられて、日蔭に育つた草花の如く、一陣の微風にも折られてしまふかも知れない。

世の物慾と我慾は、兎もすれば聖靈をさへぎり勝ちである。そのため折角堅實に伸びやうとする心の芽を打ち切ることが往々ある。

心の貧しきものは幸福なり、心の清き者は幸福なりで、何ら聖靈をさへぎる障壁のない人は實に幸福である。あけ放つた雨戸から、朝日がサツと入つてくる如

く、聖靈の光が入り得るからである。肉慾や物慾に執着して居るものは、何時までも障壁がとり除かれないうで太陽の光の前に黒雲が蔽ふた如くである。

凡ての黒雲を拂ひ去つて謙虚な心になつて、生命の清水を思ふ存分、受け得るとき、そこに潑刺たる新生命が湧き進るのである。そこに世に克つ力が體驗せられる。豆の種子も子葉の大きい程芽の伸び方が大きい。その如く心の中の靈の芽が大きく盛んに發生するためには、健全な身體と、深き智識が必要である。身體も、物質もこの意味で價值があるのである。身體や物質は、精神の發育の補助機關となつてこそ、その必要があるのである。

使徒行傳を見ると、この章丈に結論がない。こゝに私は、大きな神の御旨がひそんでゐると思ふ。我々五十年の人生をして使徒行傳のあとにその一節を身を以て聖靈に依り書き加へんがためである。使徒行傳には、無學のガラリヤの漁夫、ペテロ、ヨハネ等を用ひて如何に不思議をなさしめたか、又パウロを如何に聖靈が用ひたかを示して呉れてあるが、今日そのあとをひきうけて、一句にてもつけ

加へなければ我々の地上に生を與へられた使命に對して申譯がないではないか。

基督が「ユダヤ、エレサレム及地のはてまであかしをなせ」といつてをられるのはそこである。科學に於ても、あかしがある。證明のない科學はないのである。我々は、聖靈の主イエスが我々の中に宿つて呉れてる事實のあかしをせねばならぬ。そこに私達の使命があるのではあるまいか。

三千年來思想の上にも、經驗の上にも、鍛へにきたへて來た現代の我々は、初代クリスチャンの行爲が何故出來ぬか。罪惡が巷に満ち、險惡な思想が往來してゐる現時の日本を光明に導かん爲めには、先づ神を信じ、使徒行傳の一節を聖靈の力によつて書きつゞけることが最も大切なのではあるまいか。

「大きな瀧と、志ある人の前には、自ら路が生ずる」といつてゐるが、神の約束を信じてイエスの御足跡をふみ行ふ人には、自ら道が開けるのである。我々の立場にイエスが立ち給ふたならば、どう處置なさるであらうかと、いつも考へつゝ前進するとき、必ず前方に道が開けてくるのである。我々は神の前に身をさゝげ

た謙虚な下僕となりたのである。神の前に拔くべからざる信仰をもてる人の手によつてのみ、日本國家の難局が切り開けると思ふ。

春は種子をまき、秋はかり入れるときである。今は正に春である。あの大地震は、梅の花にもたとふべきか、寒梅咲いて春の近きを知ると云ふ。今は天來の靈風が強く日本全土に吹いて居る時である。げに心の畑に聖靈の種子を播くべき時は今である。

(大正十三年、二月、二)

日本國民と基督教

今日は畏くも攝政宮殿下と、良子女王殿下との御慶事を舉げさせ給ふ、いとも目出度い日柄であるので、私は國民として日本國と基督教の關係に就いて、私の所信を一言申し上げ度い。

日本國民の多くは、皇室と基督教及び日本國體と基督教は兩々相容れぬものであると考へて居る。そして基督教を信ずる人達を國賊か、非國民かの如く感違ひをして居るものもある。この偏見は今尙多くの人々の心に残り、基督を信ぜんとする人の大なる躓の石となつてゐる。この間も鹿兒島のある私の知人が基督教信者となつた時、國の人から、武士かたぎの兩親からキリストを信ずるは、國のため

悪いから止して呉れとの通知を受けて當惑して居られた。これらは皆、世人がまだ、キリスト教の根本義を知悉せないための誤解から起る事なので、誠にお氣の毒に堪えない。それ等の人々に私は、『實に眞個のキリスト教は宇宙を貫く、眞理の宗教であつて、人類全部が信すべき眞理である』と申し上げ度いのである。

一體眞理は一である。宇宙を一貫する眞理ありとせば、その宇宙の一部も全部も凡て其の中に包まれてしまふわけである。キリストの示す眞理がこの宇宙を包み萬有を支配する神に關する眞理であるならば、日本に現存する佛教も、神道も、皆なキリストの教へられた眞理の一部分を表現し、更らに思索に思索を重ねて行くならば、結局は、基督の眞理に纏て到達すべき筈のものである、科學といふも哲學といふも、その宇宙の眞理の一部分を取扱ふものである。

大局から見下すとき、凡ての事象は皆な一つの中心によつて支へられるもので、恰も幾本となく出てゐる扇子の骨も、中心に要があつてこそ、バラ／＼にならずに用を辨ずると同様である。末は太平洋、大西洋に流れ込む河も、その本源は、

ロッキー山の分水嶺を右と左に落つる所の谷川である。我々の前に擴げられてゐる種々の問題についての解決も、多種多様であるが結局宇宙の本體なる神の道とその聖旨に従ふ外に出でない。眞理に絶対服従する所に、絶対の自由が生れて來るのである。我々はよく左と云ひ右と云つて争ふが、それは立場を異にした相對的の見方からの相違で、根本の眞理を索ねて見ると、一つの本體を裏と表とから觀て居た事が分かり、争ふ事は愚の至りであらと知るのである。日本國體と、基督教とについての議論も要するに、全くその末葉に促へられて、楯の一面を見る結果であるまいか。登山者に譬へるなら、やつと山麓に辿りついて、自分の道の外に絶頂に達すべき道は他になしと言ひ張つて居るのと同様である。我々は常に『わけ登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を眺むる』の徹底した見解をもつて、山麓に進み行かねばなるまい。キリスト教は最高嶺に立ちて、眞理の月をハッキリ示してくれて居る。我々はキリストの教を充分に體得して見れば、その眞理が、とりも直さず奥深い眞理となり、又儒教、佛教の極致にも、達してをる事を見出すのであ

る。私は國體と、キリスト教との關係を論ずる人達に、先づキリストに來つて見よと申上げ度いのである。

キリスト教を信する者を目して、國體に合せぬとか、甚しきに至つては國賊呼ばはりをする者ありとせば、恰も汽車や、電車の便ある今日徳川時代の參勤交代の時の如く、駕籠に乗つて、雲助の肩に擔がれねばならぬと云ひ張る頑固爺と、五十歩百歩で、識者の物笑の種となるばかりである。日本の現代に、ほんとうの眞理たる基督の宗教を受け容れぬ人がありとせば、そはチョン髡時代のお爺さんが、汽車を化物と見てテク／＼歩くのと同様であるまいか。西洋人の發明した汽車に西洋人と同様の風俗して乗つてゐる事を可笑しいと思はぬ日本人が、宗教に於てのみ毛嫌するのはどう云ふ譯であらうか。歐米と云はず、東洋と云はず、世界のすべての文化を産んだキリストの宗教を信じない程、大なる矛盾はあるまいと思ふ。日本の爲政者が、日本國民が、只表面に現はれた歐米の文化のみを取つて、その本源たるキリストを棄てるのは、丁度飯となるべき穀粒をすて、糠殻ばかり採るのと同様、これ程甚しい矛盾はあるまい。この矛盾を敢てして自ら善とする人は、只キリストに對する知識が足らぬからであると思はれる。

今日本の國家と、宗教との關係を地理的、歴史的の方面から少しく顧みて見度い。地圖を按ずるに、島國の日本は全く亞細亞の極東に位し、太平洋を隔て、東の方、亞米利加洲に面し、更らに東洋大陸に對しては一見した所、支那本土の玄關先、東洋全土の出張店とでも云ひ度い地位に置かれて居る。日本の上古史又は中古史を研究して見ると、魏史や漢書に記されて居る様に、また九州地方の古墳や神社から發見さるゝ器物に表はれてゐる様に、支那大陸との交通は日本の有史以前既に行はれて居つたと思はれる。應神天皇の朝以後より、欽明天皇の朝を経て遣唐使の應酬時代に及び、周時代の文化も、春秋時代の思想も、漢唐時代の文明も、不知不識の間に輸入移植されて居つたのである。その中、最も顯著なるものは儒教と佛教、及びそれに附隨する諸般の工藝である。

一昨年私が支那方面に旅行して上海の講演を終へ、杭州の寺院に、日本眞言密

宗の開祖空海の蹟を尋ねた時、その寺院の、建築裝飾から彫刻の様式が、京都や奈良で見る寺院のそれと全然同一であるのに驚いた。日本の佛教は、支那から傳來し、支那の佛教は、印度から傳來した事は小學校の生徒も知つてゐる筈であるが、足一度支那の地に入つて、支那古代の文化の遺蹟を見る時、日本の文化と、支那の文化と、實に密接不離の關係あることを、更らに痛感せしめられるのである。今日、日本文明と稱する文學、宗教、藝術は日本國自身の産物に係つて居るものは甚だ少ない。支那や、印度や、バクトリヤや、また歐米から輸入されて、茲に至つたものが頗る多い。

或る人は宗教に就て、神道は日本古有の宗教思想で純日本のものであると思つてゐる。日本の神道を大別して眺めるなら、神社神道と、宗教神道との二つがある。神社神道は宮内省の神祇局に屬し、宗教神道は文部省の宗教局に屬し、既に行政管轄を異にして國家が之を取扱つて居る。神社神道は國儀、國禮の上から肇國の神々、皇祖皇宗の大御靈、歷朝皇族の方々の御靈、並に多くの功臣の偉

靈を齋き祀る所のものであるが、其の儀禮や、服裝例へば束帶、冠、音樂は周若くは漢唐の古風を多く襲用されて居ると思はれる。宗教神道は現在十六七派あるが、何れも皆な日本に縁ある神々を本尊に立て、信仰の對象とし、敬神愛國を教綱として居るが、この宗教神道に私は三つの系統があるやうに考へられる。第一は比較的日本古有の思想、信仰、儀禮を傳へたもの、例へば出雲教、大廟派と稱するものである。第二は儒教や道教を延いたもの、例へば平田篤胤の古神道、山崎闇齋の垂加神道、黒住宗忠の黒住教がそれに屬して居る。第三は佛教系統から生れたもの、例へば空海の兩部神道、傳教の山王一實神道、實行教、御嶽教、蓮門教、天理教などが之れに含まれてゐると思ふ。眞言密宗や、天臺宗の密部で、口傳や秘訣として秘密に相承して居る切字法、築壇法、神咒法、神符法、幣束傳、契印法、劍形法等を此等の神道は祈禱儀禮、並に禮拜儀禮に採り用ひ、その教義に於ても天臺の摩訶止觀や、阿沙縛抄や密宗の口傳に係る五行（土、水、火、金、木）、五大（地、水、火、風、空）五色（黃、黒、赤、白、青）

五根(意、耳、舌、鼻、眼) 五輪(口、〇、△、◇、♡) 五常(仁、義、禮、知、信) 五佛(大日、釋迦、藥師、多寶、彌陀) 五方(東、西、南、北、中) 五戒(不殺生、不偷不盜、妄語、不飲酒、不邪淫) 五味(酢、苦、甘、辛、鹹) 五星(歲星、熒星、鎮星、太白星、辰星) 五臟(肝、肺、腎、脾、胃) など云ふ印度、波斯乃至希臘思想の混淆から成立した宇宙觀、人生觀をそのまま踏襲してゐるやうに考へられる。

南洋に旅行した一友人の話によると、現今日本の神道で使用してゐる板の幣は南洋で蠅を拂ふために用ゆるものと同様の形である。神官達の用ゆる笏も、彼の地で使用される床の間の飾り、櫛の立て工合、それから家の建方、草葺の様子等殆ど日本と同一であるとの事である。

此等に由りて見るに、宗教は人類の存する所には必ず影の實體に伴ふ如く存したものである。また一方、人類の生み出した思想は、宗教と融合して、有ゆる交通機關を使つて、恰も水の低所を求めて流れ行くやうに、また無線電波の八方に飛び擴がるやうに、人類の生存する地境を尋ねて世界の隅々迄行き渡らねばやま

ぬものである。日本は東洋の玄關先であり、出張店である。世界の思想、宗教、文明の大なる渦巻は決して日本を取り残しはしなかつた。却て世界に於ける諸多の思想と、宗教の輻輳する地點として價值づけられて居る。日本には古有の宗教があつたに違ひないが、その特徴とする點は、此等多くの外國の宗教や、信仰や、思想や、儀禮を適當に取捨摺梅して、之を日本化した所に獨歩の點があると信ずる。

今日、國民一般が日本の國教かの如く思つて居る佛教も、其源は印度の釋迦に始まり、支那を通して、日本に傳はつた外國の宗教である。日本で最も多くの信者を有して居る東西本願寺の眞宗も、淨土佛教の一派で、その思想、信仰の系統は印度の龍樹、天親、支那の曇鸞、道綽、善導から流れ來つたものである。決して日本固有の宗教でない。禪宗でも、日蓮宗でも、淨土宗、華嚴宗、三論宗と云ふやうな佛教各宗も、その源は何れも印度、支那で大成して日本に持ち込まれた外來の宗教である。それであるから佛教研究者はこれらの思想系統を區別するたため、日本現在の佛教各宗を呼ぶに日本天臺、日本眞言、日本三論など、呼んで、

支那や印度のそれと相違ある事を示して居る。それらの相違點は、此等佛教各宗が日本化したる事實を立派に立證し、裏書してあるものである。

明治聖帝が、維新の始め西洋文化をお容れになつたのは、彼の長所をお探りになる思召であつたと拜察し奉る。されば表面の文化のみを採るのでなく、その文化を産んだ根本をつかむことが御趣旨に叶ふことであると信ずる。表面華やかな文化に酔ふことは、既に過去の時代と過ぎ去つた。大正の現代は、その文化を産み出したその文化の根底をなす活ける宗教を求むる時代でなければならぬ。宗教は形式丈けではなく、その根底の眞髓、その中心の生命に觸れなければ無價値である。古今東西、眞理は一つである。汎神も、多神も、無神も、學究的に登りつむれば、結局はキリストの教へられた唯一の神に到達せざるを得ないのである。

そこで第一に注意せねばならぬ事柄は、所謂キリスト教と稱する中にも、偽のキリスト教のある事である。このデモ基督教のあることが、日本の人々を躓かせる大なる石となつて居る。キリストと云へばキリシタンバレン其まゝのものと思

ひ日本を政略的に侵略する手先に使はれたものであるとの、先入主の觀念に囚へられて、無暗に嫌ふことである。ローマ法王廳や、西班牙から織田、豊臣時代及び徳川時代に傳へられた政略的のキリスト教と、今日のキリスト教とは全く違ふのである。この事を闡明するはキリスト教に對する一般國民の誤解を解く重大の事項であると思ふ。

第二に、眞劍に考へなければならぬのは、キリストの教へてある眞理が、眞の眞理で、キリストの教へる神は、宇宙の生命の本源で、一切を包含するとの一事である。例へば花咲く野邊に出で、輝やく太陽から受ける溫熱も、亦ストーブに石炭を燃やして受ける溫熱も熱たるに差はないが、前者は無限、後者は有限である。溫熱そのものから言ふなら、石炭の溫熱の根源は幾億年前に太陽の熱が樹木に吸収せられ、そのエネルギーが、纖維中に蓄積せられて地下に埋没、貯藏せられたもので、言はゞ太陽の蓄熱器（蓄音器や、蓄電池の如く）として幾億千萬年昔の太陽熱をそのまゝ現代に於て發して居るものである。故に地球上に於ては、熱

の根源は太陽にある。太陽熱に全身を浴する時無限の温熱を感じる。即ち從來の日本人は石炭や木炭より暖氣を取る事は知つて居たが、更らに根本に遡つて光熱の根元たる太陽を仰ぐ事を忘れて居たかの如くである。基督の啓示した神は太陽にも比すべき宇宙生命の本源の神である。佛教、儒教、神道は夫々太陽の光を反射する地上の一鏡面の如きであるまいか。一つの光には違ひないが、吾人は更に天日に輝き渡る眞の光源を仰がねばならぬ。キリスト教は形式的な教會のみが之を代表するものでない。眞のキリスト教は山奥の岩蔭でも、浪打つ海邊でも、野原でも、繁華な街角でも何處でも、純眞な人の心が、天の父なる神に向つて「お、父よ」と叫びつゝ天の父の完きが如く、地に在つて完き愛の人なる實生活中に存するのである。聖書によつてこそ、ほんとうに、明確にキリストの教へ給ふ神を信することが出来ぬ。例へば、製造元を知つて居るものは、小賣店から買はずに、直接製造元に行つて新しいものを安く買ふであらう。製造元を知らぬ者は高い不良品を小賣店で満足して買つてゐる。キリストの教へた神の道は宇宙の生命の製造元を教へ

た者である。然しキリスト教にしても、日曜學校の先生にしる、教會の牧師にしる、製造元のある事は教へて居ても、果して製造元に行つたら賣つて呉れるかどうか、ハツキリ教へないで自分の教會へ買ひに来れとのみ勸むるものがある。これ非常な矛盾、自家撞着である。この製造元をハツキリ知らずのが、眞の傳道であるが、今日迄のキリスト教の躰きは、この點をハツキリせぬ人達によつてなされてゐるのではあるまいか、しかし此の躰きは決して聖書が悪いのではなく、傳へた人が悪いのである。私はいつもどうすれば、ほんとうのキリストの生命の力を日本の同胞に傳へ得べきかを考へさせられるのである。

私共日本人が外國へ行つても決して肩巾の廣い感じはしない。背は低い、色は醜い、金は無い、能力は足らぬ。日本の外國に熟知せられて居るものは、日本の暗黒面の事柄が多いのである。全くはづがしくて穴にでも入り度いやうな氣がしたが、只一つ有りがたいと思つたのは、日本丈にしか見られぬ國民と皇室との間に美しい關係のある事であつた。不統一状態にあるロシヤにこの關係は見られぬ。亞米

利加は素より各國人の寄り集りの國である。英國にしても皇室と國民との關係は四五百年を出でぬ。三千年に近い長い歴史を持つ萬世一系、唯一無二、皇統連綿の君主を奉體するものは我日本丈である。統治中心が、千古萬古金甌無缺に、日月の光と共に渝なき所に我日本の誇りがある。日本國體には、他國に見られぬ美點があると共に、國民性にも亦他國に見られぬ獨特の美點を持つてゐると思はれる。世界の國家を學校の生徒に譬へて見るなら、一級四十人あつて同じ先生から同様に學ぶのであるが、生い立ち又はその性質に依つて兒童の能力、天才の延び方が違つて來る。その如く、日本にも特別の生い立ちと、氣質をもつてゐるか、それに應じた政體と生活様式を持たねばならぬ。日本には、日本獨特の個性と長所があり、他の國に比して違ふ處があらねばならぬ。同じ羅紗地の洋服でも、西洋人にあふやう作つたものを、其まゝ日本人が着たとすると、頗る不體裁のものとなる。やはり日本人には、日本人として身體に適ふやう短かくして用いなければならぬ。

それと同様に、神の教は同じでも、日本人には日本人に適する様式が、必要である。然しながら唯一の眞理たる神の教は、國體の如何に係らず、人と時と場處に超越して、普遍的眞理でなければならぬ。即ちキリストの教は國境を超越し、而も、有ゆる國家を抱擁し、人類全部に關する眞理の宗教である。他に見られぬ美點がある。此の點から言つても日本の歴史と、國民性が是非持たねばたらぬ眞理の道が必ずその中に存するわけで、唯一無二の道がキリストの宗教の中に存すると私は確信するものである。我々の信ずるは形式的なキリスト教にあらず、また從來誤解された宗教にあらずして實に、基督の生ける生命の宗教である。私は宇宙の眞理を中樞軸とする眞の活きたキリストの宗教を、謹んで 上皇室より下萬民におすゝめ申し上げたい。只今では、皇族方の内に於かせられて基督の宗教をお求め遊ばす方があらせらるゝ由、仄聞するのは日本のため誠によろこばしい事と御歡び申す次第である。

日本國民の多くが、基督教と國體又は皇室とが相容れぬと誤り思ふ理由は次の

二點に歸着すると思ふ。

第一、我が日本では天皇陛下が神様で在す、然るに基督教は、唯一の天の父なる神を拜すべきを教ゆる。即ち、宇宙の支配者と、一國の支配者との關係が、一般國民に徹底して居ない事が一つの理由である。

第二、日本國民は、皇祖皇宗の大御靈、並にその他の皇族、功臣の御靈を國家の宗祠として、崇敬し之れが祭祀を尤も重んじて居る、基督教がこの點に於いて一致し難いと見るのが第二の理由である。

この二點は、眞の基督教を理解せぬ人達には斯うした考を持つことは一應尤な事である。これに就いて私の所信を申し上げたい。日本人の多くは、「神」——カミなる言葉に囚はれて居る様に見受ける。カミなる言葉には、種々なる意義が含まれてある。

第一は、日本固有のカミである。古神道の平田篤胤は「神は上なり、上は首なり、上古の人は今代の神、今代の人は後代の神なり。上古の民、異なるもの、畏

るべきもの、思慮すべからざる靈と稱して、人の上に置く」との意味を述べて、古事記、日本書紀に顯はれた種々雑多の神、または狼、雷を例に引用して居る。私達は、神武天皇の建國以前に日本の國土を經營し、統括し給ふた方々の尊稱として、神なる言葉を用ふると同時に、その他の事物に對しても、畏敬の意味、尊敬の意味で、カミなる言葉を慣用してゐるのである。その内容には、道徳的な稱呼と、宗教的な稱呼とが混淆してゐるやうに思はれる。宗教學でいふ人類の初期宗教思想に浮んだ神の觀念を、そのまゝ、襲用して居るのであるまいか。

第二は、佛教、儒教の傳來と、その移植に伴ふて附隨して來た支那、印度の神である。毘沙門、帝釋、摩利支天、不動明王、聖天、辨才天、大黒天といふのはその重なる印度神で、金神だの、八將神だのは、重なる支那の神である。これ等は全然宗教的の意義を以て日本に輸入されて多くの迷信を産み出して居るけれど、之に慣れた國民は、之れに對して何等の反省を持たぬのは甚だ疎漏であるまいか。

第三は、希臘神話に顯はれた神や、西洋文學に伴ふて傳へられた色々な神であ